

書評

第97号
1991. 11. 7

特集

湾岸戦争を問う



書評編集委員会

特集 湾岸戦争を問う

『書評』編集委員会より

4

書評

アメリカの戦争とその決定過程

——『大統領の戦争』と『指令官たち』を読む——

平井 友義 7

講演録 湾岸戦争のその後、パレスチナ問題を考える／真の中東和平とは？

講演基調

講演録・質疑討論

14 11

投稿

“現代思想の快楽”そのⅢ

『タダ屍体解剖』特別編 〈世紀末の光と影〉

松原 恵二 48

豆満江自由港化論について

——一九二〇年代と今日——

西 重信 60

連 載

おいてけぼり——宮本輝試論 Ⅷ……………芝田 啓治 70

在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート XIII

大阪市立朝鮮人学校の発足……………梁 永厚 82

小説のなかの異境

——ロマン主義文学論序説——その一三……………池田 浩士 88

研究余滴 象徴主義 6 第2章 象徴主義の先駆者たち

Ⅲ アルチュール・ランボー (1854~91)……………山村 嘉己 98

日本中国ことばの来往 ゆきぎ その42……………芝田 稔 112

短 評

『ちくま日本文学全集 福永武彦』(筑摩書房)……………119

『他界で遊ぶこどもたち』芹沢 俊介(青弓社)……………120

『国際化のゆらぎの中で』粉川 哲夫(岩波書店)……………122

羅針盤……………2

投稿募集のお知らせ……………123

編集後記

題字 ■ 網干善教(文学部教員)

1991.11 羅 針 盤



この「書評」が出る頃には、既に、宮沢喜一首相『選出』後の臨時国会の開催が目前に迫っているだろう。ここ数日、新聞紙上においては、次期自民党総裁選出と、「去りゆく海部俊樹の人物評」でにぎわっていた。あたかもそれが焦点のように扱われてきたが、この「総裁交替劇」は単なる「おまけ」なのである。自民党政権にあって、主要な問題であるのは十一月の臨時国会なのである。

去る十月四日、国連平和維持活動法案（以P K O法案）は、「継続審議」となり、廃案にこそならなかったものの、制定はまぬがれた。「継続審議」決定以前から、大手新聞紙上では、十一月臨時国会の予定は報道されていた。そして今回の「継続審議」も、言わば、政治改革という他の議題に手間取り、P K O法案にまで手が回らなかった、という程度の事である。だからこそ、十一月の臨時国会は、P K O法案制定のために、自民党政権になくってはならない国会なのである。

今や世論調査では、『国際貢献はするべきだと思う』人は七割近く存在するとの報告をしている。自民党政権はこの機に乗じて、P K O法案の制定に自衛隊の海外派兵へと道を切りひらかんとしている。思い起こせば昨年の十月五日、「国連平和協力法案」は、廃案になった。

それは『中東危機』と呼ばれる情勢の中で、戦争への危機感が強かったこと、が廢案に向けた運動の要因として大きく影響していた。しかし、すぐに、自民・公明・民社の三党は、『國際平和協力に関する合意覚書』なるものを作成し（九〇年十一月八日）、『戦後（基本的にPKOは戦後を対象としている）を射程に入れた、自衛隊活用方法を探っていたのである。ここでは、その一字一句における批判を展開することはしないが、『この合意した原則にもとづき立法作業に着手し早急に成案を得るように努力すること。』を見れば、PKO法案の法制化策動はすぐに見てとれる。

事実、一月十七日の『湾岸戦争』開戦以降、九〇億ドル支援はもちろんのこと、『難民救助』を口実とした自衛隊機器使用についての論議は、確実に、『三党合意覚書』を意識したものである。そして四月二六日の、ペルシャ湾へ向けての掃海艇派遣は、自衛隊の海外派兵への実績を作ってきた。

そこまでして、日本政府が自衛隊海外派兵に固執するのはなぜか。簡単に言えば、地域紛争に対して（例えば湾岸戦争であり、カンボジアである）、直接的に利害を持つ国がそこへ介入し、権益を確保する構造の中で、七〇年代以降、海外投下資本の増大している日本政府にと

って、軍事介入の可能性を拡大することは、つまり自国の資本を守り、時には拡大（侵略）することを意味するのである。

「國際貢献はいいことだ、自分の国を守るのは当然だ」と多くの人は言う。しかし、『自分の国を守ること』が他の国の犠牲の上に成り立っていることを知った上で、同じことが言えるだろうか。先日十月十日の新聞で、日本が援助国として世界第二位だ、なんて事が載っていたが、その「援助」が、返却を前提とした「借款」のため、利子だけで莫大な額になり身動きがとれなくなっている。また、日本での売れ残り、『援助さえすれば』といった物（発想）の押しつけで、被「援助」国の経済、生活スタイルが破たんし、ひたすら崩壊へと、日本が導いているのである。そして、日本では、『経済援助』と銘うった企業進出により、（数多くの矛盾を抱えながらも）「安定した」状態が続いているのである。一方では明日の食糧にも事欠き、一方では『作りたてをあなたに！』などと数分単位で食物が捨てられているのである。

十一月臨時国会で焦点となるであろうPKO法案と、そして巷に広がる『國際貢献論』のまやかしを、私達はどこまでも論破し、打ち砕かなければならないだろう。

（一九九一年十月十六日）

特集

湾岸戦争を問う



＝「書評」編集委員会より＝

長く続いた東西冷戦構造は目まぐるしい勢いで崩壊へと向かい、ドイツ統一など社会主義国家の大変革が次々と進展していく状況の中で、イラクによるクウェート侵攻はあたかもデタントムードで染まりつつあった平和の曙光を再び黒い暗雲で覆い隠すかの感があった。

確かに、イラク軍の一連の行動は無謀であったし、「国際新秩序」あるいは「国際協調時代」の幕開けにあって、その国際的認識の低さは目に余るものがある。ところが、本来の目的であるクウェートからのイラク軍の撤退要求という国連決議は、途端にアメリカの思考へとスライドし、武力行使まで容認してしまった。湾岸危機は突如起こった事態として、アメリカを実質上の中心とする多国籍軍が編成され、「正義の戦争」と銘打っては、「平和の結晶体」としてその猛威を顕示した。

しかし、この湾岸戦争への流れは唐突に勃発したのではなく、アメリカの描くシナリオの中の文脈に当初から記述されていたことを認識しなければならない。ペルシヤ湾岸地域が石油資源の宝庫であることから、自国にとって安定した石油権益を確保すること、ひいてはその支配権をも牛耳るという戦略を描いていたのである。つまり、「国際新秩序」のムードともあいまって、アメリカ主導型の支配秩序への当然の現れとして、湾岸戦争は格

好の材料だったというわけである。

このアメリカの描くシナリオに日本が組み込まれてきたことは言うまでもない。そして、湾岸戦争がわが国の政治の貧困さを暴露するには余りに充分だった。揺れに揺れ動いた日本がこの戦争で明らかにしたのは、結局のところ、問われ続けた国際的責任への返答というより、日米関係の新たな結束であり、日本の対応は日米外交としてでしか表現の術を持ち得なかった。すべてがアメリカへの追従型外交であり、何ら自主的な政治判断はなかったのではないだろうか。平和国家理念を唱える日本こそが先陣を切って、戦闘開始を非難し、直ちに和平会議を設定する任務が当然にあったであろう。

事実は全く逆であった。この間日本政府が努力したのは、自衛隊を海外派兵させることを政令の手直しによって公然と押し進めようとし、国連平和協力法案は民衆の強い反対とともに廃案になったものの、手を替え品を替えてはゴリ押しの海外派兵を自論んだということだけではないか。そして、戦費調達として九〇億ドルをアメリカに貢ぎ、実質上、大スポンサーとして湾岸戦争に加担したのだった。これを機に、日本は恒常的に自衛隊を海外へ出兵できる体制をこしらえようと画策している。

「平和」や「国際貢献」といった美辞麗句をはべらせたが、



実際は多大な殺人行爲への手助けとなつてゐることに気が付かないのであろうか。

湾岸戦争はこれまでの戦争とある点において性格を異にしてゐることがある。それはマス・メディアの威力である。特に顕著だったのはテレビジョンの発達ではなかつたか。テレビは活字メディアを超越し、その精度と明確さにおいて他のあらゆるメディアより優つてゐた。対岸の国の状況を緻密なまでの映像によつて、瞬時にお茶の間に映し出した。まるでTVゲームを眺めてゐるかのように、爆撃の命中精度の確かさはかりが目に焼きついた。戦争はテレビ・ジャーナリズムの速度でもつて逆にリードされるようにさへなつたようだ。

しかし、果たしてテレビなどのマスコミ報道は我々に真実を伝えたであらうか。そこではアメリカの嚴重なる報道規制によつて、西側に偏重したものだけが伝達され、絶えず情報操作が行われたのである。世界中に二四時間バクダッドからの映像を送りつづけたCNNは、どこよりも早く報道することを賞き、延々と「湾岸」を生中継した。また、日本でも偏向した報道が、これまで偏向した世論を形成せんとした。だが、溢れんばかりの情報洪水の中で忘れ去られようとしていたのは、戦争の舞台だったアラブ国家であり、その民衆だったのだ。

サダムIIフセインがクウェート撤退とリンケージで解決を迫つたパレスチナ問題は、今後の中東秩序の再構築を考へていく上での最重要課題であり、まさに核心である。しかし、ここでもアメリカが主導権を執り、世界超大国の凄腕を振りかざすというレールが敷かれてゐる。

あるアメリカのジャーナリストも指摘してゐるが、アメリカは経済衰退はあるものの依然として世界最強国の座に有り続けるであらうことは明らかだ。このことは引き続き起こつてゐる世界情勢の大転換、例えばソ連の変革に伴う貢献問題においても、その覇権構造は永続的に変質しないことを意味する。眞の世界新秩序を模索するとき、この根本的な構造の改革は決して避けては通れない。

湾岸戦争はこのほかにも様々な問題を我々に投げかけた。油田破壊による環境汚染問題など、原油まみれになつた海鳥の悲壮な姿が未だに記憶に新しいところだ。そして何より、この戦争が我々に問ひ正してゐることは、今現在の平和に浸りきつた生活態度そのものであり、他人の家の火事程度に片づけてしまふ受け止め方自体ではないであらうか。

書

評

アメリカの戦争とその決定過程

——『大統領の戦争』と『司令官たち』を読む——

平井友義

イラク軍によるクウェート侵略に始まる湾岸危機とそれに続く湾岸戦争は、ポスト冷戦の世界がいかに脆く不安定な土台の上に立っているかを明らかにした。冷戦の終結とともに期待された「新国際秩序」が、実はアメリカの圧倒的な軍事的優位に支えられた一極体制にほかならないこと、しかも何百億ドルという戦争の費用がアメリカ以外の国々によって負担されたように、この一極体制もきわめていびつなシステムにすぎないことも露呈した。同時に湾岸危機から戦争へのプロセスは、いわゆる南北問題が東西対立とどのように複雑にからみ合っていたかを白日のもとにさらけ出した。そもそも砂漠の一大

軍事国家イラクの出現は、東西両陣営からの気前のよい軍事援助と武器売り込みなしには不可能であったし、イラク側のソ連製兵器に対して決定的な強みを発揮したアメリカ軍のハイテク兵器は、もともと対ソ戦用に開発され整備されてきたものであった。いずれにせよ、「新国際秩序」の試金石となった湾岸の危機は、戦後の国際政治の主要な変動軸の一つであり続けた中東紛争の構図をまだ基本的に修正するまでにはいたっていない。

ここで取り上げた二つの著作は、どちらもアメリカの戦争としての湾岸戦争（作戦のコードネームは「砂漠の盾」から「砂漠の嵐」に変わっているが）の準備過程を



主に扱ったものであるが、同じ対象にちがった観点から切り込んでいるために、両書を比較対照することによって、この戦争のイメージに立体感を与えることができる。

『大統領の戦争』は「イラクと対峙したブッシュの二〇〇日」という副題が示しているように、ブッシュ大統領個人の動きに焦点をあてて、危機から戦争へいたるアメリカの内外政策の推移をフォローしているのに対し、『司令官たち』の方は、アメリカの最高軍事指導機構を

なすホワイト・ハウスとペンタゴン（国防省）における決定過程を些細に検討している。

そもそも国家の対外政策分析のレベルには、キューバ危機に関するG・アリソンの古典的研究（邦訳『決断の条件』中央公論社刊）が見事に例証したように、国家の意思決定をあたかも合理的に行動し判断する一個人のそれと同一視する見方と、官僚機構という生身の多くの人々をかかえるチームのなかでの虚々実々のカケ引きの所産ととらえる立場がある。（このほかアリソンは、既存の手続きの適用の結果いわば自動的に生みだされる決定という第三のタイプをあげている。）このような分類に従えば、『大統領』は第一のレベルの視座から書かれ、『司令官』は第二のレベルに属している。

イラクの侵略に対するブッシュ大統領の反応は、ヒトラーとサダム・フセインを重ね合わせ、決して宥和政策はとらないとするものであった。この決意は時間が経てば経つほどブッシュにとって固定観念となり、終わりの方では側近もはらはらする程、ブッシュ対サダムの「白昼の決闘」に似てきたようである。そしてこのようなブッシュの態度は、かれの育った東部エスタブリッシュメントの環境や戦中派としての体験に規定されているといえるのが、『大統領』の説明である。『司令官』の方もほぼ

同じ見方をしているが、興味深いのは、ブッシュの危機管理のスタイルについての記述で、かれは前任者レーガンとはちがいが、何から何まで自分の眼でたしかめなければ安心ができないたちであり、このような陣頭指揮型のリーダーにしばしばみられるように、「みずからくりかえし行った宣言のためにぬきさしならない立場に追い込まれた。」いうまでもなく、ブッシュの動機をもっぱら個人的資質や経験に還元するのは余りにも単純であるが、両書ともこの点についてはこれ以上の追求は最初からあきらめているようにみえるのは残念である。

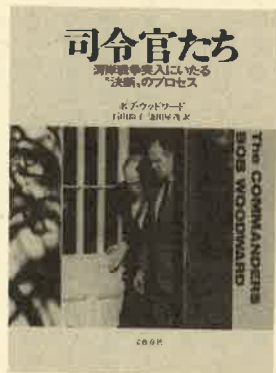
「司令官」に含まれる最も重要なメッセージは、ブッシュ政権の登場以来、いかにシビリアン・コントロールが貫徹されているかということである。たとえばパウエル統合参謀本部議長は、ブッシュ大統領が当初のイラクのサウジアラビアに対する侵略拡大の防止という消極的な軍事目標をクウェートの軍事力による解放という積極的目標に転換するまで、一度も意見を求められていない。これは驚きですらある。もっともシビリアン・コントロールが確立されていることが、ただちに戦争への安易なめり込みを防ぐ保障になるかといえば、必ずしもそうとは限らないようである。湾岸危機の時期を通じて、戦争オプシオンを支持する主戦派はブッシュとスコウクロ

フト国家安全保障補佐官であり、反対に交渉オプシオン（経済封鎖措置も含む）に賛成していたのはベーカー國務長官とパウエル統幕議長であった。チェイニー国防長官はブッシュとベーカーの二人にはさまれて中間派的立場をとっていたようにみえる。戦争で勇名をはせたシュワルツコフ中央軍司令官ですら、戦争オプシオンというオルタナティブには最後まで乗り気ではなかったことも書かれている。こうしてシビリアン・コントロールの意義は、平和的な文官が軍国主義的な戦争のプロたちを抑えるという教科書的な公式のなかに見出されるのではなく、現代の戦争が「自動操縦システム」（『司令官』）として進行していくという恐るべき危機を減らすことにこそある。それにしても、アメリカの戦争準備がまず大軍のサウジ集結から始まったことは、兵力の小出し投入の失敗というベトナム戦争の苦い教訓をふまえていたのであり、この意味でアメリカは今日もなおベトナムの長い影をひきずっていることがわかる。そしてアメリカにとって「ベトナム・シンドローム」が持つと同じ意味を、ソ連の「アフガニスタン・シンドローム」は持っている。このことが、アメリカ主導の「新国際秩序」作りに協力を迫られるソ連の行動を解く鍵の一つになっていることも、ここで取り上げた二冊の書物のなかでしばしば指摘

されている。

ではこのようにさまざまな思想と感情の持ち主からなるアメリカの最高指導部での意思の統一は、どのようにして可能だったのであろうか。『司令官』のなかに、アメリカ政府首脳がいよいよ軍事力によってクウェートからイラク軍を追い出すことを最終的に決定した昨年一〇月末のシチュエーション・ルームの討議の描写がある。そこでは一つ一つの選択肢のプラス、マイナスを冷静に検討して最後に残ったものを選び出すというやり方ではなく、とりとめない話題のやりとりのなから、全員の意見がブッシュの方針に自然に同調する様子がえがかれている。このようなところを読めば、今回の湾岸危機は、やはりアリソンの第二モデルがもつとも適切だなという感想をもってしまおう。

ともかくどちらの本も、よくぞここまでと感心させられる程、登場人物が丸ごと書き込まれているが、これはさまざまなソースからおびただしい情報を探り出す著者たちの力量もさることながら、インタビュアーに答える側も、「守秘義務」といった不可思議な沈黙の壁のなかに安易に逃げ込もうとしない姿勢があるからであろう。ここには情報と社会の関係について、われわれに考えさせる大きな問題がある。それにもかかわらず、一旦戦争が



▲P. ベクストン、E. ルー『大統領の戦争』（実業之日本社）と
B. ウッドワード『司令官たち』（文藝春秋）

始まると、同じアメリカでまさきに犠牲にされたのは報道の自由であり、生活のすべては元通りであるのに、ないのは報道の自由だけとハルベースタムに揶揄される状況（『戦争ゲーム』筑紫哲也訳）が生まれるという逆説、どうやらこのあたりに湾岸危機の謎がかくされているように思えてならない。

（一九九一・一〇）

＝講演録＝

湾岸戦争後、 パレスチナ問題を考える。 真の中東平和とは

基調

I 湾岸戦争は何故起こったか

一九九一年八月二日のイラクのクウェート侵攻をきっかけに、米国を始めとした世界各国はイラクを非難し、次々と経済封鎖などを行った。そしてついに、一九九一年一月一七日には、史上最大と言われる空爆をもって、米軍を中心とした多国籍軍の仕掛けた湾岸戦争がはじまった。

しかし、このイラクのクウェート侵攻は、イラクの「領土拡大」が主要な目的ではなく、米国を始めとした資本主義諸国の手先として動くクウェートを通じた、中東支配を自論む資本主義諸国への反撃であった。

そして、米軍がその命題とした「クウェート解放」も、それ自体が目的ではなく、イラクを潰すことで、中東における支配権を確立しようとするところに目的があるのは、過剰なまでのイラク軍への攻撃を見れば分かるだろう。

一月一五日を撤退期限とし、それまでに数度にわたって行われた調停案を『撤退か戦争か』で、戦争へゴリ押ししてきたのは米国である。

米国の目的は、いわゆる「緊張緩和」と言われる中で、米を中心とした新支配秩序の再構築、とりわけ中東とい

う石油貿易における米国の権益確保に他ならない。

そして、その新たな権益獲得戦争において、他の資本主義諸国も、自国資本主義における石油権益獲得のために「湾岸戦争」へと参戦したのである。

こういつた、中東における資本主義諸国の争いをいち早く見ぬいたのはパレスチナ民衆たちである。だからこそ、反米としてのフセインを彼らは支持したのである。確かにフセインの侵攻は肯定されないが、石油の権益のために、あらゆる人民を戦火に巻き込む米国ほどの悪玉なのだろうか。

Ⅱ 日本はどうしたか

日本政府は、一月一七日開戦直後に、多国籍軍支持を表明し、即座に九〇億ドルの軍事援助を決定した。これは、私達民衆の意識とは無関係に、日本が、湾岸世相の最大のスポンサーになったことを意味する。

湾岸戦争に、何らかの形でコミット（参与）することが、その後の石油権益をめぐって大きな意味を持つからである。だからこそ、日本は、九〇億ドルの援助を行い、「国際貢献」としてムリヤリに自衛隊機・員の派遣をしようとしたのである。

同時に、何としてでも、自衛隊を海外派兵させたい、



という目論見とも石油権益の利害は一致した。九〇年一〇月の国連平和協力法を始め、「難民救援」を口実とした自衛隊機の派遣、そして「終戦」後の四月にも掃海艇が派遣された。

Ⅲ そしてパレスチナは

パレスチナ問題は、フセインによって、リンカーンで解決される物として取り上げられた。

パレスチナは、米英などの資本主義国の手先のイスラエルによって、幾度となく攻撃され、破壊されてきた。国連でさえも、余りのパレスチナ侵略のひどさに、決議を上げ、パレスチナを承認した。しかし、イスラエル、米国はそれを一切無視している。イラクのクウェート侵攻は非難し、イスラエルのパレスチナ侵攻は認めるといった米国の態度は『ダブル・スタンダード』と非難されている。

しかし、湾岸戦争の間は注目されたパレスチナが、「終戦」と共に忘れ去られようとしている。

米国の中東侵略の象徴、パレスチナは葬り去られようとしている。

日本政府は、パレスチナに対して、時には友人のふりをし、時には敵として対応してきた。それは日本だけで

はなく、他の資本主義諸国についても同じである。

それは、中東における石油の権益を巡る外交政策である。現在のパレスチナ民衆の置かれている状況が、そう言った各国の利害で左右されてきた結果なのである。

Ⅳ 私達の今後

現在、日本では先の掃海艇派遣の実績をもって、PKOへの自衛隊参加を狙っている。

これは「国際社会への貢献」と銘づつて、自衛隊を海外派遣させようとすることに他ならない。そしてそれは明らかに「第三世界」諸国に対する軍事的脅威として存在するだろう。

今回の湾岸戦争における日本の行動を見ても、日本が「第三世界」などの小さな国を踏みつけたところで「繁栄」を築いてきた国だということが分かる。

そこで今、私達は、そのような事実を事実として受け止めなければならない。

私達は、他者弱者に対する抑圧の上の繁栄を甘んじて受けてはならない。

この六月二十七日に行われた講演会をきっかけに、日本とパレスチナ、日本と「第三世界」との関係について考えていければと思う。

講演録

湾岸戦争後、パレスチナ問題を考える

——真の中東和平とは——

信原孝子

世の中に疑問——遠いパレスチナへ

ちよつと高い所からで何か話しづらいのですけれども、私の自己紹介から話を始めていきたいと思ひます。私は一九七一年の春に日本からレバノンという国に医療活動として出かけました。七一年の春だつたと思うけれども、日本を出てレバノンに行つたと思ひます。いわゆるイスラエルという国家内の被占領地といわれる地域、今アラブ系住民がイスラエル市民権を持つて住んでいる。一九四八年のイスラエル建国以来いわゆるイスラエルと呼ばれている地域、そして軍事政権が占領しているヨルダン

河西岸を中心とした地域とガザを中心とした地域と、大きく二つに分けた地区があるんですが、それらをひっきりめて元のパレスチナという地方があります。

そこから一九四八年に難民の一〇〇万人くらいが戦争で亡くなった。アラブ諸国周辺で、一番多くの難民がいたのがヨルダンで、その次くらいがレバノン、といったような感じで、レバノンは旧パレスチナの北にあたるわけです。国境を丁度南レバノンと北イスラエル、パレスチナと隣接していて、準備して頂いた地図の中にパレスチナの地図があつたと思ひますが、大きな方の地図、「湾岸戦争の経過と日本の対応」の資料がありますね。

これを見ますとイラク・シリア・レバノンという字が書いてますね。東から西へと。そしてこのレバノンの南に、本当は私達は向こうでは絶対イスラエルとは言いませんでしたが、パレスチナがある。そして地中海の東岸に当たるわけです。レバノンという国と国境を接していて、一九四八年に約五〇万人の難民が国連に登録されています。一九七一年に何故私が行ったのかと言うと、実は一九六五年以降の日本ではヴェトナム戦争反対の動きがあったのですけれども、それが終わってしばらくしてから、大学でいわゆる学園紛争という闘いがあった、そのあとで私なんかは医者になって何をするのか、と思うわけですけれど、医学部という所は病院が実習だと言いまして、既にインターンを終わって研修、ただ働きをしていました。

機動隊が入ったあとだったのでもう帰るわけにもいかず、どうしようかと迷っている時に、いわゆる赤三日月社というのがあって、進歩主義的な人達で、赤三日月というのはイスラム教のシンボルだったんですけれども、日本で言えば日赤がありますが、そういう感じの医療機関ということ、そういう所にボランティアの医者がこないかということで、そこに行った人からの紹介がありました。日本で「おもしろくないわ」と思いながらほう

つとしているよりも、そういう所へ行つて厳しい状況というものを勉強してくるのもいいんじゃないかと思つて、それじゃまあ行つてみようと思つたのがきっかけだったんです。ただ、その頃はパレスチナ問題と言つても新聞ではほとんど書かれてなくて、一九七一年の直前の今のヨルダンの国王、フセイン国王が率いる軍隊によってパレスチナ難民キャンプに空爆し、そして市街戦があったんです。一九七〇年の九月、「黒い九月」という弾圧です。

その直後、エジプトのいわゆる青年将校団を率いて、国政を転覆させたというか、いかにもクーデターに近い形だったと思いますが、その将校達の蜂起によつてエジプトが共和国になった。その初代の大統領のナセルという人が、丁度死んだんですね。一九七〇年の「黒い九月」の直後に死んで、新聞はそれが一面トップに出て本当に大きな記事だった。二万人のパレスチナ人がヨルダンで殺されたわけです。それでやつと国際的にパレスチナが注目されるようになって、シリアとかイラク、あるいはそういう周りの諸外国もやつと新聞に出るようになって。七〇―七一年の事で、パレスチナというのは丁度その頃出てきたのだと思うけれども、何かハイジャックとかのニュースがあつて、私はそういう非常に遠い国だと

いう事であまり興味をもつてなかったのですが、そのような話を聞いて、そうか難民キャンプがあつて戦争がある。何かゲリラみたいなのがあると、それくらいしか知らない。

ともかく当時の日本の大学生は正義に燃えたというとおかしいんですけれど、自分は知識も大してなく、お金もない下っ端の学生、時代がそうですから大学の在り方に対して、お金で物事を処理するのはいけないとか、やつぱり改革しなきゃいけないとか、非常に単純な思いなんです。しまいに機動隊が入つて。その当時はひどい大学にたてこもつて放水やつて、とそんなことがあつたわけです。非常に世の中おかしいと思つたけれど、では何故学生だけがバンバンやつて、機動隊が入つちやつてそれで終わりになるのか、何故世の中がよくならないかという思いがあつた。一度向こうへ行つてもっと自分を鍛え直そうと思つて、何も知らない人間が、自分だけで考えてたんじゃダメなんだ、と思ひパレスチナへ行つたんです。

パレスチナの人々との出会い

最初行つた時に難民キャンプに入つたんですけれども、ともかく食べ物は何もなく、いつも戦争でとにかく大変

だろうと感じて行つたもんですから、あんまりびつくりしなかつたといえなくもない。

私が行つた七一年のレバノンには、最初飛行機で行きまして普通にお金を集めて、私は医者なんだから友達からお金くらいは出してもらえると聞いて、少しはお金も持つて行つたんです。空港に着いたら夜だったので、近くのパレスチナ関係の療養所に一晚泊してもらつたことになつたのです。最初に着いた時から非常にびつくりしたのは、彼らはものすごく人なつっこいという事です。言葉も私は片言の英語で、アラビア語といえは数字とこんにちはくらしいしか言えなかつたんですけれど。

そこに寝ていた女の子がナパーム弾で顔中がひきつてたでたいているんですよ。非常にショックだつた。これはどこで負傷したものなのかと私が聞くと、六七年の六月の六日間での空爆だつた。被占領地の西岸地区、これはパレスチナの地図を見ればわかると思ひますが、真中にちよつとひん曲がつた囲いが、ヨルダンの被占領地区です。南の方に死海というのがあります、死海からガリレイ国境の北にヨルダン川というのが走つてゐる。そこが国境になつていて、アンマンと書いてある方がヨルダン、ここにはハシミテ王国が今ある。その西側の地中海より線に線で囲つてゐるのがエルサレムという丁度被

占領区となって、ヘブライの南側にあつてナブルスが北の方にある。この地区がヨルダンから西岸地区です。この西岸地区とそのもう少し南側にガザと書いてます。そこを全部囲んだ所がありますが、パレスチナの地図はきれいな三角形の感じをしますね、この南の方へ真つすぐの線、これが人為的な国境線です。南の端つこに当たるガザ地区がある。このガザ地区とヨルダン西岸地区、パレスチナ地区の北のシリアとの国境にあるゴラン高原を無断でイスラエルが占領したのです、六日間の空爆で。

それからシナイ半島があつて地図でいえば、スエズ運河と今のパレスチナの南の国境線との間、これは半島状になっています。このベルシャ湾と紅海をはさんでいるのがシナイ半島で、ここも六七年の時空爆した。ここでもどうも先程の女性がガザ地区にいてナバーム弾にやられたんだという話を聞いたのです。

一連の中東戦争の中で、例えばヨルダンであるとか、ガザ地区にいた女性とかが療養所に寝ている。腰骨を折った人とか、手足を折った人とかが、今言うリハリビのための療養所を作っていた。それが最初にパレスチナ人に出会った時の事で今でもよく覚えています。

レバノン——あまりに対照的な情景

そこから町へ入ってレバノンの難民キャンプがあつたのです。そこでベイルートの首都の周辺に大きな難民キャンプが三つくらいあつたんです。一九八二年にイスラエル軍の大侵略で戦車が来て、その街は包囲された。最後は戦車も入って、丸ごとキャンプは大虐殺されたのです。

私が行つた一九七一年当時は、もう少し郊外の静かな所にも病院が新しく建つていて、そこが外科の手術をする所で、そこへ最初に行つたんです。そこは焼き打ちされて今はもうないのですが。

ファランジストというレバノンのキリスト教で、マロン派という宗教がある。その人達を中心になつてファランジスト党を作っている。それはレバノンの大統領を出している党派です。キリスト教徒はレバノンでは人口の半数いと言われていましたが、実際はその記録は一九四〇年代の統計で、それを今も使っている。何回も戦争があつたり、市民戦争があり、レバノンは今、人口が減つているのですが、四〇年代以来まだ人口の統計をとつたという事はない。そういう国です。

フランスが第一次世界大戦後、一九一七年にレバノン

を委任統治する。それ以来ずっと不文律ですが、キリスト教徒の代表が大統領でイスラム教の代表でスンニー派が首相なのです。イスラム教には二派あって、シーア派の方が人口量が少ないので、シーア派が議会の議長という不文律があつたらしいんです。

それで人口の数は、実際はイスラム教徒が大多数であるけれども、大統領は今でもキリスト教徒であるという決まりがある。それなりに合理的にです。宗派がけんかをしないようにやろうという側面ももちろんあつたんですが、実際にレバノンの支配階級っていうのはクリスチヤンの方がかなり大きな力を持っていて、商業力もお店なんかもパリの一番有名な、日本で言えば銀座通りですか、そういうお店がダアットとペイルートのハマラという街、「赤い」っていう意味なんですけれど、という通りがあります。海岸沿いに商社があつたり、ホテルも大きなのがあつて、そこはヨーロッパの避暑地なんです。要するにフランスを中心にして、夏になると本当に世界のファッションの最先端が歩いているような街。それで本当に世界各国の人々が歩いていてもおかしくない街です。そうした街から、ほんの十キロメートルもいかない所に砂地があり、その中へ入っていくと、トタン屋根でブロックで出来たキャンプの家が長く並ぶという非常に

対照的な情景がその当時あつた。

私の行った時に一番最初に覚えているのは、どろ沼です。雨が降ると道がどろどろになつてしまつて、下水がない。ハエがいっぱいいて、羊の肉を食べるんですけど、羊を殺したらその日の内に食べちゃう。割合新しいものを食べるんですが、羊の肉をピッと切つて売つてくれる。日本では切り刻んで売っていますが、この肉がほしい、あの肉がほしいと注文しないと、どの肉がほしいんだと叱られてしまうし、肉をくれなんて言つたら、この肉がほしいんだと言われてしまう肉の売り方をする。活気があるんです。肉はバアットと吊つてあるし、果物は新鮮だし、「飢えている民」というイメージとはえらい違いです。本当にたくさんの思い出があるんですが、非常に羊のおいなんかがムンムンしていた。難民キャンプで、私は外科医ではないので、やっぱり身にあつたところとこのので、小さい診療所で朝八時すぎからです。むこうはサマータイムで要するに一時間くり上がつたんです。それで昼の一時か二時までやるんですが、朝の六時か七時くらいから診療所の前にダアットとおばさん達が立つたり座つたりして待つています。やっぱり、まだその当時七二年、国連がフルに機能してまして、国連の診療所もあつたのですけれども、やっぱりそれも

午前中まで。ダアーンと並んで苦しんでいるというんで、お薬の種類に対しても不満が一杯ありました。みんな口々に自分達が自分の生活を作っていくんだ、だからどんなに貧しくても、自分達の診療所という意識が強かったんですね。ですから診療録といってもノート一冊だけで、そこに名前と診療名が書いてある、それだけです。投薬した薬の名前も最初はそこに書いてあるんですけども、時間がなくなる。そうすると二〇人か三〇人くらいで後は立って行って、おまえはどこが悪い、何が要る、と聞きながら処方箋書いたり、検査用紙を書いたり——。

最後まで抵抗したという自負心

レバノンの難民キャンプを中心に十年以上たつてしまつたんですけれども、あとベイルートの市内から国境の街に中心を移しました。国境というのは山なんです。非常に緑がきれいです。北部のパレスチナっていうのは水がよくて、ガリレイ湖というのがあり、魚もとれるし、水牛を飼つたり、それからオリブとか果物とか、麦とか野菜も十分に作っていた。この地方はガリレイ湖周辺の比較的恵まれた土地にいた農民が徒歩でレバノンの山を一つ越えて、隣の国へ一九四八年の戦争の時に逃げてきた地方なのです。何故にげてきたのかというと、アラ



ブ軍団といつて、ヨルダンとかエジプト・シリア・イラクなどが合同で対イスラエル国家を阻止するために、イスラエルの中に入って戦争をやり出して、その時にはパレスチナの人々は武器なんか持っていない村人で、政府もほとんどないような、英の委任統治領だったわけです。そんな中で個々の抵抗運動が起こってくるわけですが、一九三六年の抵抗運動が有名です。おじいさん、おばあさん達から、やっぱり自分達の食べ物がなくても着物を売つて銃を買つたよ、という話をよく聞きました。抵抗運動はやってるんですけども、武器といつても日本という三八銃、一発入れてはこうという自動小銃でも何で

もない非常にぼろぼろの銃しかないんです。あんな物でも絶対に負けるという話をよく老人から聞きましたけれども、自分達も抵抗したんだという自負心というのはあります、パレスチナの人っていうのは。そういう中で山越えをして逃げたんです。タンクとかヘリコプターとか近代兵器で殺されてしまうわけですから、本当に小さな銃を持って、最後まで自分の村を守って闘ったらしいけれど、大半は負けてしまったそうです。それで、ラクダではなくて、小さいロバにおなべとか衣類をつんで逃げてきた。そういう人達がレバノンの色んな各地に散ったんです。南部レバノンの国境地帯の十キロメートル先の浜辺にラシャディエという村があったんです。それが一九五〇年くらいになってから、国連がそこに整然としたマッチ箱のようなコンクリートの家を建てて、他のキャンプからも人を連れてきたりして、二万から四万位の難民キャンプを作っていたわけです。そこに私はしばらくいて、また隣のキャンプとか、その周辺に三つの大きなキャンプがあったんです。その辺をうろろしたり、それからベイルートにも時々行つては、内戦中にはどうしても負傷者が出ますから、女性達に救急袋を持たせて、救急授業を教えたりしました。あるいは女性同盟というのがあって、彼らが中心となって家庭訪問とか育児相談、

衛生教育などがなされていきました。それで私もハエとか蚊とか色んな害虫がいて、皮膚病もあるわけですが、どのように退治するか、発生の予防をするか、どういう食事を食べたらいいか、そういった衛生教育、健康相談を家庭に行つて話をしたりしました。そういう事をやり続けていたわけです。

武器をとらざるをえない状況

ベイルートについては、一九七三年の時に第一次レバノン内戦がおこり、レバノン軍がシャティラーっていう一番レバノンでも大きなキャンプを包囲したことがありました。そしてしばらくの間、撃ち合いをしていまして入れなかつたのですが、私をふくめて女性が何人か入り込んで、にわか診療所をつくりました。夜にはまだ警戒が続いていました。つまり停戦といつては攻撃してくるといったようなことがつづいていたのです。レバノン軍が何故あれだけの人を殺したのかというと、口実としてはパレスチナゲリラが外人を誘拐しようとしているとか、本当に小さな事で街の中の難民キャンプに自衛武装として、自動小銃を持って、自分達で自治をひいているパレスチナの人達の努力をとにかくつぶそうっていう狙いが、その頃からはっきりしてきたからです。嫌がらせ



なのですが、そこでやはりパレスチナの人が死んでおります。何かそういうのがある度に、私は外人ボランティアでおつちよこちよいなので、知りたいと現場へ行きたいと志願して入り込んだのですが、ずっと一貫して言えることがあるんです。本当に今も死んだ人々の顔が浮かんで来るのですが、彼らは何かあると自分達で武器をとらざるを得ないような状況にたたさされているのです。本当に小さな事件で、彼らが意図しなくても、言わばそこ

を各国政府が、もう、これはこわいつていうふうには弾圧してくるのです。

パレスチナの人も十人くらいのグループで山越えして闘争に行つて、バズーカーを撃つんです。それで戦車のワッカには弱い所があるんですが、それ目掛けて撃つつていう話を聞いた事があるんです。要するに弱点をつくわけです。というのはこつちは小さい武器だから、相手が大きなタンクでは頑丈な所にあたつたつてビクともしませんけれど、弱い所を狙つてそこに命中した時はつぶれてしまうからです。あるいは映画なんかで見た方もいらっしゃると思うけれど、タンクの中に手榴弾を投げこんじやうと爆発します。それで本当に接近戦をやるわけです。五〇メートルくらい近づいて物陰に隠れて相手との距離を計つて撃つわけです。ですからイスラエルとしては小人数で来られた割にはダメージは大きいという事もあるんでしょう、非常に恐怖におのかされるんですよ。それで決死の闘いをパレスチナの人はやつてきたんだと思うんです。小人数で、しかも武器もないという所ではやはり一人が犠牲になつて死んでもいいんだと言う、そういう状態でしか闘えないんです。一人二人が殺されても後に続く人がいるんだという、それが確信になつていくわけです。

子供たちは肌身で死を感じとった

先程の映画で「あつなるほどね」と思いつく所がいっぱい出てくる。パッと一回見ても分かりにくいと思いがすが、例えば老人とか婦人とか色んな階層の人がデモに参加しているんです。そこで老人が子供達に語るわけです。自分達はこうやって戦ってきたんだよ、イギリスがまず入ってきてこんな非道な事をしたんだよ、そしてユダヤ人が入ってきてこんなに土地を取られたんだよ。お祖父さんが闘って戦いで腰を痛めたという話をずっと家族にしていく。あるいは家族が戦争の中を耐えてきた、そういう体験をみんなもってるわけです。ですからお母さんであるうが、お祖母さんであるうが、人に教えられないのではなく、自分の体でそういう憎しみとか悲しみを覚えていくわけです。だからそれを聞いて育つ子供達、見て育つ子供達、あるいは友達が死んじゃうという子供は本当に肌身でそういうことを覚えていくわけです。そういう中、別に計画して誰れが死んで誰れが生き残るとやっているわけではないのだけれども、若い子供は祖国のために闘うのが正義だと、そういう形で覚えていくんです。ですから確かにコーランというイスラム教の教えがあつて「悪い奴はやっつけてもいい」という考

えが確かに彼らの宗教的背景にあるかも知れない。聖戦（ジハード）という神のための戦いが神聖だという考え方は確かにイスラム教徒の中にあります。キリスト教徒もそうなんです。ユダヤ教徒もそうなんです。単にそれは理念であつて、そういうことをいくら言つてもやはり実体験にはかなわないだろうと私は思います。それで日常的な生活の中で本当に殺されていくという、あるいは戦つて死んでいくという、そんな中で石を投げるあの強さが、本当に強いと思うんです。大きな武器を持つ方が一見強そうに見えますが、実際はそうではないのだと思います。向こうが大きな武器を持っている時に、石を投げるっていうのは精神的にもすごい勇気がいると思います。だから、向こうからは仕返しがある、逮捕される、そうやって毎日やられても、また石を投げる、この強さっていうのは本当に代々そうやって引き継がれてきているんです。殺されても殺されても自分達は祖国へいつか絶対に帰るんだという確信をもっています。

パレスチナ——民族のはざままで

私はパレスチナの人々の学校の人もよく付き合つたんですが、歴史のビデオをみたことがあります。それによるとカーン人というのは、四千年の昔（石器時代）

からの遺跡があるんです。そういう歴史の学習をやったりしてしました。一般で言う所の社会党系の新聞を読んだんですけれど、せいぜい千三百年くらいだということなんです。

要するに紀元始まって以来、キリスト教が生まれ、イスラム教が生まれてからアラブ人があるみたいにして思うところ。ところがイスラムというと六百年以降でしょう。アラブ人というのはもっと古いんですね。そして今のパレスチナの人々というのは、パレスチナに住んでいる人の意味なんですけれども、パレスチナ・アラビエ、つまりパレスチナ・アラブ人だと自分らを言っています。彼らはパレスチナ地方であって、パレスチナ独立国家を要求しているけれども、それはアラブの一員としてのパレスチナなんです。そういう民族意識が強いと思います。余談なんですけれども、そういうアラブがいつ始まったのか、私も歴史を知らないけれども、そのパレスチナ人に言わせると今のパレスチナ地区に元々住んでいた住民はカナーン人だそうです。彼らはアラビア半島ですね、メッカのある場所ですが、どうも飢饉があつて、そこから移動してきて紀元前の四千年くらい前に住みついて農耕を始めた。そういう部族があつたと。ですからその後カナーンのと、ペリシテというのが聖書に出てくるん

です。これはパレスチナの語源じゃないのかなと私は思うんですけども、ヨーロッパの人に言わせるとペリシテというのは海の民という意味らしいんです。ラテン語か何かよく知りませんが、パレスチナ人は元からここにいた住民ではないんだと、色んな人がミックスして海から渡つて来た人だからだめなんだと、とそういう言い方をするんですけども、それに対してそうじゃないと反論をしたんですね。

そういう事でパレスチナの語源というのは聖書によるとどうも海の民ということで、文化をみると農耕民族なんだけれども遊牧も行っている。先程言いましたけれども、ガリレイ湖の近くには水牛とか羊とか、羊が一杯いまして、ヤギも交じっていて、そういう遊牧と農耕を半分づつやってた。地区によつては違うけれど砂漠の多い地区では遊牧だけの所もあり、水があつて下の広い平野だったら農耕だけしてるとか、そういう民族で、確かにヨーロッパから非常に近いわけです。海でフェニキア人が昔から貿易をやっていたという話がありますけれどもフェニキアというのは今言つたレバノンのどうもあの辺りですね。それから少し北のシリアの港の辺り、あの辺がフェニキア辺りではないかと言うことです。余談ですが、私は語源はよく知りませんが、レバノン人のク

リスチャンはフェニキア人の子孫だと言つて、今度また神話をつくりあげて、我々はヨーロッパ系と言う人もいます。いずれにしてもパレスチナ人は、元々そこに長い間住んでアラビア語をずっと話していた。宗教的にはイスラム教が大多数なだけども、大体ユダヤ教が最初に発生した土地でユダヤ教徒もいました。そして、ユダヤ王国が紀元前に滅ぼされて、ヨーロッパとか色んな所にディアスポラで難民になつて逃げていった。しかし残っていた人はどうも一九一〇年代に、二、三万はいたといわれているわけです。ただその頃の人口が四〇万で、非常に今よりも人口が少なかったわけで、十パーセントにも満たない人口がユダヤ教徒、そして不思議なんですけれどもユダヤ教徒は代々残っている。けれどもユダヤ国家はつぶされていて、またヘブライ語というけれど、アラブ地区でさえ死語になつていて使つてないわけですね。

ユダヤ人というとか民族があるように思われるかも知れないけれど、アラブにずっと住んでいるユダヤ人、純粹に言えばヘブライ語を話していた人々でセム族というんです。言葉で区別していますから、ハム族かセム族かで、アラブに住んでいる人達を分けているようですが、そのセム族系の人達はユダヤ教を信じている。ですから、

最初からメソポタミアから移民してきたんじゃないかと言われているらしいんですけど、そのユダヤ教徒が残つていてアラビア語を使っている。ヘブライ語を使つてないわけです。ですから、ユダヤ人は民族かというところは絶対に信じられないですね。

民族の定義も色々な解釈があつて、言葉とか文化とか、そういうのが共通で、という問題が入つて来るのだろうと思います。そういう意味で言っているだけの事なんですけれども、ですからヨーロッパのユダヤ人というのは、ヨーロッパの人種ですね。そして今イスラエル国家をつくつているあの指導者達、ベギンとか、ちよつと前までモシエダヤンというのがいまして、最近シャミールとかシャロンとか言つてますが、そういう人達つていうのは白人なんです。アラブ人だつてもっと白人の血が入つているような顔をしています。日本人だつてもちろん違ひますし、エチオピアやアフリカとはちよつと違ひます。だつてユダヤというのは独特の何かがあるらしいんですが、どうもポーランド系つていうのはロシアから移民していったユダヤ教徒の集団が国を作つていた。ですから、言葉はイディッシュ語を使つていたらしいんですね。これはドイツ語に近いらしくて、ロシア王国がユダヤ人教徒に改宗して、そういう人達がまた東ヨーロッパに分

布していたんです。

その人達が色んな弾圧を受けて、端的に言うならヒトラーの弾圧を受けてパレスチナに移民して行った。ですから移民していった人々はもちろん弾圧の下で仕方なかった人たちもいるだろうと思う。しかしながら人種的にも白人でヨーロッパの思想を持った、アラブが好きで



何も行ったわけではなくて、あそこに自分達のユダヤ教の国を作ろうという神話を作りあげた。シオニズムという千八百年代の後半からですね、自分達の国を作るしかないんだ、ユダヤ人は迫害されてたまらんよ、というユダヤ人の運動の中で移民していったわけです。もちろん国際的にユダヤ人の金融業者とか金持ちが昔からいます、その人達も集めたんでしょう。そして政治的にはイギリスに泣きつく、あるいは最後はアメリカに泣きついて、国連でゴリ押しをしてイスラエル国家をつくっていったという歴史があるんです。パレスチナの年表の中にその辺の事を書いて頂いたと思いますけれども、第一回シオニスト会議が一九七二年にとありますね、でも最初に私はパレスチナ問題に関して理解してもらおう時にはね、そのユダヤ人だというのが日本人にとっては、まず非常に理解しにくいだろうと思って、今ちょっと時間を使わして頂いたんです。そんなんで元々移民がどんどん増えてナチの弾圧が始まった一九三〇年代に人口がパッと増えていったわけですね、で三〇年代にパレスチナ人も現地の人々も暴動を起こす三三年から三六年第一次アラブ暴動と書いてあります。この時にもイスラムのお坊さんが先頭にたつてですね、これはイギリスの委任統治だったわけですから、イギリスに対する抵抗もあったわ

けですね、で反ユダヤ主義っていうのもあったんですけど、単に反動的とは言いい切れない、土地や物が現実的に取られていたりする。そしてイギリス人がいろんなものを持ってきて工場を建てていって、そして現地の農業植民をしたり、そういう植民地政策が真先にはじまっていたんだと。これはあるパレスチナの子供達の教科書に書いてあったのですけれども、四七年でしたか、パレスチナ独立国家宣言っていうのがされるわけですね。四七年の一月に、国連でパレスチナの分割、ユダヤ人の独立がアラブ分割である。

最初はパレスチナを分割して、パレスチナ独立国家とユダヤ国家と二つ作ろうという案があったわけです。ところが、あの二回の国連総会を逃がして、やっとリベリアとかフィリピンとかを買収して、アメリカが工作して、国連の多数を取って、イスラエル国家を認めるという経過があったんです。

四八年の独立宣言が五月にある前から、イスラエルのガナとかイルゲンとか、色んなテロ組織を持っているんですけれども、あのイスラエル人の今の指導者、軍人の指導部が、かつてはそういうテロ組織を率いていたと、ベギンとかですね。それで彼らは村を襲撃するわけです。襲撃して、夜帰って来る農民達に、例えば五時に帰って

来なければダメだというお触れを数時間前に出したと、そして慌てて帰って来たって間に合わない、遅れた人達は全部何処かへ引き連れて殺してしまふ。殺して井戸にほうりこんでしまふとか、そういう本場に横暴をやっちゃう。あの村がやられた、そうするとデール・ヤミンとか、まあ幾つか村がやられてるわけですけれども、うわさを流して恐怖をおおる、そして原住民を追い出すんですね。そういう政策をとったわけです。

ですから独立国家を作る前にね、現地にいたパレスチナ人の人口をとにかく減らせ、追い出せというのが、まあシオニズムの政策であった。最初にテロを使って、あのパレスチナ人を追い出し、イスラエル国家を建設した。まあこの事実は、既に日本の本にも色々書いてあるわけで、そういう事を、ほとんどの国際情報では忘れてしまひ、言わないでパレスチナ人が遅れてるって言い方をするわけです。だけど本当にやり口がひどい。その後も何回もそういう事をイスラエルはやってきているわけです。私は一六年以上いて本身に身をつまされたのが、パレスチナの人達は実に勇敢にたたかっている。子供達だっておばさん達だつてアメリカは敵だ、イスラエルが悪いんだということを誰でも知っているんです。そうはつきり言っちゃうわけです。まあ、これはすごいなと思う

んですけども、彼らは、いくらたたかってもイスラエルの方が十倍百倍ひどいっていう、だからあのイスラエル人のタンク一つやつつたって、十時間も経たないうちに空爆で村をつぶしに来る。あるいは海から毎夜照明弾を打ち上げて、眠れない夜を続けなきゃいけないとか、七八年以降は国境地帯を侵略してですね、レバノン領土に入り込んで、そして砲撃をボンボンと一日中、三〇分くらいのが何回もあるわけですね。それで私なんか診療してても、本当に患者さんを連れて逃げ出さなきゃならないということが毎日起こるわけです。

ですから、診療すら落ち着いてやれない。そういうふうな心理作戦でやったり、実際それがずっと何年も続くわけですから、本当にパレスチナの子供達は学校へ行つて勉強していたら爆弾が落ちてくるわけです。学校は国連の学校があり、難民キャンプの多い所では二つあります。子供達は二部授業でこんな大きな教室は無いんですけど、何とか一生懸命勉強するんです。ですが、その学校を全部やっちゃうんですよ。見えないはずないんですよ。イスラエルはアメリカの近代兵器を全部買い上げてますから、赤外線で難民キャンプを、何百メートルも上空から映して、場所を知っているのです。どこに武器があるだとか、どうも全部知っているようです。ですか

ら、そこに学校があるということも本当は承知のうえなのです。もう十年も二〇年も前からそこは学校なんです。そういう所に命中心てるんです。私はそういうキャンプは幾つも見たんですね。

パレスチナ問題、そして、日本のあり方を考えるとき

キャンプごとに半壊以上潰れちゃったニュースが七〇年から七五年にあつたんですけれど、それはほとんどの日本の新聞に出てない。写真すら出てない。ほんの一行これかな？ と思うようなのが出てるわけです。そういうふうにして、八二年のイスラエルの大侵略に至るまで、日本で知られたことは、アラブの石油危機ですね。要するに、七三年に第四次中東戦争が起こって、はじめてアラブってのが強くなってることになって、日本政府も各政党も動き出した。それ以前のパレスチナの問題っていうのは一体何なのかっていうのは知られていなかったと思います。

そういう意味で私は、一七年パレスチナにいて、そういう南部での、イスラエル軍の毎日の攻撃であつたり、空爆であつたり、そういう侵略が私のいた間に大きなものだけで、空爆とあと陸軍で、七八年に大軍が押し寄せてますし、八二年には本当に数十万の軍隊で首都を包囲

湾岸戦争の経過と日本の対応

世界の動き	日本の対応
'90.8.2 イラク軍、クウェート侵攻 国連安保理、イラクのクウェートからの無条件撤退を決議	8.5 政府、対イラク経済制裁措置を発表
8.6 国連安保理、対イラク経済制裁を決議	8.29 首相、第一次中東支援策を発表 国連平和協力法案の検討を示唆
8.7 ブッシュ大統領、サウジアラビア防衛支援の名目で米軍派遣を決定	8.30 政府、多国籍軍支援に10億ドルの資金援助発表
8.8 イラクがクウェート併合を宣言	10.16 政府、自衛隊の海外派兵を柱とする 国連平和協力法案を国会提出
8.12 フセイン大統領、イスラエルがパレスチナから撤退すればイラクも撤退する等の条件案を提示	11.10 国連平和協力法案が廃案に
11.8 ブッシュ大統領、湾岸派兵米軍の15万人増派を命令	
11.29 国連安保理、イラクが1月15日迄に撤退しなければ加盟国に武力行使を含むあらゆる手段を取ることを認める決議を採択	
'90.1.9 ジュネーブでベーカー米國務長官・アジズイラク外相会談。原則論応酬で物別れ	
1.12 米国議会、大統領の武力行使承認を決議	1.17 首相、多国籍軍の行使について「確固たる支持」を表明
1.15 平和解決へデクヤエル国連事務総長が最後の撤退要求声明を出したがイラクの反応のないまま撤退期限切れ	1.24 政府、多国籍軍に対する支援策として、(1)追加資金90億ドルの協力 (2)自衛隊輸送機の派遣等を決定
1.17 米軍中心の多国籍軍が未明、イラクへの攻撃「砂漠の嵐」作戦を開始	
1.18 イラク軍がイスラエルのテルアビブなどをミサイルで攻撃	
2.15 イラク革命評議会が条件付き撤退を表明	2.23 首相、米軍の地上戦突入やむなしの姿勢に支持を表明
2.22 ブッシュ大統領が23日正午までに撤退を開始せよと最後通告	
2.24 多国籍軍が大規模な地上戦に突入	
2.26 フセイン大統領、クウェートからの完全撤退を命令	
2.27 クウェート市内に多国籍軍が入り約7ヶ月ぶりに首都を解放	2.28 湾岸戦争終結。湾岸危機対策本部でクウェート復興に協力する方針など決定

した。爆弾を何万トンもイラク戦争に近いくらいの爆弾を落としたわけです。そういう何回もの侵略戦争をやっている、そのことを、まず皆さんに知っておいていただきたいと思います。

私は基本的に医者として難民キャンプで診療活動をやっていたのですけれども、本当に腹が立ったのが、巨大な近代兵器、物量作戦でイスラエルがパレスチナをやっつけて来てること。そして、今も湾岸戦争で国際的にも少しはアピールするかなと思うんですけども、四〇年間放っぼって放置されたということになって、イラクの制裁はすんだのに、じゃ、イスラエルはどうなるんだといった時に、そんな時にはみんなちよっとおかしいね、という話になりかねた。しかし、アメリカが四回もパレスチナの指導者に会って、現地へ行ったり、大部隊を派遣したりしたけれども、何も解決していないというのが、今の現実であるわけです。

これは何故か、それは皆さんも考えていただきたいと思うわけです。日本がこの湾岸戦争において、どんな役割を果たしてきたか。そしてパレスチナに対し、何をしてくる、今また何をしようとしているのか、みたいなこともあるんですけども、私はずっと現地に行っていて、日本政府が本当に親身になって、パレスチナの事を考え

ているというふうには思えませんでした。

今回も中山外相が行ってね、現地の人と話をしたとかいうのが新聞に出てまして、彼らはお金を寄付してもらったとか、日本が国連を通じてお金をを出しているというんで、勿論歓迎はしております。しかし、アメリカと一緒に、湾岸戦争に出兵していたのと同じですね。

要するに、基地は使わせてるし、トマホークは飛ばせているし、そしてお金は多額に出している。お金を出さずてことは、もう実践に参加しているのと同じだと思えます。だから、そういう意味では、私は医者として治療してきたのですが、何故イスラエル兵を治療しないのか？ といわれ、ずっと向こうの方から撃ってくるイスラエル兵を治療できるのかと、私はずっとパレスチナと一緒にやっていたんでね。そりゃ、パレスチナの人を支援します。そういう立場をはっきりしないと、ボランティア活動できませんよって言うて来ましたけれども、日本が人道主義とか、平和のために金出したというのは嘘だから、その事をやはり中心に、もう一回パレスチナ問題、私達の政府、あるいは私達の在り方というものを、もつと考えていきたいと思うのです。

皆さんのご意見を聞かせてもらいたいと思います。それで今日私が嬉しかったのは、若い人達が目の前にいる

わけね。久し振りに若い人達の顔を見てね、若い人との機会なんかないかと思っていたんですけども、こんな若い人を戦争に行かしちゃったら、たまらないと思うわけです。そういう意味で、暴言をはいて誤解されるかもしれないけど、殺されるくらいなら、悪い人を殺して死んだ方がよいといったことがある。私の父は医者だったけれど、戦争にいつて死んでいる。流れ弾にあたって死んだらしいが、そんな死にかたしたくない、という思いがあります。

戦争いやだといいながら、戦争にいつて死んでいる人が、私達の親の世代には多いんです。パレスチナの人々は、ひつぎをかついでいるけれども、目が光っている。

【この講演会に先立って、映画「土地の日」(パレスチナ民衆の闘いを収めたドキュメント)を上映しました。】

(のおはらたかこ・医師)

質疑討論

——そしたら、もう少し真ん中の方へ集まって頂いて、質疑応答という形でお話ししていきたいと思えます。何か質問はありませんか、意見とか。そしたら私から質問をします。

わりと戦争が終わった後に、PLOがパレスチナから浮いている、という話しを聞いているんですが、パレスチナの人にとってPLOとは何なのですか？

信原 浮いているという話しがあるの？

——だからPLOがテロをやったりするから支持してないという……

信原 どこにあるんですか？

——朝日新聞の漫画みたいところで、和平交渉は民衆としようとか……ブッシュが、PLOにそっぽを向いているパレスチナの人々と、結んでいる漫画があった

信原 それはあなたの誤解だと思う。要するにブッシュの政策として、PLOと違う被占領地の代表者と話しをしている、ということやったんですね、三回か四回。ところが代表者といってもエライ人が多かったんです

ね。どここの市長や大学教授であったり。その人達を名ざしでブッシュが会いに行っただけです。その時に彼らは一枚の紙を差し出しました。その紙には『この会議についてはPLOが許可を与えてくれました。それでPLOの許可に従って以下の要求をいたします。一、二、三、四、五……一』と書いてある訳です。

これは被占領地でブッシュがPLO以外の組織をつくらうとして全部つぶれてしまったことを意味します。だから呼びだされたという人は、もともと被占領地の中で『あいつは右派だ、PLOの反主流派だ』といわれてた人で、何回もイスラエルは呼び出している。PLOと違うことをさせようとして、それも一九七七年にサダトがイスラエルと平和協定を結ぶことを開始したんですけれど、その後七九年に平和協定を結ぶことになったんですね。そしてシナイ半島を返還すると。エジプトとイスラエルだけの和平協定だったんですけれど、

その時にパレスチナの被占領地に関しても協定の中に書いてしまったんですね。それがキャンプ・デービッド合意といって、アメリカのカーターと一緒にやっつてるんですけど、これがパレスチナの『自治案』を書いた。被占領地区の西岸地区とガザ地区に選挙によって自治政府をつくる。そこに自治を認めよ、だけどパレ

スチナ独立国家ではないわけですね。それをアメリカとイスラエルとエジプトが合意したからといって選挙をやったんですけど、最初は六四年にPLOはつくられた。アクデ・ナセルという人が、アラブ諸国二一ヶ国の連盟があるんですけど、そこで決議して、パレスチナのための解放戦線という組織をつくって将来、それで国家をつくらうというんですね。PLOというのをアラブ諸国が支援してつくり出しているんです。

六五年以来、爆弾を投げたりする小さい闘争を始めたファタハといういわばゲリラが、政治軍事組織と自らを名乗っているんですけど、その代表であったアラファトが議長につくんです、一九六八年です。だから実質的にはPLOというのは民族解放闘争というのが今も小さいのが八つくらいPLOの憲章を認めて入っているんですけど、その実体をつくったのが六五年以降となります。

ですから最初からパレスチナ人に亡命してた人で、例えばファタハという一番大きな組織は、インテリが代表ですね。学校の先生とか医者とか、そういう人達が中心となって作っていくんです。

最初にイスラエルが難民キャンプを包囲して、タンクがバーッと来たときにそれをはねかえす闘いがあつ

て、それが一九六八年のアルカラーメという村で勝利するんです。今までアラブ軍団が負けてきたのに、初めてパレスチナ人が素手に近い小さい武器で、イスラエルの大戦車をやっつけた、ということで一氣にワーッと大衆的に盛り上がった。それまで村八分で小さな銃で何ができるんだ、という感じだったのが、それが一挙にみんなが信頼しだして、PLOが実体をつくっている、それが六八年。それ以後、いろんな組織が入って一緒にやるんだけどもPLOというのは被占領地で最初は闘いをやってたわけ。(被占領地区というのはヨルダン西岸とかのこと)、要するに敵はイスラエルというのが彼らにははつきりしているし、何もアラブ諸国の政府を倒そうとか、あるいはアメリカを倒そうとかそういうのを目的としてやり出しているわけではないんですね。

そういう意味で今の被占領地に住んでいる人達は、そういう闘いで最初、弾圧されるのが怖いといっていたけど、闘いに勝ったところで我も我もと参加しはじめたんです。だから中と外というのはそんなに違いがないんですね。だから中にいるだけでも銃をもってやっている人はいいて、山岳ゲリラというんですか、山の中にたてこもって、ヘリコプターにボンボン撃た

れて、ゲバラみたいに殺された人もいるし、それから本当にガザ地区にガザのゲバラという本場に有名な戦士がいたんですけど、自分達の家の地下に穴を掘って秘密のアジトをつくっていた。それがいろんな形でイスラエルにはれて、ある日突然襲撃をうけて、迫撃戦で殺される。全部地下はやられてしまつて。もう武装闘争はできなくなつてしまつたんです。それが一九七三年で、それ以降、ああいう「土地の日」みたいな素手の闘いがずつとつづいている。

PLOが今も地下からずつと指令していると言われていて、まだ地下が誰かということとは分かっていないんです。インティファダーII蜂起という意味なんですけど、それをずつと一九八七年以降続けているんです。彼らもパレスチナの旗を落書きしたり、自分達の支持している人の顔とか名前とか、それを書くだけでイスラエルは引つ張る、獄に入れられる。

「インティファダー」というフィルムには「PLOは我々と共にある」と少女が喋る部分がある。抑圧されている中でPLOというのは路線も違うし色んな人がいるんですけど、それ抜きには勝てないという思いが被占領地の中でも大きいのです。だから今回ブッシュが会いに言つてフタをあけたらPLOだったという。

PLOではない人と会ったんですよ、ブッシュは。自治案をのむ穏健派、彼らに言わせてみればね、PLOと違うメンバーだと思つて名指しで指名した人に会ひにいったのに、実はPLOと連絡をとつてきましたというのです。それぐらいPLOは実体をもっています。インテリといわれる人も、右派と言われる人も八七年以降の大衆蜂起が続く中、だんだん変わっちゃう。だから三年たつてフタをあけたらイスラエルもアメリカもかいらい政権をつくろうとしても無理。アメリカの提案というのはパレスチナは絶対に受け入れない。

地域で解決しましょう、国連を抜きにしましょうとか、パレスチナは逆に国連決議といつてゐるわけでしょう。今までの国連決議は不十分だけでしょうがない。認めましょうと言ひ始めたんですね。それに対してもちろん反対する人もいます。イスラムの過激派とか言われてるけど彼らは絶対に国境を認めない。イスラム原理主義に基づいて、イスラムの国家をつくりたい。だからパレスチナという地区に限らず、イランだってイラクだってサウジアラビアだってみんな一緒に国になってたらい、というくらしいの考えをもつてゐるから、何でイスラエルというそんな国を認めなあかんねん。というイスラム原理主義者の主張なんです。そう

いう意味ではPLOは近代合理主義で国家を認めてゐるんです。だからイスラエルが戦後四〇年以上存在している事実は認めましょう、と言ひ出しています。最初PLOの憲章の中にはイスラエルは一切認めないと書いてあります。国家として認めない、あるいは勝手にアッチあげたものだね。事実、私もそう思いますけど。作られた経過からして、ことばも人種もばらばらだし。

パレスチナやPLOに反対してゐる人はシリアやレバノンにも少しいます。どちらかという左派、左派というか、シリアの政府に支持されたものとか。だから絶対イスラエル国家を認めない、一切妥協しないというグループがPLOから分裂しました。だけど彼らは大衆基盤はあんまりない。シリアがあと押ししてゐるけど、シリアがいつ裏切るかと不信をもつてますね。今回の湾岸戦争もシリアだけサウジアラビアに派兵したりした。そしてそれでもアサドが国連とか国際会議で決議しましょうと、アメリカの提案を断つてゐるわけ。グラグラしているからシリアは。だから多数派ではない。

A けっこうPLOとかPLO側からきた意見が多いです
すね

信原 映画ですか？

A いや信原さんが。というのは、僕はけっこうイスラエル側からみた立場で考えています。建国の経緯とかは確かな確信がないんだからお互い譲り合う……そういうのは抜きにして、イスラエルは敵に囲まれていますよね。

信原 エジプトとは和平を結びましたが。

A イスラエルにすればいつ攻撃されるか分かりませんよね。中東戦争なんかで。

信原 だからあなたの全体がちがつているからそういう論議になるんじゃない？ 何で敵に囲まれたか、その理由があるわけです。何で敵になつたかそれを抜きに、敵に囲まれたから武器をもたざるを得ないではないかという論議は成り立たない。

A どっち正しいかは客観的にみたら分からないでしょ。信原 あなたはどう思うの。

A 僕はまだ勉強しているところだから、うまく答は言えないけど、ただそういうイスラエルにすれば自分で守っていかないと民族が全滅していきますよね。

信原 ウーン私はその仮定が分かんないな。

ヒトラーにやられて六〇〇万死んだ。これは事実ですね。一九四八年第一次中東戦争が起こってイスラエ

ルが勝った。それ以後、第二次から第五次まで戦争が起こった。これは何でや。アラブが攻めたんか？ 違うんですよ。第二次はスエズ戦争、この時はイギリスとアメリカとイスラエルが組んで、エジプトのスエズのシナイ半島をとった。第三次は一九六七年、アカバ湾をナセルが封鎖してるぞーと、イスラエルはやる前にやるんだといってイスラエルがヨルダン西岸地区とガザを占領した。実際エジプトはやってないわけ。やるまえにやってるのです。じゃあエジプトが悪いと、百歩譲ってそうしましょうよ、エジプトはヤル気があったと。その次の戦争一九七三年第四次中東戦争、この時はエジプトとシリアが組んでイスラエルに攻撃をしかけた。その時誰が勝ったか、アラブ側はアラブが勝ったといひ、イスラエル側も自分らが勝ったといっている。ようするに引分けになった。最初の四八年、五六年、六七年は全部アラブが負けている。そして今回、やつと勝ったとパレスチナ人も思った。ところが勝った、当のエジプトは、イスラエルと和平を結び、アメリカを入れてキャンペーンビットという会議でパレスチナを売り渡した。そして自治政府を認めるからおとなしくしてると、イスラエルの支配の下におれと、アメリカが提案した。

しかし現地の人が『嫌だ』とそれで今も戦いがつづいておる。それが経過なんです。だからイスラエルの方が強いんです。何故強いかというとアメリカがついているからです。イスラエル一国だけだけど、確かにお金はあるし武器もつくってます。世界有数の武器産出国です。ただ、人口は少ない。

アラブがよってたかって本気でやればやられるかも知れない。幸か不幸かアラブがバラバラで、イスラエルはいつも勝っている。レバノンの戦争でもアメリカの最新兵器を実験した。何万人ものレバノン、パレスチナ人が死んだ。イスラエル兵は何百人位しか死んでないのでないですか。

A 何か対イスラエルということ掲げると、バラバラのアラブも結束するということですか。

信原 それは新聞情報や。アラブは実際全然まとまっていなくて、今、大義はあるけど、大義として例えればサウジアラビアだって、そう言わなければならなかった、今まで。同じアラブ民族なのに、助けなアカンと言うんで、お金も出してきたわけ。イラクにしてもサダム政権がぶち上げると、アラブの大衆は皆喜ぶんです。例えば山梨県と東京と全部、分割された様なの、アラブの諸国なんです。そこへ王様もつてき

て、お前はイラクの王、おまえはシリアの王と、そういう国家をつくったのがイギリスとフランスなんです。第一次大戦の時に。

だから親戚がシリアにもイラクにもパレスチナにもいるというわけです。だから日本でも、九州の出身で言葉が違うということもあるけど、東京の家族とか九州の親戚とかをみんな助けなアカンという気持ちが生まれるわけではないですか。例えば九州に誰か侵略して、他の国をでっちあげて、その住民を追い出されたとする、九州から東京に出稼ぎに来てた人達は怒って、これはほっとけないとすると、それは当然何か救援物資を送るわけでしょう。アラブ人というのは、そういうもの。日本人が自分らを単一民族と認めるように、アラブ人も自分らをひとつの文化やと思ってるわけ。方言もあり、ちがいはあるが。

B 宗教についてはどうなんですか。

信原 宗教は利用されていると思う。私は。だから本当に宗教を信じている人で、あれはユダヤ教のための解放の土地であるという人がいる。

B 現地の人はどう思ってるんですか？

信原 現地といってもいろんな人がいます。例えばユダヤ教徒に関しては。シオニズム運動の中にも二つの流

れがあつて、最初は宗教国家ではなくて、民主国家です。宗教国家というのは国民はみんな信じないといけない。イランとか、そういう国はキリスト教徒は少数であるから小さくなつて生活せなあかん。日本でも、天皇を崇拜しなければ異端視されるというのでは困る、まず、私は宗教国家は反対ですね。ユダヤ教が悪いとかいう以前にイスラエルが宗教国家です。

さつき言つたように民族ではない、ユダヤ民族なんではない、ユダヤ教徒なのです。それが不幸にもヨーロッパで歴史的に迫害された。ではヨーロッパ人が責任とるべきことをパレスチナ人が責任とらなければならぬのか？ そこに住んでいる住民を追い出して、ヨーロッパ人は悪い、ユダヤ教徒を迫害したんだから、ヨーロッパ人も悪いと思います。だけど何でそれがパレスチナ人を殺しているという理由になりますか、ユダヤ教徒かわいそうやというところから両方見なければならぬ。日本の人はこういうんです。私はユダヤ人を殺せといつてゐるわけではないですよ。

実際、シオニストはヒトラーと組んで、一部はあきらめるから、一部の人を逃亡させてくれとかけひきやつたんです。イギリスとアメリカに泣きついて、被害者意識で自分達だけ助かろうとした。そこに不幸があ

つたと思います。今イスラエルの若者で戦争にかり出され、目の前で子供殺さなければならぬのがいやだと、兵役拒否している人もいっぱいいるわけです。けれど学校で習うことは、自分達が武器もつて戦わなければイスラエルを守れない。アラブは子供でもテロリストだと、実際子供がジープに石投げている。

A パレスチナ人を殺すということはPLOと対立するということですか。

信原 そういうことになる。

A ということはPLOと対立することはアラブとも対立するということですか。

信原 にもなります。全くイコールではないですが。

A イスラエルではアラブの人達が自分達を殺しにかかっている国なんだ。

C その前提が僕はおかしいと思うけど。

A そう思つてゐることはないですよ。

信原 うん、だからそういう教育をしてきたでしょう、今までは。

A だからまちがつたことを教えているんだから殺さなきゃなりませんね。

信原 ただ、殺すのは憎いから殺すのではなく、入植地をつくること、映画に出てきたように、だましたり、

色んな法律をつくったりして土地をとっていく、言うこときかんかったら、ブルドーザーで壊していく。人民は怒ってるでしょ、石投げるとすると、獄に入れられる、したら益々みんな怒る。今も土地をとっている、ロシアからユダヤ人が入植している。今年一〇万人くらい、また、パレスチナ人の土地をだまして、近代的なビルを建てていたでしょ。パレスチナ人は掘立て小屋に住んでいる。誰が建てているかというのと、パレスチナ人が日雇い労働者となって働いて、イスラエル市民の給料の半分くらいをもらって生活してたわけ。言ったら、アフリカのバンスタンといっしょじゃない？ あいつら危険だから昼間は働いて、夜は住んでいる所へ帰れといわれる。

パレスチナでは病人すら運べない。湾岸戦争の間中。何でそこまでイスラエルが恐がるのか。要するに食べなくてもいいというわけ。一ヶ月も農地をほっといたらペンペン草はえて農作物もとれなくなっちゃうですよ。

そういうこと実際、湾岸戦争の時やったんですよ。イスラエルにとってはパレスチナ人は出て行って欲しいんです。いない方がいいわけ、それでアラブは広いんだから。アラブ人なんだからヨルダン行って、ヨ

ルダンの王政と一緒に暮らせとか、今度クウェート乗っ取ったらパレスチナの国家作つたらいいじゃないかという冗談が出るわけ。それ位にしか思っていないわけ。パレスチナ人が先祖代々耕してきた畑があるといったら、そんなんオレらが肥料もってきて近代農法で荒地を耕したんやとウソを言ってきたわけ。だからアラブ人というのは文化が遅れて野蛮人やと。だから自分が土地とって耕してやるんだと位にしか思っていない。

単一の宗教でかためて、彼らとしては他のアラブ諸国と対等に貿易したいわけ、経済的には。だけどパレスチナ人の抵抗がある限り他のアラブ諸国もウンと言わない。現地住民を追い出しても皆殺しにしても問題解決しようとするのがイスラエル。

現地の人が黙れば支援する人もいなくなるだろう。どうせアラブ諸国も石油でお金あるし、サウジアラビアはアメリカの言うことをきくし、エジプトもそうじゃないかと思ってるでしょう。だから益々、今、パレスチナ人を弾圧することになっている。

——だからパレスチナの見方はかりやったら、偏っていると言うけど、そしたら今まで中の私達はどうかやったんやというのと、歴史過程の中でも、近現代史も私達よく勉強しなかつたでしょ。『アンネの日記』でナ

チスドイツがユダヤ人にこんなすごいことやってんでと習つても、ユダヤ人がイスラエルとして何をやってるかということは何も知らない。ニュースではパレスチナが暴れた、イスラエル兵が嘆きの壁の前で誰かを殺したとか、つまりパレスチナが跳ね上がってくるぞという情報は伝わってきて、なぜ彼らが跳ね上がつてこなければならなかったのか見えてこないわけです。実際、中東やアラブ世界は日本人には分からないところやということ、昔むかし習ったハムラビ法典で「目には目を、歯には歯を」という法典があるから、彼らは暴れるのだとか、日本とは違うぞということ、宗教問題にすりかえたりする。

B アラブの考えは分からんとかアラブの人とのつき合いは考えなあかんとか。

C 雑誌とかみてても、こんな不思議な国なんだとか。

B 不思議とか、ぼくらとは違ふとかいう情報がけつこう入ってきました。

A でも実際、本当にそういうところがあるからではないですか。

C それは個性でしょ、民族の。

信原 それは文化の違いという考え方もあるし。

C アメリカかって、日本かって、全世界から見たら違

う場合あるでしょ。でも歴史的経過から見ればイスラエルというのは、突然人の土地にやってきて、ここは俺達の国になったんだ、ダビデ王国の時代があつたんだ、ここにユダヤ人の国をつくるんだ、といつてパレスチナ人を追い出す。やられた側は何を言うんだということになつてちやうからな。

A さつき僕が中東は分からんといつたのは、全体的にアラブの盟主になりたいから、自分と対立するその国の首相をカンタンに殺したり、または殺すために、隣の国と手を組んだりすれば、当然論議として、そういう面から見れば分からんこともあるのではないか。政治的にみて、近代的な考えを持つ欧米からすれば分からないんじゃないか。

信原 あなたは欧米と日本が正しいと思つてるんだ。アラブが遅れていると思つてるんだ。日本は私は進んでいると思わない。欧米が正しいとは思わない。

A 僕も正しいとは思いませんよ。ただ他の国からすればおかしい、古いんじゃないかと。

信原 ウン、違いはあるよ。でも、違う理由がある。私が言いたいの、例えばアラブ諸国というのは最初トルコの支配下にあつて、アラブという広大な地方があつてアラブ語を話していた。それがイスラム教の全盛

時代だった。その後、第一次世界大戦があつて、イギリスとフランスが分割統治をした。シリアやイラク、ヨルダンに、サウジアラビアの王様の筋の人を連れて来て、クウェートなどは地方の豪族を育てあげ、独立国家をつくつた。だがその国をつくつたかといふと今のアラブ諸国は大衆自身がつくりあげたのではなく、イギリスとフランスらの欧米諸国なわけ。じゃあ、そういう欧米諸国が進んだ政治なんですか。

A 違います。

信原 ね、最初からまちがっている。日本が満州に王国を作つた。中国人のために我々が開拓をしてやつたとウソ言つてるけど、しまいには、何万人も殺し、戦争をしたといふ事実を抜きにし、日本は欧米と匹敵する大国になるためにはしかたがなかつたんです、といえるでしょうかという問題がある。

じゃあヨーロッパはどうか、イギリスなんて海賊ですよ。全部の海を支配してた強い国なんですけど、よその国の宝を奪つて大英博物館を建てて、アラブのメソポタミア展とかやつてたけど、あんなんだって現地の王の墓だつて、いいところは全部、大英博物館にもつていった。アラブの全部もつていった。強盗ですよ。だから欧米が正しいという神話をもう一度考えなく

てはいけない。それで日本がその仲間入りをしないと、明治以降、来てるわけやけど、欧米が進んでいると思っているわけ。ところが現地の人からどれだけの批判をもたれているかを逆に考えなければならぬ。

だから、中山外相がお金ふりまいて感謝はされるでしょうが、全面的に信頼はしていません。アメリカと手を組んでやっているのがミエミエだから。この間の湾岸戦争の時イラクが名指しで日本人のことバンバン言つてたらしい。『なんでお前ら金出すんや』と。だから状況が違えば、表現が代わりますけど田中角栄が、インドネシアに行った時でも反日暴動が起こっている。つまりアジアの人だつて日本のことを決して安心してみてるわけではない。それと同じで多国籍軍でアメリカ、イギリス、フランスがイラクに行つたけど、今、サウジアラビアの中で王政派に近い人達が意見書を出した。その中に今まではダメだ、自国の軍隊をつくろうという意見が出た。

もちろん、これはパレスチナでの新聞が書いてるわけですけど、それをエジプトの中にも前から王政批判というのがある。メッカで暴動が起きて軍隊が何百人殺しても、鎮圧しても、報道されないとか、だから私はアラブ人全部が一緒とはいわない、ヨルダンの王様

もサウジアラビアの王様も信用できないと思つている。彼らは金や地位のために、そこに住んでいる市民達を売り渡しても平気、パレスチナ人を殺しても平気。

そういう意味においては、パレスチナ問題を本当に理解しているのは、パレスチナ人だろうし、アラブ諸国の一般民衆だろうと思う。今の政府をどれとつたつて完全には何もやれないし、同じアラブでも色んな立場の国があるし、アメリカの今度の戦争のやり方を見ると、別にパレスチナと直結しなくても、やり方おかしいと思つた、というのはアメリカ製の武器でいつもやられているから、現地からみたらアメリカが何しにきたかすぐ分かつてしまう。決してアラブ人民のために来たなんて誰も信用しない。

日本が一番情報でもムチャクチャになってるらしい。というのは例えば、石油で白鳥が汚染されて真っ黒になつたのなんか、どつかのヨソの国の石油で汚染された鳥の写真を使つてるのではないかと言われています。ともかくイラクの悪宣伝をたれ流して「正義の戦い」を作つていくわけです。だからイスラエルのためにアメリカがどれだけ金を与えて、武器を与えてきたことか、なぜそうするのか、不思議な話です。アメリカがイスラエルに援助してきた理由は何だと思えますか。

C それは、あの地帯は肥沃な三日月地帯といつて資源の豊かなところだから、要するにイスラエルがそのまま独立されても困ると思う。アメリカの意のままに動くということ前提としてイスラエルから資源を安く売ってもらつたり、アメリカが、ユダヤ人がかわいそうだからイスラエルに住ましてあげる、ということをお伝えすることにより、自分の操り人形を中東においておけば、何かあつたら押さえられるということが多分あると思う。

信原 実際、押さえているんですけど、例えば石油に関しては、第一次世界大戦があつてその時から分割線がひかれてますけど、石油が出だしたのもその時からです。だからイギリスなんかクウェートを離さない。アメリカは遅ればせに中東の石油市場争奪戦に参加しているわけ。最初はイギリスとかダッチIIシエルとかがイランとかイラクとか押さえてたわけ。それに対してアメリカは新参者でサウジアラビアとかに石油を確保しに入つたわけ。その時丁度第二次世界大戦のあとにあの問題が持ち上がった。第二次世界大戦後にアラブバースト運動や民族運動が起こつて王政が倒されていく、イラクも一九五八年にクーデターみたいなのが起こっている。シリアやレバノンも四〇年代に独立して

いる。あとサウジアラビアとヨルダンだけ王政が残っている。アラブの石油権益をとるために王政を一つは擁護する。ナセル大統領とかあそこも王政を打倒している。それが五二年（エジプト革命）のきなみ独立運動があった。それを押さえる憲兵がイスラエルである。

民族解放闘争は、弾圧しなければならぬ、パレスチナは見せしめであるということなんです。パレスチナをシリアやイラクもずっとしていたし、エジプトなんかは最たるものです。今のザダッドと次のムバラクはアメリカよりになっているけど、ナセル大統領というのは非同盟運動を中心になってやっていた。

中東がどんどん独立してソ連と仲良くなつていく、実際、シリアとソ連は戦略同盟を結んでいる。それに對してイスラエルを支援し、くさびを打ち込んでアメリカの権益を守ろうとした。今やソ連が位置を降りた。今度の中東戦争にも反対しない、そうするとアメリカはアラブ総体を包括して支配したい。それはもうキッシンジャー外交からはじまっている。キャンブデージッドもそうだったけど、それでもうまくいかなかった、イスラエルは言うことかへんし、アラブも言うことをきかなかつた。そしてずーっとアメリカはイスラエルをゴテゴテに支援してた。

今度の湾岸戦争ではイスラエルちよつと待てよといふことでイラクをパーンと叩いた。サウジアラビアとエジプトを抱き込んで湾岸に恒常的に戦略軍隊を配備した。クルド地区にアメリカの中央軍をおいている。八〇年代からすでにジェーゴガルシアというインド洋から一日で行ける距離に、RDFというアメリカの軍隊を置いている。サウジアラビアがずっと恒常的に基地を置くなという風にしてきたから、今度の湾岸戦争も契機にアメリカを恒常的に軍を置くことになった。

オマーンって知ってます？ サウジアラビアの南イエメンとオマーン。こつちがペルシャ湾、こつちがシナイ半島でエジプトになる。要するにこの地図でいうと、サウジアラビアのはしっこにオマーンという国があるんですけど、そこにすでにアメリカが基地を置いている、それからアフリカのソマリヤ。サウジアラビアはどうも秘密の基地を置いていた、だからアワークスを何機かアメリカが日本に買わせるでしよ。あれがすでにサウジアラビアにあった、サウジアラビアが百何十億ドルもの武器をアメリカから買っている。総体では何十億ドルイラクよりも多額の金をサウジアラビアは軍事費に注いでいる。イスラエルとしては反対してきたけど、アメリカは議会でもめながら、両方にや

ろうと売っている。

サウジにも武器を与えたけど、悲しいかなサウジには軍隊がおらんかった。それでアメリカが五〇万の軍隊を送った。今もアメリカ軍は駐留している。今まではイスラエルで憲兵の役割を果たしていたんですけど、今度はサウジアラビアとかエジプト、アラブ諸国の反動派・右派を抱きかかえてアメリカが両方を支配できる、そういう意味ではパレスチナは包囲されている、今までよりもしんどくなっている。だからイラクがどっちに転ぶかというのは大きい、今まではイラクがパレスチナを支援してきた。これからは、力がなくなっているし、アメリカが軍を駐留させるし、クルド問題やシリアの内戦はあるし、するとしばらくはパレスチナ人は世界に見捨てられるだろう。そういう意味ではアメリカの思惑通り日本がお金の支援でそういうことやってきたから、だからイスラエルの見方に関しては勉強して欲しいけど、いろんな人がいると思います。

今新聞読んで、イスラエル・ピース・ナウ・ムーブメントとかそういうのがあるんですよ。だけど一つ言えるのはヨーロッパ系のユダヤ人はアラブ人を軽蔑していることか、例えば日本人がアジア人を軽蔑するように無意識の中で、そういう感覚をもっているみたい。

だからヨーロッパが上で、アラブ人は野蛮人だと思っ
ている。それ、近代的ビルを建てて、アメリカや世界
各国から寄付を集めてイスラエルは建国したから。映
画で見たように現地の人は汚いなりしてますから、ヨ
ロッパの人からしてみればあんなもんアホやと、人
に言われただけで煽動されてあんなもんアホや犬やと、
そういう教育を受けているということ。

A 僕が言いたかったのは、政治的な行動が、それはそ
れぞれの文化の中で育てられるものだけでも、あまり
にも政治的な行動が、かけ離れていて、不思議とい
うかおかしく見えるのではないかということですよ。

信原 だから我々とかけ離れてるにしても、石油の問題
とか今度の湾岸戦争では、現実にとっちを助けている
のだ、と問われたと思うんです。日本政府は両方を助
けますといってるけど、イスラエルへ行つて、あんな
ところもうちよつと難民を助けなさいよといえ、イス
ラエルは融和政策をとろうとする、それはちよつと困
りますと中山は拒否してた。

イスラエルに金をやるよりは現地にいつて金落とそ
うと、日本はその様なずるいところがあるから、今イ
スラエルと直接、決闘はせんけどもトヨタが何万台の
車を輸出しましたとか、ほとんど経済的にはイスラエ

ルとやりかけている。日本はどっち向いてるねんということですね。私は現地の人々が平和になり幸せになることを考えてやらないとだめだと思う。政府がいいといったからいいという問題ではないと思います。

D イスラエルのアラブ人達、特に若い人達も宗教を信じてるんですか？

信原 若い人はどこの国も宗教はなれしてます。一般的には、だからさつきも映画の中で、私は共產主義者ですという人がおったでしょう。それに対してものすごい宗教熱心な人もいますし、日本よりは総体的にイスラム教は熱心ですね。私の周囲の人達で毎日お祈りする人は半分もいない、若い人達はすもいない。年いつて私は天国にいきたいと宗教にすがる人は多い。若い人は色々な社会問題があるからそこで問題を考えて、もうこれはイスラムでないとこの問題は解決しないからと、熱心な原理主義者とか若い人もいますけど、要するに習慣と生活の文化みたいなものですよ、宗教は。だからユダヤ教徒と最初から対立していたのかというとそうではない。もちこまれたもの、もともと二万人のユダヤ教徒が残っていたときは平和共存していたんだから、もう二〇〇〇年も前にユダヤ国家がつぶれて、残った人は少数派やし、焼き討ちの必要もないし、

アラブ諸国にユダヤ教徒は一杯いた、レバノンにもいた。イスラエルが建国されてから色々、対立し始めた。ユダヤ教徒とイスラム教徒の中に。建国の前は、そこはユダヤ教徒、あそこはキリスト教徒と、みんな隣合わせだった。日本だって、何とか宗派とかあっても一般の大衆は宗派が異なるからといって喧嘩しない。武士がいた時代にはけんかしたけれど。要するに三大宗教といってもひとつの根でしょ、ユダヤ教から出発してキリスト教が生まれ、イスラム教が生まれた。アラブとヤホベと名前は違うけど一神教を唱えてるのは同じなのです。

B 僕達が、マスコミで知らされることとは違うことがかなりあるんですか。

信原 マスコミが全部違うとは言わないけれども、まず見方が西側の国からモノを見る、アメリカ、ヨーロッパ側から日本を見る。自由主義陣営の一員であると日本政府が自認している。そういう立場が新聞でも強いと思う。

国際貢献といっても、どちらの側からと言えば、アメリカや、ヨーロッパとどう歩調を合わすか、を国際貢献といっている。じゃあ本当に現地で困っている人の救援はというとボランティアに行きましよう、金も

やりましようと言うけれど本当にその人達の政治的立場を理解していない。

政治的立場はアメリカ寄り、ヨーロッパ寄りというのは当然と思つていて固定していると思う。それを反対するのはあいつはアカやとか少数派やとか、あいつは変わつてるとか言われる。まず日本人の偏見を除かないと世界はみえないんじゃないかな。

D 国際化と言えばアメリカやヨーロッパの方を考えますけど、アジアとかアフリカとか第三世界のことを考えるのは少ないと思う。

信原 その国が遅れているというのは認識で捉えている。援助せなあかんとか、ODAでお金出さなあかんとか、そういう国際化なんです。だから立場の問題です。もちろんアジアにもお金をを出しているし、日本は世界一ODAに金を出している。それでもアメリカは金出せ、武器出せ「足らん足らん」といつている。またそれに従わなければ日本人はあかんと思つてみるみたい。

B アメリカの影響が強いみたい。海外旅行といえればアメリカも多いみたい。

信原 アジアもよく行つてみるみたいやけど、アジアのどこを見てくるか、どういふ立場を自分で考えるかと

ういことですね。アジアでも商社員で女中雇つて、いいアパートで暮らしてる人は現地の人を知らない。日本人は金持ちだから泥棒にあつてせいぜい殺される。現地のことを行つて理解するところからはじめないといけない。

B 現地へいかないと本当の事は学べないと？

信原 もちろん観点の問題ですから、自分が色メガネをつけていけば見えてくるかも知れない。日本人でもいろんな運動してる人がいるから、アジアから日本にもよく来る。フィリピンの人も来るし、アフリカの人も来るし、ニュースだつて読み方で見えてくるものはないと思ふんです。

——時間の関係で中途半端になつてしまいましたが、本日はどうもお忙しい中ありがとうございました。

年	
AD 44	ユダヤ王国、ローマ領となる
2 C	ハドリアヌス皇帝、ユダヤ人をパレスチナから追放
8 C	ムーア人、スペイン・ユダヤ教徒を保護
〇七一	サラセン帝国のイエルサレム占領(キリスト教徒迫害)
〇九九	イエルサレム王国(一一一八七)
二五〇	マメルク朝おこる
二八〇	マメルク朝、パレスチナ侵略
四〇五	オスマン・トルコ再興
16 C	西ヨーロッパ・ユダヤ、東方へ移動
七七二	ロシア・ユダヤ人人口六〇万人
八〇〇	ヨーロッパ・ユダヤ人人口二五〇―三〇〇万人
八一四	パレスチナ・ユダヤ人人口一万人
八五〇	ヨーロッパ・ユダヤ人人口五〇〇万人
八六九	スエズ運河開通
八八一	ロシア・ボクロム(ユダヤ人虐殺)
八八二	ルーマニアから最初のシオニスト移民。イギリス、エジプトを軍事占領
八八四	オスマン帝国、ユダヤ人のパレスチナ入植を禁止
八八五	サルタン・アブデュル・ハミト、ユダヤ人入国を制限
八九一	パレスチナ人、シオニストのパレスチナ浸透に抗議。 青年トルコ党結成
八九三	「シオニズム」の言葉誕生
八九四	ドレフェス事件。フランスでユダヤ人排斥
八九六	ヘルツル「ユダヤ人国家」刊行
八九七	第一回シオニスト会議(パレスチナ郷土建設を決議)
九〇二	エジプト政府、ナイルの水をユダヤ人入植地に送ることを拒否
一九〇三	イギリス、ユダヤ人共同体を承認

年	
一九〇五	第七回シオニスト会議(シオニスト運動の最終目的地パレスチナを確認)
一九〇八	パレスチナに本格的なシオニスト植民地建設。青年トルコ党革命
一九一一	第一〇回シオニスト会議(東ヨーロッパ人の主導権回復)。ワタン党設立
一九一四	第一次世界大戦始まる。ヨーロッパ・ユダヤ人口一〇〇〇万人
一九一五	マクマホン書簡発表(大戦後のアラブ独立を約束)
一九一六	サイクス・ピコ条約。英仏で中東分割を決める。シオニスト機構二〇万人会員
一九一七	バルフォア宣言。ロシア革命
一九一九	パリ講和会議。コミンテルン結成。ファイサル・ワイツマン協定。イギリス、パレスチナ統治権を獲得
一九二〇	国際連盟成立。パレスチナ・アラブ暴動。イラク蜂起
一九二二	国際連盟、バルフォア宣言を受け入れ。エジプト完全独立。パレスチナ・ユダヤ人人口八・三万人
一九二九	パレスチナ・アラブ暴動。ムスリム同胞団設立
一九三〇	ロンドン軍縮会議。シリア共和国誕生
一九三一	パレスチナ・ユダヤ人人口一七・四万人
一九三二	サウジアラビア王国成立。イラク王国独立
一九三三	パレスチナ・アラブ暴動
一九三六	チェルニジア暴動。ユダヤ人難民会議(31カ国)
一九三八	第二次世界大戦始まる。三九年白書(イギリス政府)
一九三九	ドイツ軍、ユダヤ人を大虐殺。ビルトモア綱領を採択
一九四二	ユダヤ人国家建設を決定。パレスチナ・ユダヤ人人口四八・八万人
一九四三	レバノン共和国成立

年	
一九四四	シリア共和国成立。アラブ諸国会議
一九四五	アラブ連盟結成。イフン・サウド王、ルーズベルトにユダヤ人への領土割譲を提起。第二次世界大戦終結。国際連合成立
一九四六	ヨルダン王国成立
一九四七	グロムイコ宣言(ユダヤ人自由権利承認)。アジア諸国会議(デリー)。国連パレスチナ分割・ユダヤ民族独立案可決
一九四八	ガンジー暗殺、デイル・ヤシーン村の虐殺。イスラエル共和国成立(ユダヤ人六〇万人、アラブ人一二〇万人)。パレスチナ難民一〇〇万人
一九四九	イスラエル・エジプト停戦協定。中華人民共和国成立
一九五〇	イスラエル、北京政府承認。ヨルダン、イエルサレムのアラブ人区域併合
一九五三	エジプト共和国宣言
一九五四	イスラエル、国連にて北京政府承認に棄権。エジプト首相にナセル就任
一九五五	イスラエル、中国を訪問。スエズ運河会議(ロンドン)。第一回アジア・アフリカ会議(バンドン)
一九五六	スエズ運河。イスラエルと英仏がスエズに出兵
一九五七	スエズ運河再開
一九五八	第一回アジア・アフリカ連帯会議(カイロ)。アラブ連合共和国成立。
一九五九	ヨーロッパ・ユダヤ人人口四〇〇万人以下。北米・ユダヤ人人口五五〇万人
一九六一	第一回非同盟諸国会議(ベオグラード)
一九六二	アルジェリア独立。イスラエル人人口二三〇万人
一九六三	アフリカ統一機構結成。周恩来、アラブ訪問

年	
一九六四	第一回パレスチナ会議。第二回非同盟諸国会議(カイロ)
一九六五	アラブ共同市場発足。第二回アジア・アフリカ会議延期(アルジェリア・クーデター)。PLO(パレスチナ解放機構)発足
一九六六	第一回三大大陸人民連帯会議(ハバナ)。
一九六七	第三次中東戦争(六日間戦争)起こる。新たなパレスチナ難民発生
一九六八	イスラエル労働党成立
一九六九	イスラエル首相にメイア女史就任。PFLPの連続ハイジャック
一九七〇	ナセル死。サダト大統領就任
一九七二	アラブ赤軍のテルアビブ空港襲撃事件。ミュンヘン乱射事件
一九七三	第四次中東戦争
一九七四	スエズ兵力分離協定。イスラエル首相ラビン就任
一九七五	サウジアラビア・ファイサル国王暗殺。スエズ運河再開
一九七六	レバノン内戦。イスラエル軍エンテベ空港襲撃
一九七七	イスラエル、ベギン内閣成立。サダト大統領、イスラエル訪問
一九七八	キャンプデービッド会談。アラブ12か国首脳会議
一九七九	イラン革命。エジプト・イスラエル中東和平条約
一九八〇	イスラエル、イエルサレム首都宣言。イラン・イラク戦争
一九八一	サダト大統領暗殺。PLOアラファト議長来日。イスラエル、گران高原併合決定。
一九八二	イスラエル、レバノン侵略。ベイрутでパレスチナ人大虐殺。アラブのフェズ憲章。国連のイスラエル非難決議で日本棄権。
一九八三	東京で「イスラエルのレバノン侵略に関する国際民衆法廷」開かれる。イスラエルとレバノン事実上の和平条約成立

投

稿

現代思想の快樂

そのⅢ

『ダダ屍体解剖』 特別編

〈世紀末の光と影〉

松原恵二

ええ、本日は世紀末について話を進めたいと思います。ひとくちに世紀末と言いますが、単なる世紀の節目のことを言うのではなく、ここでは主に一九世紀の終りから第一次世界大戦の勃発する二〇世紀初めまでを、その中で起こった芸術あるいは社会状況などをまとめて世紀末と呼ぶことにします。

確かに我々が今生きている時代、この時代も世紀末と呼べるし、世紀末になるとある共通した社会状況が生まれたりするのも事実です。一般に、世紀末になると社会が非常に不安になったり、色々な出来事が起こったりするとよく言われます。例えば、社会が不安になる兆しが

現れると、まず宗教が流行しますね。平安時代でも末法思想が流行し、多くの貴族が仏教にすがったりしたということが歴史の教科書なんかを読むと書いてありますし、今でも多くの新興宗教が流行っていて、何でも君達のような年頃の若者の信者が非常に多いとのこと。このような出来事も表層的ではありますが、世紀末の要素を含んだ出来事なのかも知れません。

ただ、最初にも述べたように、一九世紀から二〇世紀初めまでの三〇年間、このことを特別な意味で世紀末と言うのですが、じゃあなぜこの時代のことを特に世紀末と言うのか、ここからお話したいと思います。

一つは、世紀末という時代が、それまでの時代から現代へと通じる転換期であったこと。具体的に言えば、世紀末に至るまでに、フランス革命を始めとする様々な政治革命や産業革命が起こったり、あるいはマルクスによって共産主義が唱えられたかと思えば、ニーチェによつ



て「神は死んだ」と叫ばれたりして、社会が大きく揺れ動いた。ただここで大事な点は、世紀末はそれまでに起こった様々な出来事を踏まえた社会、ここではブルジョア社会のことですが、それが非常に成熟し安定して来たとも言えると思います。

次に世紀末の抱えていた問題、あるいは世紀末に至るまでに出て来た問題というものが、現代に至るまでまだ続いているということです。例えば、一九世紀中頃からジャーナリズムが発達して来ました。すると数多くの新聞や雑誌がそこから生まれて来る訳ですが、その新聞や雑誌が美術の個展や音楽会を開いたり、あるいはそれについての批判を載せたり、更には当時非常に人気があったのですが、新聞に小説を発表したりしたのです。それから、ということが起こったかという点、芸術に対する態度といったものが変化して行くのです。

それまでの芸術というものを考えてみますと、これは全く少数人数のものであって、例えば絵画にしてもどこかの貴族がお抱えの画家などに、今度はこういつた絵を書いてくれと注文すると、画家は貴族の提言どおりの絵を書けばそれでよかったです。それがジャーナリズムの発達によつて、それまで個人的な関係のものであった芸術が大衆の手に渡り、以前なら貴族などの注文で絵を書いたり

彫刻を造っていけばよかつたものが、芸術家はかなり不特定で多数のために作品を作らなければならなくなつた。そこから何が生じたかと言へば、芸術作品の多様化が生まれ大衆化・通俗化され、一方ではより個人化されたものが生まれた。

もう一点だけ言わせてもらうと、現代に通じる問題として、宗教の問題があります。確かにこの時代にはここではキリスト教のことですが、これが非常に懐疑的なものとして捉えられて来る。周知のように、ドイツのニーチェが「神は死んだ」という有名な台詞を吐くことによつて、ついにはこのことが決定的なものとなつてしまつた。つまり、ニーチェのこの言葉によつて絶対神などというものが崩れてしまつたのですね。

ただしかし、神様を絶対者から引きずり降ろしてしまつたのはいいが、引きずり降ろすことによつて、それまで誰もが持っていた宗教感情といつたものが非常に空虚なものとなつてしまつた訳ですね。で、どうなるかと言つと、神というひとつのメカニズム体系を取り払つてしまつと、宗教感情というものがどうしても相反する神秘主義やその他もろもろの異教的なものという形態に拡散してしまふ。そしてそこから、芸術家のなから、自身自身が超越者に近づいていく、或は自分のなかにそ

うた超越的なものを求めていこうとする人が増えてくるのです。ニーチェのツァラトゥストラが良い一例だと思ひます。ワーグナーやマラルメ、ボードレールもその傾向があつたと言えるでしょう。

と、まあ、なぜ世紀末といへば一九世紀のことを指すのかということについて、ざつと述べてきた訳ですが、まとめますと、ひとつはそれまでの社会から現代に通じる転換期であつたということ、もうひとつは現代に至る様々な問題を世紀末は抱えていたということ、この二点が主に言えることだと思ひます。

* * *

そこで、ここまでの講義のなかで、何か疑問に思つたことや提言がありましたら、何でも構いませんので質問して下さい。

では、そこに座っているあなた、あなたの質問から始めることにしましょう。

「あの、僕は世紀末というと、どうしても暗いイメージを持つてしまい、余り好きにはなれないのですが、実際に世紀末というものは暗かつた時代なのでしょうか？」

そうですね、確かにある意味では世紀末は多分に暗い面を持つていたと言えるでしょう。恐らく、あなたのお

つしゃりたいのは世紀末に流行ったデカダンスやショールペンハウエルなどの影響を受けたベシミステックな思想のことだと思えます。例えば文学作品において、一方では自然主義カリアリズムの文学があつた反面、自己の内面的な世界を描こうとする作家が多かつたのも事実です。あるいはウィーン世紀末の作品にはフロイトによる影響なのでしょうか、死とエロスをモチーフとした作品が非常に多い。

ただ余りにも一方だけを強調してしまうのも、その時代を性格に表現していることにはならないでしょう。今まで述べてきましたのが、世紀末の影の部分であるとするならば、世紀末の光である部をこれから述べようと思えます。例えばひとつには、アール・ヌーヴォーと呼ばれる芸術の動きがありました。これは工芸などの分野で主に起こつたことなのですが、それまでの直線的な工芸品に曲線美を加えたりしたのです。そのような花瓶や水差しといったものを写真集などで見たことがあると思えますが、またあるいは、ジャポニズムという動きもありました。日本の浮世絵などが印象派に大きな影響を与えたのです。確かに世紀末というのは暗い頹廢的な面もありますが、一方ではこうした明るい面もあつたのです。お分かりになつていただけただけでしょうか。

それでは次の質問にいきましょうか。ではあなた。

「あのう、以前に小説を読んでいた時に思ったのですが、スタンダールやユゴーのような作家は当時の社会というものを初めに描き、それから人間を描き出しているのではないかと……。あまり世紀末と関係ありませんね。」
 そんなことはありませんよ、非常に鋭い質問だと思えます。極端なことを言えば、今彼が言つたスタンダールやユゴー、それにバルザックやモッパッサン達の作品から私達を読み取れるものは、まさしく彼等が生きた社会そのもの以外には無いと思うのです。そうですね、例えばヴォルテールという作家の『カンディード』という小説の最後を読んでみましょうか。

「いかにもおっしゃるとおりです」とカンディードは答えた。「何はともあれ、わたしたちは畑を耕さねばなりません」

とね。一九世紀西欧の労働観を見事に表現していると思いませんか。

それでは他に何かありませんか。

「世紀末を表す言葉にデカダンスという言葉をよく使いますが、この言葉の意味をもう少し詳しく教えてくれ

ませんか」

まずデカダンスといえはあのボードレールを連想するだろうと思いますが、そのボードレールが次のようなことを言っていたと思います。デカダンスとは憂鬱あるいは虚無のなかに自らを沈滞させ、その中に美を求めるところだ、と。後にデカダンスの代表のようなヴェルレーヌも似たようなことを言っているのですが、つまりデカダンスとは単に頹廢的な生活や虚無的になることだけでなく、



その中に美を見つけ、その美を最高の徳、もしくは唯一の目的とすることなのです。

ではそろそろ最後の質問をうかがいましょう。あつ、では一番前のあなた。

「あのう、さつきから世紀末の作家ということで、ボードレールやランボーなどの名前がよく出てきているように思うのですが、例えばボードレールは確か一八六七年に死んでいますし、ランボー自身は一八七〇年頃に『地獄の季節』を書きあげ、それ以後は詩作していません。

それに世紀末にはジッドが『地の糧』という作品を書いたりしています。だから遠回しな言い方になりましたが、世紀末といっても実際の世紀末には、デカダンスのようなイメージばかりではないと思うのですが——」

確かにそのとおりです。時代を少しさかのほれば象徴派の動きもあった一方で、ゾラを中心とした自然主義という運動もあった。この自然主義、言い換えればリアリズム文学といったものは、先程も言いましたように当時の社会状況と密接に関係していたのです。産業革命が起ると、まず都市に人口が集中し、都市化されていきました。また科学や技術の発達により生活が合理化され効率化され、その反面では階級対立が非常に激しくなり、資本家と労働者の階層がはっきりと分化した。そのへん

のところはサン・シモンやフリーエ經由でマルクスの『資本論』や『共產党宣言』を読めば一目瞭然です。その貧しい労働者たちの悲惨な部分を描き、そうすることによって社会の俗悪さを暴露しようとしたのがゾラなのです。そこで他の自然主義の作家たちは、社会の俗悪な部分を描いていったのですが、突き詰めていくに従って、次第に主観を排除し、ひたすら客観的な事実のみを描いていけばいいのだという風になっていくのです。そうすると、主観を排除して客観的に事実のみを書いていればそれでいいのか、という問題も当然起こってきました。

例えば、ユイスマンスという作家がいますが、彼の作品の『さかしま』はデカダンスの典型ともいえるような作品で、当時のデカダン作家はこの『さかしま』の主人公であるデ・ゼッサントという人物に非常に憧れたりしたのです。しかし意外なことに、このデカダンスの代表のような作家は自然主義から入っていて、しきりにゾラの家の集まりにも参加していたようです。このことから何が言えるのかと申しますと、いきなりデカダンといった動きが世紀末に現われた訳ではないのです。つまり、そのようなものが出てくる下地がそれなりにあったという事、そしてそれに色々な動きと関係しながらデカダンスが現われたのだということが言えると思います。も

っと極端なことを言えば、象徴主義やデカダンスに至る流れの源はロマン主義にも関わってくるでしょう。これは主にドイツ・ロマン主義者に当てはまることだけれども、ロマン主義者、例えばゲーテですね、その彼らというものは見えざる世界への憧憬、言い換えますと限定された事物・事象の背後に見えざる世界という無限定なものを求めようとする気持ちが強いです。このことは世紀末作家にも共通することですね。だから言ってみれば、世紀末の作家の特徴といったものは、何も世紀末からではなく、ロマン主義の運動からその流れはあったのだということ、このことをよく覚えておいて下さい。

それから、ジッドに関することですが、この人も全く世紀末に関わっていないかという点、決してそんなことはないのです。例えば、ジッドの日記を読んでいても、ある箇所でショーペンハウエルをとて嬉しそうに読んでいます。ショーペンハウエルは著者は世紀末にはよく読まれたようで、フランスでは初め『意志と表象としての世界』ではなく、断章のようなものがたようですが、それでも彼の著者が翻訳された時は、かなりの芸術家に読まれたようです。まあ、このことから世紀末的な時代の雰囲気を持っていた作家ではあったということが言えるのではないのでしょうか。

このことはランボーやゴーギャンなどにも言えることだと思いますが、ジッド自身もそういつた世紀末的な気分、もっと広く言えば、西欧的なものからの脱出をはかろうとした作家ですね。そのため、彼は世紀末の時代には、何度もアフリカへ行っている。言ってみれば、ジッドのような作家は、世紀末から次の世代へと移行する作家であったということが言えると思います。

* * *

さて、デカダンスの概要についてはこれぐらいにしまして、具体的な作品を講読してみることにしてしましましょう。作品は申しましたとおり、リラダンの『ヴェラ』とシニツラーの『レデゴンダの日記』、それにワイルドの『サロメ』です。それでは初めに、『ヴェラ』について述べたいと思います。

まず簡単にストーリーを述べてみますと、ダトール伯爵という人が主人公なのですが、その伯爵の最愛の夫人が伯爵との抱擁の途中に突然死んでしまうのですね。それでその死を悲しみ今だに信じられない伯爵が、それ以来屋敷のなかにひっそりと引きこもってしまい、まるで世捨て人のような生活をするのですね。それで自分の最愛の夫人の思いのなかにいて、実際彼女の身の回りの品

物などを全くそのままの状態にしておいて、あたかも彼女が死んでいないかのように振舞うわけです。そうして現実がはたまた夢現つのような生活を一年以上にわたって伯爵は送るわけですが、そのうちに不思議なことが起こるのですね。そうした生活を送っていくうちに、最愛の人ヴェラがあたかも自分と一緒に部屋にいるように感じられていく。初めはふつと自分の横を横切ったり、ピアノのうえにある楽譜がめくられてあつたりという程度のものが、次第に部屋全体が何か不思議な雰囲気になっていき、最後にはヴェラ自身の肉体をも伯爵は感じるようになっていく。そこでとうとうヴェラ自身を伯爵は抱き締めるのですが、まるで最後の抱擁のときのように、ただその時に伯爵は突然お前は死んでいるのだ、ということをや彼女に対して言ってしまう。すると突然にヴェラの姿は消えてしまい、それまで伯爵の夢現つのみかで生気を保っていたあらゆるものが、元に戻ってしまう。

とまあ大体のストーリーを述べるとそのようなものになるのですが、ここで面白いのは、いっけん成就するかに見えた伯爵とヴェラのを、伯爵が彼女の死を自覚してしまうというところで終わりを告げてしまうところです。ブルジョア社会の俗悪さを告発するという一方で、果てしない夢を現実として所有することのできるもののみが、

夢想の王国の主人になることが出来るといったテーマはわりとリラダンには多いようで、この作品でもそうですし、他には『未来のイブ』や『アクセル』などといった作品にもそのようなものがあると思います。この作品においても伯爵が夢を實在として捉えられているうちは、その夢のなかに入られたわけですが、その夢を實在として捉える事なく、いわばその夢を實在として捉えるエネルギーを失ってしまうときに、同時にその夢も失われていく。実際の世界も描くのではなく、自分の内面のなかの世界、もしくは自分の内面の中から世界を描こうとする傾向は、夢想家の父の影響もあるのですが、リラダンの場合、非常に強いように思われますし、このことは他の世紀末の作家にも言えることだろうと思います。さて次に、『レデゴンダの日記』について話を進めていきたいと思いますが、その前に軽く、ウィーン世紀末に大きな影響を与えたフロイトについて話しておく必要があります。御存じのようにフロイトという人は、無意識というものを説明しようとした時に、全ての場合にリビドー、性の衝動と訳されていますが、これで以って説明しようとした人です。当然このことは、ウィーン世紀末に影響を与えたようで、そのために当時の作家たちのなかには性を大胆な描写で表現したり、無意識を扱った



りして、本能に動かされた人間の生々しい姿を描き出したのです。シュニッツラーという作家は、そのなかでも代表的な作家なのです。

それでは『レデゴンダの日記』という作品の簡単なストーリーから述べていきたいと思えます。まず最初に作

者が夜の公園を歩いていると、まんざらに知らない仲でもない一人の下級役人に出会い、話を聞いてくれと頼まれる。そうやって男の話が始まっていくのですが、彼のことによれば、彼は大尉の人妻であるレゴデンダという女性に人目惚れをしよう。とはいふものの、彼はその女性に近付きになる機会はなく、そのため彼は想像の世界のなかでレゴデンダに出会い、その想像力はいつしか脹らんでいき、しまいには彼女と愛しあつていくようになる。ところが、彼が自分の夢想のなかで会つていたレゴデンダの方でも、実は彼女の想像のなかで彼に会つていた。彼自身の一方的な想像だと思つていたものが、実は二人の想像のなかの世界で実際に出会い、愛するようになっていたということが分かる。それが分かつたのは、彼女が彼と同じような体験をしていたのを日記につけていたからで、それを夫に見られたレゴデンダは驚きのあまり死んでしまい、その日記を見つけた大尉は怒りのあまり決闘を申し込み、その下級役人は決闘に敗れ死んでしまう。

この作品も、想像の世界の實在化という点では、さつき述べましたリラダンの『ヴェラ』に似ていないこともないように思います。ただ『ヴェラ』と少し違ふかなという点では、これはフランスの作家に共通した

ことだと思ひますが、リラダンにしろユイスマンスのような世紀末作家には、想像の世界を實現化することによつて人後樂園のようなものを創ろうとしたのに対し、シュニッツラーをはじめとするウィーン世紀末の作家には大胆に死とエロスを描いていこうとする傾向が強いように思へます。このことは当時のウィーンのある種の息詰まつた状況、すなわち都市そのものが非常に頹廢し老いていたことと密接な關係があるでしょう。

實際シュニッツラーという作家は、ウィーン世紀末の作家のなかでも特に性とエロスということにこだわり続けた作家なのですが、作品のなかでも「死ぬこと」というそのものずばりの一人の人間が死に至るまでの状況を克明に描いていく作品があつたり、かと思へば『輪舞』というつぎつぎに客を変えていく娼婦の性描写を赤裸々に描いた作品もある。どちらかといえばこういつた傾向の作品をこだわり続けて書いていつた人なのですが、『レゴデンダの日記』という作品はどちらかといへばシュニッツラーにしては異色の作品に入るかも知れません。

いよいよ最後にワイルドの『サロメ』について述べたいと思ひます。『サロメ』という作品は聖書の題材を元にして書かれた作品ですが、まあ文学の中には聖書の題

材を元にして書かれた作品がかなりありますね。実際聖書の中には、父親殺しや姦淫、あるいは近親相姦などといった非常にタブーだと思われるようなことがよく書かれているのです。例えばロシアにはドストエフスキーなんて作家がいますが、ある専門家などはドストエフスキーという作家は聖書一冊で小説を書いたなんて言っています。たしかにそういう聖書のなかのタブーとされていることを随分と書いてある作家でもあります。一例を挙げてみれば『カラマゾフの兄弟』では父親殺しが一つのテーマとなっていますね。とにかく『サロメ』という作品は聖書を元にして書かれた作品なのですが、近親相姦といったことも話のなかに現われてきますし、王の娘が予言者の首が欲しいとあって、その首を切らせて盆にのせて持つてこさせる箇所などは非常に残酷であり、ある意味では耽美的といえ言えるでしょう。まあこういった要素がワイルドにこの戯曲を書かせた一つの動機あるかも知れませんね。

それでは、まず初めにはこの作品の元になっている聖書の箇所を抜粋し、それからその場面と実際のワイルドの作品を比べてみることにしましょう。少し引用が長くなりますが、聞いてみてください。ちなみにこれは『マタイによる福音書』からの抜粋です。

……ヘロデは先に、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤのことで、ヨハネを捕えて縛り、獄に入れていた。すなわち、ヨハネはヘロデに、「その女をめとるのは、よろしくない」と言ったからである。そこでヘロデはヨハネを殺そうと思ったが、群衆を恐れた。彼らがヨハネを予言者と認めていたからである。さてヘロデの誕生日の祝い、ヘロデヤの娘がその席上で舞をまい、ヘロデを喜ばせたので、彼女の願うものは、何でも与えようと、彼は誓って約束しました。すると彼女は母にそそのかされて、「バプテスマのヨハネの首を盆にのせて、ここに持ってきていただきたいとございます」と言った。王は困ったが、いったん誓ったのと、また列座の人々の手前、それを与えるように命じ、人を使わして、獄中でヨハネの首を切らせた。その首は盆にのせて運ばれ、少女にわたされ、少女はそれを母のところを持って行った。

というのが聖書に書かれてある原型なのですが、これをワイルドは、いかにも世紀末的な作品に作り上げていくのです。まず聖書では娘の役割といったものが非常に小さく、単に母親にそそのかされて首を切らせたという風になっていますが、ワイルドはこの娘に目をつけ、戯曲のなかでは非常に情熱的な女性「サロメ」に描いて

いくわけです。

捕えられた予言者、ここではヨカーナンという名前なのですが、を一目見ようとしたサロメは、その予言者の余りにも美しい姿に心動かされ、その予言者にくちづけをしようとする。実際、聖書のヨハネは、髭だらけのもっと年をとった人物ですが、ここでは非常にうら若くしかも美しい青年に描いている。

しかし、ヨカーナンはサロメの申し出にもあくまでも拒もうとし、隠し井戸のなかに戻っていく。そこへ王であるヘロデとサロメの母であるヘロデヤがやってきて、ワイルドの戯曲ではヘロデが兄の嫁であったヘロデヤを妻にするだけでなく、その娘のサロメにも色目を使っているということが暗に示されているのですが、そのヘロデがサロメに踊りを踊ってくれと頼む。

しかしいくら頼み込んでも、当のサロメは首をよこに振るばかり、とうとう困ったヘロデは、踊りを踊ってくれるならば何でも言うことを聞いてやろうとサロメに約束する。そこでサロメは王のために踊りを踊るのだが、その代わりヨカーナンの首が欲しいということを王に述べる。ここがこの戯曲のいちばんのポイントなのですが、ヨカーナンの首が欲しいサロメが言っているのは、聖書に書かれてあるように予言者を殺そうとしている母にそ



そのかされたわけではなく、あくまで自分の意志で言っていることです。それでは、どうしてその首が欲しいのかといえ、ヨカーナンが生きているときにはかなえられなかったこと、つまりその美しい予言者の顔にサロメがくちづけをすることなのです。そのことのために

サロメはヨカーナンの首を望むわけなのです。この辺りは非常にワイルドらしい発想であつて、芸術とは唯一美を求めることであり、その中に道徳などは追放されるべきであるというワイルドの考えが最もよく現われているように思えます。

* * *

以上、世紀末について述べてきました。そろそろ時間になつてきましたので、今回の講義（世紀末の光と影）はこのへんで終わりにしたいと思います。えつ、講義に使つた作品を全部教えてくれつて、そうですね、それでは黒板に書きますので興味のある人は書き留めておいて下さい。

- ・マルクス『資本論』『共産党宣言』（岩波文庫）
- ・ニーチェ『ツァラトゥストラはこう言つた』『この人を見よ』（岩波文庫）
- ・筑摩世界文学大系よりマラルメ、ランボー、ヴェルレーヌの詩および書簡
- ・ショーペンハウワー『意志と表象としての世界』（中央公論社世界の名著より）
- ・フロイト『精神分析入門』『夢判断』（新潮文庫）
- ・スタンダール『赤と黒』『バルムの僧院』（岩波文庫）

- ・ユゴー『レ・ミゼラブル』（岩波文庫）
- ・バルザック『谷間の百合』『ゴリオ爺さん』（新潮文庫）
- ・モパッサン『女の一生』『脂肪の塊』（岩波文庫）
- ・ヴォルテール『カンディード』『哲学書簡』（岩波文庫）
- ・ボードレール『悪の華』『パリの憂愁』（岩波文庫）
- ・ジッド『地の糧』『廣金つくり』（新潮文庫）
- ・ゾラ『居酒屋』『ナナ』（新潮文庫）
- ・中央公論社『世界の名著』よりサン・シモン、フリーエの著作
- ・ユイスマンス『さかしま』（桃源社）
- ・ゲーテ『ファウスト』（中公文庫）
- ・リラダン『残酷物語』（筑摩叢書）より『ヴェラ』
- ・『シニツツラー撰書』（東京・実業之日本社）より『レデゴンダの日記』
- ・ワイルド『サロメ』（岩波文庫）
- ・ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』『罪と罰』（岩波文庫）
- ・聖書

（つづく）

今回の『現代思想の快樂』は、独文科の竹内亨午氏との共筆である。

（まつばら けいじ・社会学部四回生）

投

稿

豆満江自由港化論について

——一九二〇年代と今日——

西 重 信

はじめに

昨年、中国がソ連と北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）との交渉によって豆満江（図們江）の出海航行権を回復して以後、豆満江下流での自由港建設の動きが具体化し始めた。すなわち中国は防川経済区、ソ連はハサン経済自由区、北朝鮮は哈山島経済特区などである。日本でも、環日本海経済圏を形成するうえでの重要な一環として大きな期待がかけられている⁽¹⁾。ところが豆満江自由港化は決してあらたに考え出されたのではなく、すでに一九二〇年代のなかばに提唱されたものである。松尾小三郎

の「豆満自由港」である⁽²⁾。この小論では、松尾の説くところを整理するとともに、その問題点をとり上げてみたい。

注

(1) 関寛治「湾岸戦争下で環日本海平和外交を考える」

〔軍縮問題資料 No一二五〕一九九一年四月、宇都宮軍縮研究室、藤間丈夫「動き始めた環日本海経済圏」
(一九九一年六月、創知社) などがある。

(2) 峯旗良充、松尾小三郎講演『吉林省開発と豆満自由港』(一九二五年九月、財団法人・奉公会) に収録さ

れている。かつて鈴木武雄は「『北鮮ルート』論」において、松尾を日本海中心豆満江経略の国防的、産業的重要性を説いた先駆者として注目した。

一、豆満江中心主義

松尾の豆満江中心主義とは、満鉄（南満州鉄道株式会社）を中心とした大連集中主義もしくは大連一港主義に対する批判である。いいかえれば大港主義および優秀船主義に対する批判でもある。一見すると合理的にみえる満鉄の政策が、実はいかに不合理なものであるのかを航路運賃、鉄道運賃、船舶と港湾整備に要する費用の面から以下のように説明している。

日本列島は弦月のように半円形をなして豆満江口に向っている。豆満江口からみれば、北は小樽、南は門司や下関迄の日本海沿岸諸港は全て五〇〇哩前後の等距離に位置している。これに比較して大連からは最も近い門司と下関でも六二二哩もある。これは航路距離で一〇〇哩以上、航海日数で半日、運賃において二五〇円の負担である。従って大連航路で採算をとるには三千トン級以上の大型かつ高速の優秀船を投入しなくてはならない。これに伴って国内の受入港の全ては、三千トン級船舶を標準とする築港が必要となる。ところが、日本海航路では

必ずしも優秀船を必要としないばかりか、むしろ小型船の方が適している。日本海沿岸のどの港でもすぐに利用することが出来るからである。さらに五〇〇哩前後の等距離輸送は、同一、低運賃に結びつく。これだけではなく、大連航路にはもつと大きな欠点が二つある。第一は、受入貨物が門司と下関に集中することである。つまり狭くて長い日本列島の一端にだけ陸揚げされるわけである。このため東北地方、東京、本州の日本海沿岸地方には、鉄道や沿岸航路による分配輸送が必要とされる。かりにこのような国内輸送機関が理想的に完備されたとしても、全国の津々浦々への鉄道網と港湾の整備に投下される莫大な資本は、各地方の地価を不必要に高めるであろう。そればかりか、このような輸送機関は先進工業国製品の輸入と輸送に利用されるだけであり、自ら国内産業の衰亡を招く結果となる。これに対して日本海航路では、陸揚げ貨物の鉄道輸送は日本海側から太平洋側への横断鉄道を使用するだけで充分である。船舶に比較して割高な鉄道輸送にあつては、縦貫鉄道の使用をできるだけ節約すべきである。

第二は、満州の貨物を大連に集めるために多大の鉄道運賃を費やしていることである。単価が安く大容量、大重量の原料輸送には、可能な限り鉄道を避けて水運と海

運を利用しなくてはならない。例えば運河と鉄道運賃を比較すれば、前者はトン当り八厘であるのに対して後者は二銭五厘である。まして一哩当り一〇万円といわれる運河の建設費を必要としない河川を利用すれば、この差はさらに大きい。しかも満鉄の輸送力は、一列車で千トンが限界である。満州の貨物は鉄道で大連やウラジオストックへ輸送するのではなく、豆満江口へ吐き出させるべきである。

二、豆満江の水運

大連集中主義の最も顕著なものが遼河水運への圧迫政策である。河川水運を再評価しようとする立場からの満鉄批判が、とりもなおさず豆満江水運の積極的利用という提言となる。松尾は以下のように言っている。

かつて遼河は、南満州における唯一の大輸送機関であった。遼河は東、西遼河からなる。東遼河は長白山（白頭山）の西北支脈に発源し、西遼河は内蒙古に発源する。両者は開原、鉄嶺付近で合流して大遼河となり、奉天省を流れて營口で遼東湾に注ぐ。營口は満州唯一の貿易港として栄えた。満鉄は設立直後から、遼河水運を東支鉄道と並ぶ競争相手として大資本をたのみに圧迫した。だが遼河水運は滅びなかつたばかりか、かえって日本の経

済勢力圏を離れて中国商人の独占的事業に帰してしまつた。同時に、満鉄は營口市民だけでなく中国人一般の反感をも買う結果になつた。さらに、東遼河を利用する吉林商人によつて間島（今日の吉林省延辺地方）の輸出入まで独占されてしまつた。満鉄は遼河水運を圧迫するのではなく、なぜ積極的に活用しようとしなかつたのであるうか。

豆満江は白頭山に発源する延長二二〇―二三〇哩以上の河である⁽¹⁾。沿海州の一部を流れる琿春河、間島を流れる嘎呀河、布爾哈通河、海蘭河、そして朝鮮西部の延面水や西頭水を主な支流とする。雪の深い森林地帯に発源するため水量が豊富で急には涸渇しない。しかし、江口では上流からの砂が日本海の東南の風浪によつて滞積し、水深五呎程度の狭い水路となる。豆満江水運にとつての致命的欠陥である。だが豆満江の価値がなくなつてしまふことではない。河口を除く本流と支流ではかなり上流迄の区間で小型船舶の使用ができ、なにより朝鮮⁽²⁾、中国、ソ連の三国国境沿いに水運可能な唯一の河川である。間島全域、沿海州の一部、白頭山東南部すなわち朝鮮西北部の産物を集めることができる。水運に限らず忘れ去られているものに豆満江の水輸送がある。満州では、農産物と木材が最も活発に移動するのは冬期

である。特に間島と朝鮮西北部では山道以外には搬出手段がなくなるにもかかわらず、この水上輸送は殆ど利用されていない⁽³⁾。

注

(1) 豆満江の全長は、佐藤種治編『滿蒙歴史地理辞典』(一九七六年復刻版、図書刊行会)では五三〇軒とされている。

(2) むろん松尾の言葉では「日本」となっている。

(3) 松尾は、一九二五年一月から二月にかけて豆満江下流の水上踏査を行っている。

三、豆満江自由港構想の背景

当時、間島を中心としてみた交易ルートには三つあった。一つは吉林を経由して局子街(今日の延吉市)に達するもので、主として遼河の水運を利用するルートである。二つめは、ウラジオストクを海港として沿岸航路でポシエツトに転送されて琿春に送られるルートである。三つめは、清津を海港として鉄道で会寧を経由して龍井村(今日の龍井)に至るルートである。但し、第三のルートは、ロシア革命直後のウラジオストクの治安上の問題が作用した一時的繁栄とみられていた。豆満江自由

港構想は、いわば第四のルートである。だが、めざす地域は間島であり、間島の開発が目的であるという点では他の三ルートと同様である。では、なぜあらたに第四のルートが必要とされたのであろうか。日本海から間島へ通じる第二、第三のルートについての松尾の評価を追ってみよう。

まず、標準軌道鉄道が敷設されていた清津と会寧を結ぶ第三のルートからみてみよう⁽¹⁾。このルートには既設鉄道のほかにも、会寧から豆満江岸を走る雄基迄の鉄道敷設計画もあった。ところが両線とも短距離鉄道であるばかりか、途中に前者は茂山嶺、後者は雄基嶺の難所をもっている。いずれも高率運賃の要素である。まして間島の産物は殆どが木材と農産物であつて、大量積の貨物である。茂山嶺の急勾配では本線用機関車を使用したとしても一列車で四五〇〜四六〇トンを限度とし、満鉄本線には遠くおよばない。しかも豆満江をはさんで連結する間島の天図輕便鉄道の輸送力は、一列車七〇〜八〇トンの過ぎない⁽²⁾。間島をとりまく鉄道敷設計画は「閑人の寝言」である。

次に第二のルートについてみてみよう。ポシエツト湾は豆満江口に近く、港湾として優れた地形を有する。琿春に最も近く、一二里半の距離は馬車で五時間である。

局子街や琿春の中国商人がウラジオストックでの商品調達の中継地としてさかんに利用した。しかし、なによりも英・米資本による築港計画が脅威である⁽³⁾。ポシエツトが外国貿易港として開港されれば、英・米両国の日本海での根拠地となることは明白である。間島全域、牡丹江、吉林地方はいうまでもなく、満州、蒙古の開発は独占されてしまうであろう。現に蒙古の甘珠爾開市の際の畜産市場では、英・米資本家のめざましい活躍がみられたではないか。日本は、ポシエツト開港にさきだつて豆満江口に自由港を建設し、水運と木材取り引きによる経済的根拠地とすべきである。これは、ひいては日本海の水産資源の確保と満州、蒙古、シベリアの「経済的日本化」へとつながるであろう。

松尾の豆満江自由港構想は、このような背景のもとに考えられたものである。

注

- (1) 清津は一九〇八年四月に開港され、清津と会寧を結ぶ軽便鉄道は一九一七年一月に標準軌道に改築されている。拙稿「内藤湖南と『北朝鮮ルート』論」(一九八六年四月、本誌第七七号)、「間島協約と『北朝鮮ルート』論」(一九八六年八月、季刊『三千里』第四七

号)、「北朝鮮ルート論」と朝鮮人の間島移住」(一九八七年一月、本学『経済論集』第三七巻第四号)を参照されたい。

- (2) 老頭溝と図們江岸(地坊ともいい今日の開山屯)とを結ぶ狭軌鉄道。一九二四年一〇月に開通し、日中合弁の天図軽便鐵路会社が経営していた。図們江岸から軽便軌道を備えた橋梁を渡れば上三峰である。ここから会寧迄は図們鉄道株式会社の狭軌鉄道が運行していた。なお当時の橋梁は日中間では合法的なものではなく、「図們江架橋協定」が結ばれるのは一九二六年六月である。

- (3) 資本金五五〇万ルーブルによるポシエツト築港と南部ウスリー鉄道の敷設が計画されたが、当時のウラジオストック政府の不安定性による外資調達が困難となり実現しなかつたといわれる。なお、ポシエツトはウラジオストックと同様に凍港である。一九二二年、ソ連は琿春との国境貿易を禁止した。

四、豆満江自由港の役割

さらに松尾の説くところに沿って、豆満江自由港が日本の大陸政策に及ぼす影響、日本の木材需給問題への寄与、そして間島の朝鮮人問題とのかかわりについて注目しよう。

松尾が想定した自由港区は、咸鏡北道慶興郡甑山から西水羅迄の豆満江右岸約六里の区域である⁽¹⁾。甑山の対岸は中国領の東端にあたり、張鼓峰のふもとに防川がある。従って、自由港区の対岸の大半はソ連領ということになる。自由港区の水面積は約五〇〇―六〇〇万坪、土地面積約二五万平方哩、繫船岸壁線延長約二〇―三〇里、市街地予定面積約七〇―八〇万坪である。さらに江口の浅瀬を回避して、豆満江下流から西水羅北方の東番浦や西番浦とを運河で結ぶ。その費用は約三〇万円ほどであろう。これによって豆満江は、不凍港西水羅を海港にもつことができる。将来の幹線鉄道の起点として考えた場合、この自由港区はウラジオストクにも勝るであろう。日本の満蒙政策は「大連基本」と「ハルビン^{ハルビン}目標」である。「豆満江自由港は、この古い経編策にかわって「豆満江中心」と「三姓標準」をつくり出すに違いない。寧古塔から三姓迄の牡丹江流域に沿う鉄道さえ敷設すれば、



松花江と日本海とを豆満江で結びつけることができるからである⁽²⁾。さらに、自由港を中国人にも開放することで満州と中国本土の統一の可能性が生じる。例えば煙草栽培のような有利な農業の普及による満州の経済開発は、

中国全体の發展に寄与すると共に中国人の日本への歎心をも呼び起こすことにならう。中国の發展はひいては日本の利益となる。日本と中国の利害が一致したうえでの

満蒙開發は、同時に欧米の脅威に対抗するうえで大きな力となる。しかし、自由港がもっと早急に果たすべき役割は間島の經濟開發である。間島での金利は最も低利のもので月三〜四分、最も高利では月一割にも達する。このため資金需要は乏しく、工業、貿易とも振るわず、農業に従事する大多数の朝鮮人も自給自足の生活を余儀なくされている。このような金融状態が、間島の發展を阻害している大きな原因の一つである。ここに開發資本となりうるにもかかわらず、見過ごされているものに豆満江材がある。その多くは琿春河と嘎呀河流域から伐採され、豆満江を流筏する以外に搬出手段をもたない。ところが江口の浅瀬は船舶の入江を阻み、流下された木材は西水羅もしくは雄基でしか船積みすることができない。このため筏は江口に近い土里で解体され、海上輸送に耐えうるようにあらたに組み直さなくてはならない⁽³⁾。さらに日本海での流失の危険性が高く、保険さえかけることもできない有様である。その結果、船積み迄に要する費用は材木一本の原価が二〇〜二五円であるのに対して一本当り二円五〇銭〜三円二〇銭もかかっている。つま

り原価の一五%にも相当する高率の輸送費である。自由港は豆満江材の輸出を円滑にする。間島への木材代金は資本の供給となる。

当時の日本国内の木材需要は年間約三億石といわれた。これに対して国内供給量は八千万石が限度であり、大半は輸入に頼らなくてはならない。この他にも薪炭用木材の伐採量が年間一億石と推定されている。これは国内の山林資源が三〇年程度で涸渇することであり、水源と水力發電にも重大な支障をきたすことは明らかである。消費木材のうち用材は従来どおり米国から輸入するとしても、年間五千万石以上の輸入を必要とする薪炭用木材は豆満江材に変更すべきである。薪炭用木材は容積が大きく価格は安い。太平洋はもとより大連からの輸送でも運賃は割高となる。これに比較して豆満江材は、短距離であるうえ小型船舶で必要な量だけを消費地へ直接輸送することができ、まして間島では、農地の開墾によって伐採された木材が過剰となっている。米国に支払う代金は日本にとって「片為替」に過ぎないが、間島への支払いは代金は水産物や日本製雜貨を買う資金となる。ここには、日常生活上での日中兩國民の「握手」が可能となるだろう。

日本国内では、人口と食糧問題への対応策として海外



移民論がさかんに唱えられている。しかし、この考え方は「棄て児」による解決策に他ならない。人口増加に見合う食糧増産は第二義的課題であって、まず取り組むべき問題は「生業」をつくり出すことである。一つの方策として、豆満江自由港を拠点とする日本海漁場の開拓がある。年間二億四千万円の水産額を二倍にすることも可

能であろう⁽⁴⁾。「生業」の創出は、日本だけではなく間島の朝鮮人にとっても急がなくてはならない。間島では中国人は朝鮮人に対して少数であるが、その大多数の者は貧しさにおいて同等である。三五万人の朝鮮人に対する朝鮮総督府の保護は、これらの中国人からみれば「差別保護」とみなされる。間島の中国人は日本を嫌い、そのほこ先は朝鮮人に向けられる。そして朝鮮人は日本を呪う。総督府の朝鮮人保護は、両者の反目だけではなく反日感情さえもつくり出しているのが現状である。間島の朝鮮人には保護や援助ではなく、「生業」こそが必要とされているのである。すなわち豆満江材の輸出による木材産業の開発である。

松尾にとつては、国の内外を問わないさまざまな問題に対処するうえで、「豆満江自由港の実現はまさに急務であった。

注

- (1) 付図を参照されたい。当時の中国とソ連との国境線の一部を長池（ハーサン湖）の東側としたのは、増田忠雄「満州東部国境の諸問題」（一九三九年三月、『満鉄調査月報』第一九卷第三号）による。

- (2) 牡丹江が松花江に合流する依蘭（三姓）と寧安（寧

古塔)とを結ぶ鉄道は、一九三七年に図佳線(図們^{トウモク}佳木斯)の全通によって実現した。

(3) 土里から雄基迄は海上一八哩である。雄基は一九二一年六月に開港されている。

(4) 朝鮮も含めた水産額なのか否かは明らかではない。

おわりに

シベリア出兵をへて日本帝国主義があらたな段階へと進み始めた時であるだけに、松尾の「豆満自由港」には、たんに先駆的というだけではない特筆すべき点がある。

なによりも、国家と国策企業に主導される経済政策には迎合しなかつたことである。大連集中主義に対抗する豆満江中心主義である。しかも、それは日本中心主義ではなかつた。満州の経済発展が中国の統一と発展につながり、ひいては日本の利益となつて返つてくる。このような両国の利害の一致こそが欧米列強に対抗する力であるという考え方である。間島の朝鮮人が必要としているのは、日本の保護ではなく経済発展のための産業であるといふ提言もここからでている。一方、問題も残されている。豆満江自由港の目的はあくまでも間島および満州の開発であつて、日本統治下の朝鮮は無視されている。当時、すでに清津と会寧間には標準軌道鉄道が敷設され、

清津港では通過貨物関税免除制度が実施されていたにもかかわらず、この貿易ルートのみならずのさまざまな発展の可能性を全く否定してしまつてゐる⁽¹⁾。日本海での小型船舶の積極的活用を唱える反面、咸鏡北道と間島の狭軌鉄道の価値を否定したことと合わせてきわめて不合理である。中国に対して示された理解が、なぜ朝鮮には適用されなかつたのか⁽²⁾。この問題は、我々が今日の豆満江自由港化を考えるうえでもいぜんとして残されている。

注

(1) この稿の執筆中に、北朝鮮の清津経済特区建設計画が報道された(『朝日新聞』八月二十八日)。北朝鮮にとつて、すでに港湾設備が整つてゐる清津港と咸鏡北道に張りめぐらされてゐる鉄道網を活用することは当然のことであり、哈山島経済特区の建設よりもはるかに合理的である。

(2) この問題は、後年、北朝鮮ルート論の鈴木武雄においてより顕著に表われている。そこでは、北朝鮮ルートは日本から満州へのたんなる出入路としてしか位置づけられてゐない。

(にし しげのぶ・本学経済学部卒業生)

連載

おいてけぼり

宮本輝試論 VII

芝田啓治

九、おいてけぼり 苦悩とその救い（その一）

(1) 宗教について

近年、日本では小さな宗教ブームが起こっている。
「苦しい時の神頼み」とは上手く言ったもので、大きな壁に突当りなかなか解決の糸口が見つからない時、人は救いを求めるのであろうか。

“religion” というのは、英語で宗教の事だが、そのルーツはラテン語の “religere” である。それは “re” + “ligere” から成り立ち、“re” は再びとか繰り返すの意味で、“ligere” は “bind together” であると辞書にはあ

る。つまり「再び一緒に縛る」という事になるのである。再び縛る、再び結ぶという事は、元々縛り付けてある、もしくは結び付けている状態があり、宗教に出会った時や信仰を抱いた時に、もう一度縛り直すというのである。ならば、人は元々何と結び合わさっていたというのか。

この語に沿って、もう少し考えてみたい。先ず、人は生命を与えられた段階で神と何らかの関係を結んでいるという事になる。太宰治の言葉の中に「罪、誕生の時刻に在り」（二十世紀の旗手）というのがあるが、存在そのものが罪であると考えての事と思われる。人は罪人

として誕生するのであり、その後成長を遂げ、自我の意識に目覚め、人によっては宗教との出会いを経験するのである。その時点で「神との関係を結び直す」「神との契約を結び直す」行為がすなわち語源から言える西洋の宗教なのではないだろうか。人によっては、宗教の必要性を感じずに生きていく事もある。しかし、その場合も己に神との関係が成立しているのではあるまいか。意識的に神との契約を断ち切らない限りに於いて、関係は続行するのである。

又、宗教や信仰は、元来自然に対する畏怖を根源にしている。精霊崇拜や自然崇拜はその原点と考えられよう。山や石や大木を御神体と考えたり、太陽や雷、それに風にも神が宿っていると崇拜するのである。

日本では、人々が日常恐れるものの順番として「地震・雷・火事・親父」というのがある。何日の頃から言われているのか解らないが、人智では防ぎようのない地震や雷を最も恐いものに置いているのは誰もが納得出来る。地震は火山活動と大いに関係が深く、現在でもそうだが、火山に対する恐怖は如何に科学が進歩しようと解決出来るものではない。人々は火山を「御山」とか「御岳」と呼び、噴火を「御神火」、火口を「御釜」と敬称を使っている。それは、畏怖の念の表れと考へてもよいだろう。

又、雷は「神鳴り」とも書き、正しく神の叫び声なのである。不可思議な神の怒りを人々は見たたり、聞いたりしてただただ恐れ入るしか術がなかったのである。次の火事も生命や財産を焼き尽くすので恐ろしいものだが、半分は過失によるものである。防ぎようも工夫や注意の仕方では考えられなくもない。最後の親父はどうして恐い順に入っているのかと訝る人もいれば、時代や世代によっても受け止め方が違うだろう。それに、恐いもの順の親父とは、元々父親の事ではなくて村の長の事ではないかと考えられる。年貢の厳しい取り立てをする村の長と百姓達は恐れただのである。飢えを甘んじて受け入れたとしても、決して徴税は拒めなかつたのであり「地震・雷・火事」に次ぐ存在として親父を置いたのである。この命令にはやはり逆らうことは許されなかつたのであり、「御上」の御意向には絶対服従なのであった。「御上」とは、天皇や政府の事でもあり、百姓にとつてはやはり恐れのある存在なのである。そのように考えれば少なくとも日本の宗教の場合、恐れを根源にしている場合が多いように思える。自然や超自然への恐れ、そして誰しも避けて通れぬ老いや死に対する恐怖、生に対する苦しみ。そのような恐れや苦しみをコントロール出来ない時、人は宗教を求め、もしくは出会おうのではないだろうか。



現在、小さな宗教ブームが起こっていると先に述べたが、今何故宗教なのかをもう少し追ってみたいと思う。

明治維新後の教派神道ブームや第二次世界大戦直後の宗教ブームも、表裏一体の関係を考えられる。幕府を打倒し、天皇中心の復古体制を引いた元での教派神道への厚遇と信者数の増加。その絶対的であった天皇制国家が

大戦で敗れた事によるショックで別の宗教に傾倒するといった具合に。

そして、今ほどのような理由でブームが起こっているのだろうか。世紀末思想が影響を与えてでもいるのであるか。現在、宗教法人が十八万を越すという驚異的な数や信者数が日本の全人口とほぼ同数という点に驚かすにはいられない。又、この数の表れ方が如何にも日本的宗教と言えるのではないだろうか。浅く広くといった感が否めず、又昔から日本では八百万の神が真しやかに認められて来たのである。

日本では、どうも描象的かつ超越的な宗教や神は成長しないようである。親近感の湧かないのはどうも駄目なようだ。

現在の宗教ブームは、高度成長以降の物質万能社会を謳歌し、更にはオイルショックによるいともたやすい翳りを見ると最終的に人は何に頼り得るのが少々危うくなつて来たためではないだろうか。その焦りが小さな宗教へと結び着く所以なのかも知れない。核家族・高齢者家族の増大が、精神的拠所を喪失させ、かえって祖先神崇拜のブームを引き起こしたり、西国三十三カ所参りのバスツアーを大々的に走らせたりするのである。又、高齢者の増加による老死の問題がより現実味を帯び、一層

それに拍車をかけているのである。

又、若者は若者で、精神的飢餓に一担さらされると対応する方法も、克服する方法も知らないまま心地よい集団へと流れ込んでいくのである。確かに孤独や精神的飢餓は、決して悪くはないしかえって必要である。その状態から脱出する方法を考える時、若者はかつてない成長を遂げるはずなのに。と同時に、政治だの学問だの、文学や哲学だのメカニズムを垣間見る事が出来るのではないだろうか。その道を志せば、一生かかるか解らないが、道筋が臆気ながらも示されるのである。しかし、孤独や精神的飢餓を借りもののメカニズムの中で解決しようとする、それは確かに快い、時としては充実感すら抱きつつ成されるのではあるが、暖かく柔らかな集団の中で新しい生命を得たと錯覚を起すのであり、何処までもお客様としての関わり方なのではあるまいか。

小さな宗教集団は、真剣な半面、一方では遊びの要素が含まれているのも特徴の一つである。共同・集団生活を重んじたり、超能力を楽しんだり。そして、最大の特徴は他力本願であり、現世利益を追求する所にあると言えよう。それが現在の小さな宗教の共通点ではないだろうか。

現代の小さな宗教ブームを離れて考えたとしても、人

はその人生の中で大きな罪を自覚すればする程、又持て余す程の苦を担わねばならなくなった時、又深い別離の傷やコントロール出来ない程の憎悪を捨て切れないう時、神と出会うのであろうか。受け入れられる、受け入れられないとして。

(2) 鎌倉時代について

ここで、太宰治と宮本輝二人の作家の宗教との関わりについて考えようと思う。二人の宗教に関する共通の時代である鎌倉時代について先ず考えてみる。

平安時代から鎌倉時代への移行は、大化の改新・明治維新と共に日本の三大政治変革と呼ばれているように大きな変化を示し、貴族社会から武士社会へと移っていく。その中で政治体制のみならず、社会制度や経済・文化に至るまで変化は著しい。宗教も又社会の流れの中で変革期を迎えるのであった。

奈良時代の国家仏教、平安初期の貴族仏教を経て、新たな展開を見せるのであるが、それは一〇五二年に仏教が衰え乱世になると予言され、末法の世に入っていくという人々の恐れと深い関係がある。この頃、中央政界は摂関政治が全盛期を迎え、極めて藤原北家の私的な政治が行われていたため、中央政界で立身出世の道を断たれた他の貴族や有力者達は地方でその勢力の拡大に奔走し

たのである。地方政治は大いに乱れ、互いに自らの権益を自衛すべく争い、そして武装化していったのである。各地で新秩序模索のための争いが繰り広げられ、百姓達は一層末法観を肌で感じるのであった。

この頃、法然や栄西は旧仏教を学ぶも飽き足らず、新しい仏の道を追求するのであった。

古代の秩序を打壊し、新秩序建設に乗出したのが源頼朝であり、武士の政権を樹立するのである。しかし、その源家も三代実朝で滅び、北条政権へとバトンタッチをし、承久の変を経て、やっと政権は安定に向かうのである。この一世紀以上もの不安定な中で、人々は仏教に救いを求めるのであった。その民衆のエネルギーは、かつて経験した事がない程大きいものであった。又、その要望や要求に応えたのが鎌倉仏教と言えよう。新仏教の激しい動きに対応して旧仏教も当初痛烈な新仏教への批判のみであったが、その後自らの襟を正す動きも顕著にみられた。この双方の動きは、相乗効果を示し、西洋より一足先に宗教の改革期を迎えたのであった。混沌の中からの救い、無秩序から新秩序へのうねり、それが鎌倉時代なのではないだろうか。

作家宮本輝も鎌倉時代について、次のように述べている。



「庶民の生活という点では、鎌倉時代というのは歴史的に見て、念仏が起こってきましたね。蒙古なんか押し寄せてきますでしょう。地震とか飢饉、疫病、ああいう時

代の中で諦観的にならざるを得ない、きょう一日生きたらそれでいいじゃないかみたいな時代の中で、無名の庶民は、やっぱり明日になにか夢見て生きたと思うんですね。……人間の骸骨が転がって、すぐ横に死のあるような世界で庶民がどうやって生きていったらろうという、ぼくにはたいへん魅力的な時代なんですわ」(宮本輝「小説のおもしろさ」)

宮本輝は、生死の狭間で直かつ生きていく力を秘めた庶民の原動力に共感しているのである。

今、ここに一つの図式が生まれつつある。激変・混沌、苦難・苦悩、そして遂には救い、安寧を求めていくのである。その過程は正に死と隣り合わせなのであり、傷付き、傷付け合ってでしか前へ進めないのである。地獄と極楽とが闊ぎ合っているような空恐しい図であり、人々はそんな中でも耐え、知恵を働かせ、擦り抜けていくのであった。

「くるしい時には、かならず実朝を思ひ出す様子であった。いのちあらば、あの実朝を書いてみたいと思つてゐた。私は生きのびて、ことし三十五になった。そろそろいい時分だ、なんて書くときだ気障な空漠たる美辞麗句みたいになつてつまらないが、実朝を書きたいといふのは、たしかに私の少年の頃からの念願であつたやうで、

その日頃の願ひが、いまどうやら叶ひさうになつて来たのだから、私もなかなか仕合せな男だ。」(太宰治「鉄面皮」と述べている。

何故、太宰が鎌倉期の実朝を苦しい時に思い出すのであろうか。苦しい時の神頼みではなく、実朝なのである。そして、念願の実朝でもあった。

とにかく、鎌倉期というのは新しい世であるゆえ矛盾も多く、不安定な要素を含んでいるのであり、人はその中で必死になつて生を追い求めるのである。力足りず消えていくか、運強く延命をはかり地平を切り拓くかはほんの僅かな差である。そんな点に言いかえれば、鎌倉の魅力が潜んでいると言えるのかも知れない。

(3) 太宰治と宗教

「おいてけぼり」その核心(書評93・94号)で触れたように、太宰は反「イエ」の立場を貫き、遂にはその「イエ」すら捨てようと必死で戦いに挑み、傷付き、そして狂気の世界をさ迷う事になつたのであった。そのような中で彼の生は、次の言葉に代表されていると言つてよい。

「死なうと思つてゐた。ことしの正月、よそから着物を一反もらつた。お年玉としてである。着物の布地は麻であつた。鼠色のこまかい縞目が織りこめられてゐた。

これは夏に着る着物であらう。夏まで生きてみようと思つた。」(太宰治「葉」)

彼が作家としてデビューした作品集「晩年」の一番最初の小説、それが「葉」であり、太宰治として世に送つた最初の言葉である。この頃、太宰の生はせいぜいこの言葉に示されている程度の執着心であり、このような二ヒリズムの上によくやく腰を掛け、遺書としての文学を書き始めるのであつた。

太宰治が悪戦苦闘の末狂気の世界をさ迷い、そして得た結論は「死にたい」というものであつた。いくら拭いても払っても払っても、又その結論に立ち戻るものであり、死に向かう生をただ生きるものであつた。

そんな時、太宰はキリスト教と出会うのである。

「自分の醜態を意識してつらい時には、聖書の他には、どんな書物も読めなくなりますね。そうして聖書の小さい活字の一つ一つだけが、それこそ宝石のようにきらきら光つて来るから不思議です。」(太宰治「風の便り」)

同じ頃、「私は、人のちからの佳い成果が見たくて、旅行以来一月間、私の持つてゐる本を、片っぱしから読み直した。法螺でない。どれもこれも、私に十頁とは読ませなかつた。私は、生まれてはじめて、祈る気持を體驗した。『いい読みものが在るやうに。いい読みものが

在るやうに。』いい読みものがなかつた。二、三の小説は、私を激怒させた。内村鑑三の随筆集だけは、一週間くらゐ私の枕もとから消えずにいた。……私はこの本にひきずり廻されたことを告白する。ひとつには、『トルストイの聖書』への反感も手伝つて、いよいよ、この内村鑑三の信仰の書にまゐつてしまった。いまの私には、虫のやうな沈黙があるだけだ。私は信仰の世界に一歩、足を踏みいれてゐるやうだ。」(太宰治「碧眼托鉢」)

一時的であるによせ、太宰は聖書によつて、又、内村鑑三の随筆集を読む事によつて救われる気分浸つていたのである。太宰は、イエスの中に旧体制・旧宗教に対する革命家としての人生、無理解と反発の中で十字架を背負わせられる悲劇を見たのであつた。そして、そのイエスの姿の中に自分の姿を見出そうとしたのかも知れない。しかし、アガペーを基本とする聖書の教えの中で「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」(ローマ人への手紙 第十三章九節)という聖句に太宰は躓くのである。

「キリストの己れを愛するが如く汝の隣人を愛せよ」という言葉を、私はきつと違つた解釈をしてゐるのではなからうか。あれはもつと別な意味があるのでなからうか。さう考へた時、己を嫌つて、或ひは己を虐げて人を



愛するのでは、自殺よりほかないのが当然だといふことを、かすかに気がついてきましたが、然しそれは理窟で、自分の世の中の人に対する感情はやはりいつもはにかみで、背の丈を二寸くらゐ低くして歩いておなければいけないやうな実感を持って生きてきました。」（太宰治「わが半生を語る」）

太宰はこの聖句の前で歩を止め、結局は信仰の世界には踏み込めないでいる。そして、キリスト教に対する彼の結論は、「自分は神にさえ、おびえておりました。神の愛は信ぜられず、神の罰だけを信じてゐるのでした。信仰。それは、ただ神の咎を受けるために、うなだれて審判の台に向ふ事のやうな気がしてゐるのでした。」（太宰治「人間失格」というものとなり、結局、彼を救うものではなかつたのである。彼にとって、イエスが一つの理想像であつたが、自分は決してその信徒になり切れない自己を見抜いていたのであつた。

暴君ディオオニスに「おまへらは、わしの心に勝つたのだ」と言わしめたメロスとセリヌンティウスの真の友情は、猜疑心や自己愛や誘惑に結局は勝ち得たのである。死ぬために走るといふ極限状態を乗り越え、幾多の迷いや妨害に打ち勝ち、メロスは走り抜くのである。死ぬために、そして友人を救うために。

しかし、太宰がもしメロスの立場に立たされたとしたら、果してどうであつたらうか。

自分がメロスなら走らねばならぬ、走りたいという気持は持つてはいるものの、走り抜けない自らの弱さを一生成じていたのではないだろうか。走るのが義であり、義を守るために自分の生活や家庭といった日常性を捨て

でも走るのだが、結局の所走り切れないのである。その二重の躓きが一生太宰を悩ませたのであり、生を生き抜かせなかったのかも知れない。義を感じる心と義を貫けない弱い自分の心、この二つの心をコントロール出来ず、苦悩の中で歩むしか術がなかったのである。

太宰にとつて、イエス同様、メロスも理想像となり、結局は同一化出来なかったのである。

イエスのように生きるのは無理、メロスのように生きたいがこれも又難しい。そして、最後の拠所が実朝であり、太宰は彼に近付いてみようと思うのであった。

昭和十一年は、太宰にとつて最も苦しい時期であった。それは、前年のパビナル中毒が一層高じたため、この年は肉体的にも精神的にもかなり極限の状態にあつたと考えられる。そして十月十三日から十一月十二日までの一カ月間入院するのであった。そして、その頃を回想しながら、翌年「HUMAN LOST」という作品を書いていくのだが、その十一月一日の所に次のような文がある。

「實朝をわすれず。

伊豆の海の白く立ち立つ浪がしら。

鹽の花ちる

うごくすすき。

蜜柑畑。」

人が最も苦しい時、自分の力では如何ともし難い時、やはり神を見るのである。これは、真実かも知れない。既存の神でなくとも、イエスや釈迦でなくとも、人は己を越えた力を思い描くのである。太宰にとつては、はっきり実朝が目の前に浮かんだのであり、実朝と同一化したいと願つたのであった。

実朝が七百年以上も前に詠んだ「大海の磯もどろろに寄する波われて碎けてさけて散るかも」（源実朝「金槐和歌集」）や「箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ」（同）といった情景が、きつと病床にあつた太宰の目にも浮かんだに違いない。伊豆の海では、波が岩に激しくぶつかり、割れて、砕けて、裂けて、散つて行く様子が手に取るように解るのである。

そして、その歌を実朝はどのような心境で詠んだのか。何れ自分も、あの波のように碎けて散つてゆかねばならない運命として、二重写しとなつていたのであるまいか。その実朝の苦悩を太宰は見守ろうとするのであった。

実朝は、父頼朝が亡くなつた時、まだ七歳の少年であつた。兄頼家が一二〇二年に二代將軍として就任するが、二十歳そこそこの青年では、武家の棟梁として初期の幕府を治めていくには少々荷が重すぎた。外祖父の北条と義父の比企との権力争いの中で結局敗れ、修禪寺に幽閉

されるのであった。そんな兄に変わって、十一歳で三代將軍の座に就いた実朝は、如何に不安が大きかったか想像出来よう。そして、遂に就任の翌年、兄頼家は修禪寺で北条によつて謀殺されるのであった。その後も重臣が次から次へと北条の手によつて討たれていく有様を見るにつけ、実朝も何日の日にか兄のように自分も討たれるのでは直感するのである。

死は誰しも避けて通れぬものではあるが、殺されるであらう事を予期して生きる事程苦しいものはない。そのような宿命を背負つて、実朝は生き続けなければならぬのである。しかし、不確かな生の中で精一杯生き抜いていかねばならず、その精神力たるや尋常のものではない。一見京風で、公家好みの弱々しそうな実朝が、お坊ちやま育ちであるにも拘らず、内に秘めた強い精神力を隠し持っているのである。

「將軍家の御胸中はいつも初夏の青空の如く爽やかに晴れ渡り、人を憎むとか、怨むとか、怒るとかいふ事はどんなものだから、全くと存じないような御様子で右は右、左は左と、無理なくお裁きになり、なんのこだわる所もなく皆を愛しなされて、しかも深く執着するといふわけでもなく水の流れるやうにさらさらと自然に御挙止なさつて居られたのでございますから……」(太宰治「右大



臣実朝)

「あのお方のお環境から推測して、厭世だの自暴自棄だの或ひは深い諦観だのしたり顔して嘸いてゐたひともございましたが、私の眼には、あのお方はいつもゆったりして居られて、のんきそうに見えました。大声をあげてお笑ひになる事もございました。その環境から推して、さぞお苦しいだろうと同情しても、その御当人は案外あかるい気持で生きてゐるのを見て驚く事はこの世にまゝある例だと思ひます。」(同)

このような実朝の生き方の中に、太宰はイエスやメロスの中に見たものと同種のことを垣間見るのである。絶望のどん底にあつても、死のためにただ走る人生であっても、罪人のために十字架にかかると解つていても、迷いつつもその道を歩み、微笑みて正義を成すのであつた。

しかし、そんな実朝にも一度、メロスが走るのを止めようと迷つたように、陳和卿の進めにより、死の数年前に渡宋計画を立てるのであつた。このような苦しい人生から、逃れるものなら逃れてみたいと思つたのであろうか。由比ヶ浜で大船を建造するも進水すら出来ず、結局、目の前で夢が朽ちて行くのを眺めなくてはならなくなるのであつた。実朝の退路は完全に断られたのである。ただ死ぬために生きる人生を、如何に明るく生きていけ

るか、それが問題であつた。

偽善者の如く苦しそうな表情を見せず、微笑みて義を成し、しかし、その明るさは又滅びの証であるという事を、深く自覚しての生の営みなのである。京を好み、自らの官職の栄進と和歌の腕前の進歩を頼みとして、ひたすら生きる実朝の姿の中に、魅かれるものを太宰は見たのである。極限の中で、直かつ生きる勇氣。投げ遣りでも諦めでもなく、初夏の青空のように澄み渡り、自然のままに生きていく生き様に共感しているのである。太宰にとつて、このような生を喉から手が出る程欲しているのに、与えられないのである。結局、歩めないのである。「くるしい時には、かならず実朝を思ひ出す様であつた。いのちあらば、あの実朝を書いてみたいと思つてゐた。」(太宰治「鉄面皮」)

(しばた けいじ・本学経済学部卒業生)

「書評」編集スタッフ
募集



ここには新しい可能性が
潜んでいる。

興味をお持ちになった方は
生協3F組織部まで!!

TEL (06)387-9998 (直通)

連

載

大阪市立朝鮮人中学校の発足

——在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート

XIII

梁 永厚

近代ナショナルリズムの教育には、国民教育または民族教育といった訳柄がある。前者は近代の国民国家の成立とともに発した教育で、およそのところ教育権の所在を国家におくか、国民におくかによつて、国家が組織し統制をする国民への普通教育、あるいは国民の国民による国民のための基礎教育といった意味合いで論じられる。後者は被抑圧民族が独立と解放をめざして進める教育、ならびに独立を獲得した民族が主体的立場に立つて行う教育とされている。なお国民教育と民族教育の中では基本的に母国語の教育が重視される。

戦後、在日朝鮮人が自主的に始めた教育の初期十年程

は、解放民族としての主体的な立場から同胞の子女に母国語と民族意識の教育を施そうとした、いわゆる民族教育であつたといえる。その在日朝鮮人教育は、戦後世界の冷戦構造の力学によつて、一九四九年十一月に学校の一斉閉鎖といつた暴圧を蒙つた。だが在日朝鮮人総体の民族教育熱は萎えることなく、日本当局の強権に抗しながら、学校の再建と学校閉鎖後に日本の学校へ転入学していった子女を民族学校へと戻す、「児童奪還」(当時の運動用語)運動を進めた。その一環である大阪における市立朝鮮人中学校設立に至る状況を紹介しよう。

前回触れたように、東京都では朝鮮人学校の閉鎖によ

り、日本の公教育機関へ多数の朝鮮人子女が転入学すると、学校現場の混乱を招くといった当局側の配慮から、在来の朝鮮人学校（十三校）を都立の朝鮮人小・中・高等学校に切替える妥協的な措置で、学校閉鎖という最悪の事態を避けた。ところが大阪においては、日本共産党関西地方委員会の民族対策部（朝鮮人運動指導部）が、「日本の学校の民主化のために、朝鮮の子どもを日本の学校へ入学させて活動させよ。」という指示を下したことに因み、学校閉鎖を受け入れ、日本人学校への分散転入学を図った。したがって四十余校もあった朝鮮人連盟系の学校のなかでは、小規模校の泉北小学校と港小学校が授業を続けたのみで、布施小学校は朝連の財産であると当局に接収され、他の学校は閉鎖のまま放置された。

一方、合法的に授業を続けたのは、一九四八年四月の阪神教育事件の過程で、中立を標榜し学校認可を取得した学校法人白頭学院の建国小・中・高等学校だけであった。韓国系の人たちが経営権を握った西成小学校は、一九五〇年四月一日より学校法人金剛学園・金剛小学校として、新しく出発した。

このように朝鮮人学校閉鎖措置後、在日朝鮮人の民族教育機関は政治的な色分けを明らかにしながら再建されていった。そして旧朝連系で再建された学校は、一九五

五年の在日朝鮮人総連合会（朝鮮総連）の結成後、朝鮮総連の指導下におかれ、それまでの民族教育的な性格から、朝鮮民主主義人民共和国の人民教育（国民教育）的性格を帯びるようになった。いわば、在日朝鮮人の教育機関は三様に分立し、ときには対立拮抗をみせるのである。



さて四十余校あった大阪府下の朝鮮人学校から、日本の学校へ転入学した子女たちは、日本共産党民族対策部の指示とは裏腹に、同化教育に吸いこまれていくか、日本の学校になじまず、多数が登校拒否または転入学を拒否していた（一九五〇年一月十五日現在の大阪市教育委員会調査によると、学校閉鎖後に公立学校へ転入学した朝鮮人子女数は、小学校四〇六〇名、中学校五六〇名。収容予定数即ち転入学拒否数、小学校一七三〇名、中学校一四〇〇名とある）。

公立学校へ転入学した朝鮮人子女にたいする大阪市教育局委員会の施策は、民族的な考慮は何んらなく、「同化教育」を図る以外の何ものでもなかった。たとえば、「昭和二十四年度、教育費追加予算の件」を審議した、一九五〇年一月十一日の大阪市議会文教委員会では、朝鮮人児童・生徒問題について、次のような質疑応答がなされている。

横山委員 朝鮮人児童収容に当って差し当り何を実施しているか。

市教委野口 特別に今実施していない。府支出金一五庶務課長 〇万円に、市費二五〇万円を加え、これを特にこの方面に充てる予定である。

南委員 貧困児童の給与支給は結構であるが、民

生事業の方の要援護も朝鮮人に対し枠を縮小してきているのと矛盾するのではないか。

野口課長

民生関係はよく承知していないが、就学奨励に力を注ぎたい。朝鮮人の貧困率が高いと考え、一応率を出したが、実施に当っては民生局とよく相談したい。

坂井委員

朝鮮人児童の多い学校には、先生が行きながら、これを如何に処置するか。

板東教育長

これらの学校の先生には、いろいろ特殊な激務を与えているので、何んらかの名目で、一五〇〇円、放課後の日本語教育に対しては、一時間一〇〇円程度支給したい（傍線筆者）と考えている。先日これらの学校を巡視した。校長が熱意ある訓導を新規採用したいとの要望が強かった。たので新規採用者を送る予定である。

このように、大阪市教育委員会は朝鮮人貧困家庭の児童・生徒に、民生事業的な面から経済的扶助を与えることとで、就学をさせようとする「あめ」と、民族の「ことば」を早く奪い「同化教育」の成果をあげるべく、課外に日本語教育を行う方策を講じていたのである。



一方、学校閉鎖措置を受けるまで民族教育を担っていた教育関係者の中では、登校しない児童・生徒対策が論じられ、とりあえず公立の朝鮮人小・中学校の設立を要望することになった。それは大阪市教育委員会の施策からすると、東京都のような公立の朝鮮人学校を設置させるなどは、きわめて困難なことであった。さらに対内的には、活動家のなかに日本共産党民族対策部の指示への

こだわりがあり、同胞父母のなかに「学校を再建しても、また弾圧をうけるのではないか」といった不安があつて、おいそれとはいかなかった。しかし、要望をはじめた教育関係者は、同胞内部でのコンセンサスをとりながら打開をめざした。このとりくみの中心となつたのは、旧大阪朝鮮中学校^{*}の理事と教員の一部であつた。

※ 大阪朝鮮中学校は、一九四六年四月十日、大阪市生野区東桃谷にあつた旧隣保館を校舎とし、生野ウリ

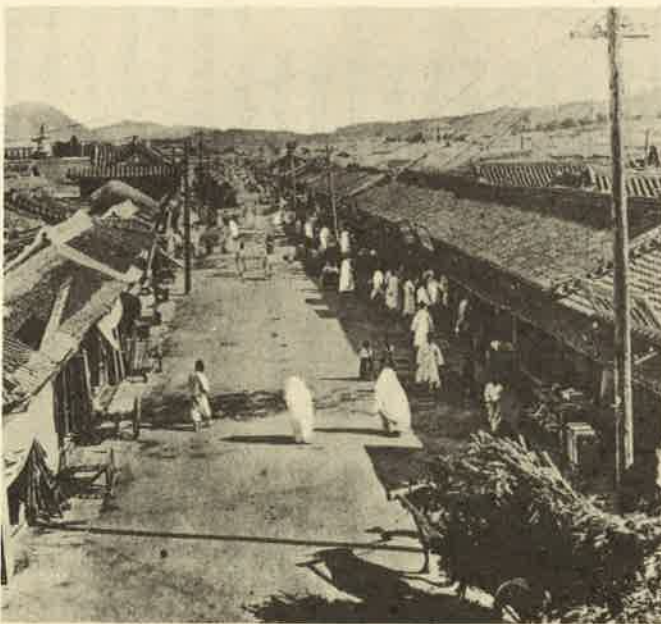
(朝鮮語のわれわれの意) 中学学院として発足。同年六月十日、校舎を同区北生野町にある市有の簡易校舎に移して、大阪朝鮮中学校と改称、校長宋文著、教員十名、生徒数二二〇名。一九四八年四月の学校閉鎖令(四・二四教育事件)後、市へ校舎を返還し、生野区鶴橋南之町にあつた鶴橋朝鮮小学校にて、午後のみの授業を行う。同年六月、八尾市萱振にあつた旧私立双葉高等女学校の校舎を借りて移転。一九四九年四月、大阪朝鮮高等学校と附属小学校を併設、教員数三八名となり、生徒数、高校二五名、中学校八二〇名、小学校四六名。一九四九年十一月、日本当局の学校閉鎖措置を受く。

公立の朝鮮人小・中学校の設置をめざした教育関係者

たちは、一九四九年十二月初より、連日、大阪市教育委員会への要望に出向いた。この要望に市教委が向き合うようになるのは、教育現場や日本人父母の声に押さされてのことで、東京都の場合と同じような発想からであった。

つまり大阪市教育委員会は、市内の生野区、東成区、城東区など、在日朝鮮人多住地域の日本人父母、教員のなかから「現場の混乱」に因む、朝鮮人児童・生徒の分離教育の要望が繰り返されていたので、それへの対応もあつて、同床異夢的であつたが、朝鮮人側の要望に向き合うようになつた。そして話し合ひは進展し、一九五〇年三月初に市教育委員会は公立朝鮮人学校を設置するについで、旧東成朝鮮学校の校舎の提供を朝鮮人側に求めた。朝鮮人側は市教育委員会の求めに応じ、校舎の提供を承諾した。市教育委員会は同年三月十八日の市議会文教委員会閉会後に、文教委員協議会の開催を要請し、市立朝鮮人学校設立問題を提起した。同協議会の内容は、大阪市の議事事務局調査課の『大阪市会旬報』、昭和二十五年三月下旬号に、次のように収録されている。

十八日、委員会解散後、板東教育長は朝鮮人児童の就学奨励の意味で、朝鮮人ばかりを収容する小・中学校一ヶ所を設け、六・三制教育の外に適当な職業教育をほどこしたいと考えているが、委員各位の



御意見をうけたまわりたいとのべた。これにたいし各委員より、これの可否についてはげしい議論が交わされたが、問題が重大なため、あらためて審議を行うことにし、午後六時閉会した。

この協議会以後、市教育委員会は市立朝鮮人学校設立問題を市議会の文教委員会に諮ることなく、四月一日付けで朝鮮人小・中学校ではなく、朝鮮人生徒に対する職業教育を施す中学校の開校お決断し、校名を市立西今里中学校と定め、当時市内の中学校の中で職業教育の成果をあげていた市立三陵中学校々長川村市兵衛氏を校長として転任させ、新設校を発足させたのである。ところが大阪市教育委員会の措置を大阪府教育委員会は承認をしなかつたので、開校はずれこみ七月一日付けで隣接する市立本庄中学校西今里分校として開校をみることになった。したがって、この学校は大阪市教育委員会では独立校として扱ったが、府教委員委員会ではずうつと分校として処遇された。

この間の事情について、大阪市教育委員会の記録には、貧困家庭の中学校生徒の多い東成区、城東区、生野区の本市東部地域に職業指導と課外指導を重点とした学校を設け、教育の機会均等をはかる必要があつたので、大阪市立西今里中学校の設置を計画したが、法律上朝鮮人生徒のみの学校は認められないとの意見により、改めて昭和二十五年七月一日より、大阪市立本庄中学校西今里分校として開校することになった。

とある。

そして校長のほか、日本人教師五名、朝鮮人教師三名、事務員・校務員各一名が配され、開校式は朝鮮戦争が始まって五日後という在日朝鮮人にとっては緊迫した空気の中で行われた。開校式の場合については「毎日新聞」(大阪版)、一九五〇年七月二日号に、「戦乱の祖国を建て直そう。本庄中学校で朝鮮人学童の始業式」という見出しで、「この日やつと自分たちの学校ができた朝鮮人生徒一八〇名(一年八七、二年六四、三年二九)が、うれしそうな顔を揃えて初の登校、川村校長は『いま朝鮮は名前ばかりの独立国で不幸な目にあっていますが、こうして勉強の機会を与えられた皆さんの力で、やがて立派な内容のある独立国にして下さい。そして皆さんは善良な在日居留民として、日朝融和のくさびとなつて下さい』と訓辞、戦乱の祖国の安否を気づかう生徒たちの小さな胸に深い感銘が漂っていた」と報じられている。

この市立西今里中学校いわば公立の朝鮮人中学校の創設後は、大阪における朝鮮人教育の小・中・高校の学校体系を整えるべく、自主学校の再建とその公立化運動、高等学校の開校などが、旧朝連系をひきついで組織・在日朝鮮統一民主戦線によって進められていったのである。

連

載

小説のなかの異境

—— ロマン主義文学論序説 ——

その一三

池田浩士

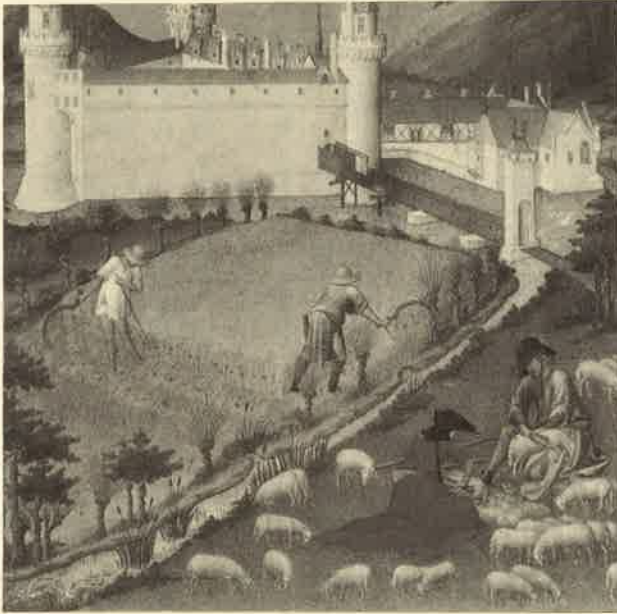
III 未成の共和国 —— 外なる共同体のために（その四）

四、夢のふたつの顔

1. 巨人の玩具

エルザス地方のとある高い山の山腹にかかった滝のほとりに立つニーデックの城では、その昔、騎士の一族は大きな巨人だった。あるとき、巨人の姫が谷へ降りていって、下界はどんな具合か見たいと思ひ、ハスラウのす

ぐ近くの森の手前にある畑のところまでやってきた。畑はちょうど百姓たちが耕しているところだった。姫は不思議そうに立ちつくしたまま、鋤や馬や人間たちをまじまじと眺めた。どれもこれも目新しいものばかりだったからだ。「よし」とかの女は言つて、そちらへ近づいていった。「これを持って帰つてやりましょう。」それから地面にひざまづき、前掛けをひろげて、手で畑のうえをさつとひとなですると、なにもかもいっしょに生け捕りにして包んでしまった。さてこうして姫はすっかりご満悦で、切りたつた岩をびよんびよん跳び上がりながら家路を急いだ。人間ならさんざん苦勞してよじのぼらなけ



ればならないほど山が急なところでも、ほんの一足で、
たちまち上に着いていた。

——グリム兄弟が収録したドイツの昔話のなかの一
篇は、エルザス地方、つまり現在のフランス領アルサス
を舞台にして、このように語られる。谷間の人間の村を

見下ろす山のうえに、巨人族が住んでいる。山はけわし
く、めったなことでは人間には登れない。けわしいから
だけではなく、巨人族の棲みかとして恐れられてもいる
ので、この山に足を踏み入れる人間は、いなかっただら
ろう。巨人のほうでは、山のけわしさは本質的な障害で
はない。にもかかわらず、みだりに山を降りて谷の人間
界を訪れることなどなかつたらしい様子は、巨人の姫が
馬や人間や農具を生まれてはじめて見たらしいことから、
容易にうかがえる。たがいにとつての異境は、侵おされる
ことなく維持されている。ただときたま、無知ゆえにか、
偶然の事故によつてか、この暗黙の不可侵性が一方によ
つて破られる。民俗学にとつて貴重なテーマのひとつで
ある「異人」伝説は、このことを物語つてもいいのだら
う。日本のコブ取り伝説が、異境にさまよいこんで鬼と
出会う人間を描いているとすれば、ドイツとフランスの
国境地帯に位置するエルザス^{II}アルサス地方の民話「巨
人の玩具」は、人間の世界にさまよいこんだ異人の物語
である。

十八世紀末から十九世紀初頭にかけて文化の諸領域で
ロマン主義思潮をひとつの極致にまで推しすすめたドイ
ツ・ロマン派の、もつとも大きな特質のひとつは、それ
まではおよそ文化とは目されなかつた民衆生活のなかの

自己表現を、新しい文学や芸術の、さらには哲学や諸科学の糧として摂取したことだった。民謡のリズムやメロディーが新しい音楽に再生したばかりでなく、詩や小説の主人公たちとしても、特権をもたない庶民が新たな生命を与えられた。主人公が騎士、つまり特権の貴族階級である場合でさえ、物語は、『ウンディーネ』や『ウィリアム・ロヴェル』がまさしくそうであるように、貧しい農民や漁民との出会いを軸にして展開されることが少なくない。そのさい、貧しい庶民や抑圧された性の側が自然を代表していることも、それ自体きわめて重要な点だろう。こうした特質と、新しい科学領域である民俗学がロマン派によって切り開かれたこととは無関係ではない。王侯貴族や教会の権力者たちの生活形式や文化形式にかわって、無視され抑圧され隠蔽されてきた民衆の日常が、言葉を発しはじめたのである。ドイツ・ロマン派から一世紀を経て、二十世紀初頭のロシアで、フォルマリストと呼ばれるグループによって、ふたたびきわめて自覚的に、民俗学的関心と新しい文化表現の可能性の模索とが結合されることになるのだが、この歴史的事実は、ドイツ・ロマン派にとってもロシア・フォルマリズムにとっても、自己発見と相互発見のための手がかりであるにちがいない。そしてこの手がかりは、文化表現の新しい

さをめざす試行と、既存の支配的現実への拒否、さらには新しい現実の主体としての自己表現を求める革命的希求との、まだ充分には明らかにされていない連関をさぐるうえで、不可欠の手がかりとなるだろう。ヤーコプとヴィルヘルムのグリム兄弟も、かれらの共同の民話蒐集によって、たとえばロマン・ヤコブソンやヴィクトル・シクロフスキー、さらにはミハイル・バフチンにまでいたるロシア・アヴァンギャルドたちの民俗学的な探究に通じる道を、一世紀前にたどっていたのである。

谷間の人間界へ降りていった巨人の姫の物語を、グリム兄弟はさらにつきのようにつづけている——

姫が城にもどったとき、騎士はちやうど食卓についているところだった。「おや、おまえ」と騎士は言った。「何を持ってきたんだね？ うれしくってしかたがない

って、おまえの目が言っているよ。」姫はすばやく前掛けを開けて、騎士になかをのぞかせた。「いったいおまえは、なんでまたこんなビョコビョコ動くものをそんなところに入れているんだ？」「だってお父さま、とつてもめずらしい玩具おもちゃなんですもの！ こんなすてきなもの、生まれてからまだ一度も持ったことなかったわ。」こう言ううと姫はひとつまたひとつと外へ取り出して、テーブルのうえに並べた。鋤、百姓たち、そしてそれが連れて

いる馬たちも。そして、まわりを走りまわっては、まじまじと眺め、小さな生きものがそのうえをあちこち動くありさまに、笑い声をあげたり、喜びのあまり手を打ちならしたりするのだった。父は、しかしこう言った、「おまえ、これは玩具ではないよ。おまえは大変なことをしてかしてしまったのだ！ さあすぐに行つて谷へもどしてきなさい。」姫は泣いたけれど、何の甲斐もなかった。「わたしにとって百姓は玩具ではないのだ」と騎士はきびしい顔で言った、「ふくれつつらをするのは、ゆるさん。なにもかもそつともとのおり包んで、取つてきたのと同じ場所へ置いてきなさい。百姓が畑を耕さなかつたら、わたしたち巨人はこの岩城で生きていくことができないのだ。」

物語はここで終わっている。巨人親子のこのやりとりから推測すれば、山の岩城に住む巨人族と谷間の人間たちとは、ただ単に居住領域を別にするだけの関係ではなかつたようだ。谷間で耕地をたがやす百姓たちから見るとき、思いがけず現われた巨人の姫は、隔絶した異境から不意に訪れた異人であるばかりではない。住む場所と身体の大きさの差によつて象徴される圧倒的な力の優位を相手はもっている。人間を玩具にすることも、それどころか生かすも殺すも、相手の意のままである。その

うえ、父親の口から述べられているように、どうやら山上の巨人族は、谷間の人間たちの労働の成果によつて生きてゐるらしいのだ。人間の農民たちは、労働によつて巨人族を養いながら、それでいて巨人族にたいしては、年端も行かぬ姫も含めて、手も足も出ない。農民たちがふたたび無事に谷間の村へもどることができたとすれば（そして、そうなつただろうことは父巨人の毅然たる態度から想像できるのだが）、それは巨人側の意志によるものであつて、人間の側の主体的な意志によつてではない。ここでは、解放と自由そのものが、農民たち自身といったいの意図と行為を超越したところにしか存在していない。解放も自由も、圧倒的な力をもつものの善意や慈悲や思いやりによつてのみ、たまたま与えられるものにすぎないのだ。

だが、問題は、このような恩寵にすぎない自由と解放を、いったいだれが、説話として語りはじめ、語り継いできたのか、ということにある。この説話の創作者や語り手は、恩寵を垂れる側の巨人たちなのだろうか？ あるいはそうであるかもしれない。少なくとも、巨人たちが最初の創作者だったかもしれない。しかし、グリム兄弟は、巨人の玩具のこの説話を、王侯貴族や教会権力者たちの生活のなかから蒐集したのではなかつた。この説

話は、アルサス（エルザス）地方の農民たちの暮らしのなかで語りつがれてきていたのである。この説話の教訓は、支配者である巨人たちの自己にたいするいましめや自己美化ではなく、巨人族の恣意によって翻弄される農民たちが描いた恩寵と幸運へのはかない夢だったのだ。だが、恩寵や幸運は、みずからの意志や苦闘の余地とはかわりがないという点で、じつは希望によりは絶望のほうにいつそう近い。

巨人の玩具の説話は、絶望が夢のかたちをとるさいの姿のひとつを、語り伝えてもいるのである。

2. お伽噺と説話とのあいだ

よく知られているとおり、グリム兄弟が蒐集した昔話ないしは民話には、「巨人の玩具」とはまったく別の特徴をそなえたものが少なくない。それらのなかでは、いちばん弱い末っ子もつとも大きな幸福を手に入れ、いじめぬかれてきた継子が邪悪な継母を出し抜き、貧しくしがたない農民や職人や「女子供」が悪魔や領主のたくらみを逆手にとつて、富や幸福をつかむのである。

たしかに、これらのなかでも、幸福はしばしば権力者の側の良心なり改心なりと無関係ではないし、そもそも幸福とされるもの自体が、王子との結婚や貴族の仲間入

りなど、特権階級の一員へと出世していくことにすぎない場合も多い。しかし、巨人の玩具にされかかった百姓たちが無事に生きて帰るにあたっては、百姓たち自身の努力も策略も、あるいは善行さえも何ひとつ役割を果たしていないのとは逆に、たとえば灰がぶりが幸福を手に入れるのは、平素のかの女が受けているひどい仕打ちと、それに耐えるけなげさと、仲良くしている小鳩たちや樹



木の協力とによつてなのだ。あるいはまた、使いつぶされたすえに殺されようとした驢馬と犬と猫と鶏は、みずからの意志で人間たちの手からのがれ、力をよせあつて自活することをめざし、奇計によつて悪者たちをこらしめたすえ、新しい共同生活を実現する。

民話のなかにある異なつたふたつのタイプに着目し、「巨人の玩具」のような説話と、たとえば「ブレイメンの町の音楽師」や「親指太郎」や「灰かぶり」のようなお伽噺とのあいだにある根本的な違いを強調したのは、ユダヤ系のマルクス主義思想家、エルンスト・ブロッホ（一八八五—一九七六）だった。ナチス支配から逃れてスイスに亡命生活を送るなかでまとめられた『この時代の遺産』（一九三五）の一節で、ブロッホはつぎのように述べている——

「だが、メールヒエンは通俗読物のなかに照明を送りつつ叛逆を表わし、説話は神話から発祥しつつ、忍従された運命を表わす。メールヒエンのなかには小さきものたちの暴動があり、呪縛の解明がなされるよりずっと以前にメールヒエンがその解明を念じているとすれば、説話は変更不可能なものについて静かに報告するのだ。ここでは、人間たちが自分の身に起こることを甘受し、服従する。最良の場合でも、それにたいして（報い）られ

るのが関の山である。（……）哀れなものたちが救われる場合でさえ、説話のなかでは自分自身の策略なり発見された脱出口の合理性なりが効果を發揮するのではなく、代々の主君が上から祝福を垂れ、救済された騎士たちを信じられないほど美しい女性像の腕にだかせて報いるのだ。つねに叛逆的なメールヒエンとの差異を示しつつ説話がつくり出すこのような主君の平和、主君の効用によつて教訓的なのは、巨人の玩具についてのエルザス地方の説話である。」

「巨人の玩具」をはじめとする説話と、「灰かぶり」や「ブレイメンの町の音楽師」のようなメールヒエンとの根本的な差異は、ブロッホも指摘するように、歴然としている。「巨人の玩具」では、谷間の人間たちは自分たちの運命を巨人族の手中に握られたまま、無為と忍従に生きている。結末は悲劇的ではないし、悲劇的であつてはならないが、しかしそれはつまるところ旧状の回復であり、主君の慈愛と力の再確認であり、支配秩序の維持と合理化である。現在の秩序に波風を立てて人間たちを脅かすのは、巨人族として失格なのだ。もとの谷間に無事でもどることが、人間にとつて幸運なのだ。それとは逆に「ブレイメンの町の音楽師」たちのばあいには、まずそれぞれの飼い主の家を逃げ出すところから、終始一

貫して自分たち自身の決断と実行によってしか、生きる
方途は開けてこない。無力さを補うものは、策略と共闘
だけである。旧状への復帰はありえず、主人たちの恩寵
は夢にも期待できない。これと比べれば主体的な能動性
に乏しいかに見える。「灰かぶり」の場合でさえ、物語を
詳細に読めば、策略と共闘の決定的な意義が、誤解の余
地なく浮かびあがってくる。継母が灰のなかに混ぜた豆
を拾い出すのに力を貸してくれる小鳩たち。やさしかつ
た実母の墓に植えた樹が果たす重要な役割。そして、あ
とを追ってくる王子に素性を知られまいとするとともに
また灰かぶりが何度もめぐらす策略。現状の打開と新し
い生きかたの獲得は、メルヒエンのなかでは、あまり
にも力弱いものたちが捨て身で試みるこのような行為に
よって、可能となるのである。そしてそれが可能となる
うえで、力弱いものたちがたがいにつむぎだしてきてい
る共感と協力の小さな関係が、決定的に重要な役割を演
じるのである。

グリム兄弟が集めたメルヒエンは、最初の二巻が刊
行された一八一五年から、兄弟の生前に刊行された一八
五七年の最終版までに、計二〇〇話にのぼっている。他
方、一八〇八年以後に蒐集にとりかかった説話は、一八
一六年から一八八八年にかけて全二巻で刊行され、計五八五

話が収録された。個々の物語の長さは概して説話のほう
が圧倒的に短い。数のうえで説話がメルヒエンを
はるかに上まわっている。このことだけから、民衆のな
かで語り伝えられてきたのは現状容認と忍従の教訓が主
だった、と結論づけることはもちろんできない。むしろ、
いかに少数であるにせよ、現状打開と別の現実への能動
的な夢がメルヒエンのかたちで生きつづけてきたこと
に、目を向けざるをえない。——しかし、ここで重要
なのはそのことではない。絶望が結ぶ夢の異なるふたつ
のありかたが、説話とメルヒエンという民話のふたつ
のタイプのなかに、如実に姿をあらわしているというこ
と。しかも、これらふたつの姿は、それぞれまったく別
の民衆の、それぞれまったく別の絶望を体現しているわ
けではないということ、これが問題なのである。

3. 恩寵ではなく解放をこそ

谷間の人間たちにとって、山の上の岩城から降りてき
た巨人族の姫は、異界から不意に侵入してきた予期せぬ
厄難だった。これの対極に、たとえばすでに述べた
赤髯王フリードリヒ一世の伝説がある。中部ドイツ、テ
ューリングゲンのキュフホイザー山中に眠っている赤髯王
が、ドイツの危機にさいして目ざめ、救いに立ち上がる、

という伝説は、いわば、長いあいだ待ち望まれている救済者としての、異界からの来訪者である。

厄難としての異人にせよ、救い主としての巨人にせよ、これら異界からの来訪者には、この現実には生きるわれわれの絶望が投影されている。ひとつには、せめて恵み深い支配者の下で生きたいという希望として。もうひとつには、この窮状を一気に打破してくれる英雄にたいする希望として。説話には、このような希いと希望をいさぐことで絶望を生きたびてきたわれわれの先人たちの思いが塗りこめられているのだ。

この思いの現代的な表現は、さまざまSF作品のなかにも再発見することができる。SF文学作品の基本的なモチーフは、空間的にも時間的にもこの日常の現実から超脱していくことにあるのだが、この超脱はしばしば、異星人をはじめとする異世界の存在との出会い、というかたちでなされる場合が多い。しかも、そうした異星人の少なからぬものは、地球人類の想像を絶する超能力の持ち主なのだ。その典型的な例を、たとえばアーサー・C・クラークの『幼年期の終わり』（一九五三）やロバート・A・ハインラインの『異星の客』（一九六一）など、いまでは古典となっているSF小説に見ることができる。

人類が宇宙の彼方の星々に到達しようとするときになっているあいだに、一隻の巨大な宇宙船がニューヨーク上空へやってきた。地球上の諸都市の上空にも、それらはやってきた。宇宙船の長は、「地球総督」カレルンという宇宙人だった。人類の文明を遙かに超える水準の絶大な力によって、カレルンは地球上のあらゆる紛争を一掃し、ついに世界連邦を実現させるに至った。じつは実際にやってきた宇宙船はニューヨーク上空のもの一艘にすぎず、他はすべて幻影だったのだが、地球人たちはいつしか、カレルンを代表とするこの宇宙人たちを「上帝」と呼ぶことに慣れ、オーバードたちによつてもたらされた平和と安寧と繁栄を心から喜ぶようになった。ただひとつ、どうしてもわからないことがあった。カレルンその他のオーバードたちが、一度もその姿を地球人のまえに現わさないことである。この謎がようやく解けるまでに、五十年の歳月が過ぎた。もはやどんな地球人もオーバードの善意を疑わず、オーバードによって実現した理想世界を否定するものがないなくなったとき、ついにカレルンは姿を見せることになった。ブラウン管のまえに釘づけになった全地球人のまえに現われたのは、「皮に似た強靱な翼、短い角、さかどげのある尻尾」、「ありとあらゆる伝説に巢食うも



つとも恐ろしい存在」、つまり伝説にある悪魔の姿だったのだ。オーバーロードたちは、じつはもう何千年も昔から、地球人類の歴史のなかに姿をのぞかせてきていたのである。「幼年期の終わり」は、地球人類にとつての救世主に悪魔の姿を与えたという点で、凡百のいわゆる逆ユートピア小説（未来のユートピアが実現されたとき、それは理想郷としてのユートピアとはまさに裏返しのお

ぞましい現実だった、という物語）をもさらに転倒させたユニークな作品といふべきだろう。しかしそれにもかかわらず、ここにもまた、みずからの意志と試行と共闘とは何のかかわりもない救済、超越的な支配者の恩寵によつて与えられる幸運という、あの説話のモチーフが生きている。「幼年期の終わり」では、この恩寵がさらに重層構造をもつたものとして描かれるのである。人類が長年にわたつて救い主と見なしてきた「上^{オーバーロード}帝」は、じつは救い主そのひとではなく、さらに上位の意志である「上^{オーバーアインド}霊」の奉仕者でしかなかったのだ。地球人類の幸福は（そしてこれは破滅のための単なる準備段階でしかなかったのだが）、二重の絶対的意志によつて操作されていたのだ。これらの意志の下では、人間のあらゆる意志も行為も、なにひとつ実質的な意味をもたない。地球人類の全歴史のなかでなされた試行錯誤や主体的な企図は、すべて、これら上方の意志によつて管理され統御されていたのである。「異星の客」では、地球へやってきた火星人、ヴァレンタイン・マイケル・スミスの善良さが、地球人の世界にさまざまな波紋を生み出していく。スミス青年自身は超越的な救い主そのものではないが、超能力をそなたかれを媒介にして、救い主と救済されるものという関係が、一種の新興宗教のかたち

をとって地球人のなかに形成されていく。

息苦しく貧しいこの日常の現実からの超脱は、想像を絶するような巨大なエネルギーと能力によつてしか果たされることがない。日常の現実の貧しさで息苦しさを明確に意識しているにせよ、あるいは貧しさや息苦しさを感ずることさえできないくらいまでにその日常的現実深くからめとられているにせよ、いま眼前にあるこの現実とは別のもうひとつの現実へと脱出することの困難さは、だれしも知っており、あるいは感じとっている。

超能力者によつてしか、あるいは宗教によつてしか、脱出の道は示されることがないほどだ。「巨人の玩具」の父騎士の善意と分別は、出口のない現実にとらわれているものがせめて希いなる現実的な救いへの方途であり、キュフホイザー山中に眠る赤髯王の再来を夢みることは、邪悪な権力をほしのままにする支配者たちの下で生きるものたちが、最後に留保した権利でもある。

——けれども、意識された絶望にせよ、あるいは意識されず感じられもしないだけにいつそう深い絶望にせよ、絶望が夢みる夢は、説話のなかに描かれているような種類のものだけでは決してないのだ。メールヒエンのなかに描かれている夢——踏みつけにされ、いじめぬかれ、さげすまれる灰かぶりたちや、使い捨てられて殺

されようとする驢馬たちや犬たちや鶏たちや猫たちの夢——共感と連携と共働と共闘に支えられた小さな智慧と策略によつてのみ、夢から現実への小さく細い通路をまさぐっていくことができるような、そういう夢もまた、絶望のなかからは生まれうるのだ。

だが、この灰かぶりたちやブレイメンの音楽師たちの夢をみずからの夢として描くためには、上からの恩寵としてやってくる救いを待つということ自体にたいする、さめた絶望がなければならぬだろう。救いを待つことへの絶望が、灰かぶりたちやブレイメンの音楽師たちを、決断と敢行へと、救いの最後の希望へと、つきうごかす。ロマン主義の夢は、メールヒエンをみずからのうちに包摂することによつて、無力なものたちの絶望を、希望へと解放する手がかりをつかんだのである。希望とは、しかし、待つことではない。谷間に生きる百姓たちが、巨人族を相手にまわして希望を抱くことができるためには、奇想天外な策略を創意工夫しなければならぬ。そしてこのような策略は、灰かぶりやブレイメンの町の音楽師のメールヒエンが物語っているとおり、絶望のなかにうちすてられたものたちの小さな共同性を、不可欠のものにするのである。

連

載

《研究余滴》 象徴主義 6

第2章 象徴主義の先駆者たち

Ⅲ アルチュール・ランボー (1854～91)

山村嘉己



(レジエ筆)

1

象徴派の根本を貫く《反俗》の姿勢は、たとえばヴェルレーヌの場合に典型的に見られるように、かなり意識的な努力によって自らの上に引き寄せたものであった。

それはたしかに《擬態》であったかも知れないが、それでもそのひたむきな誠実さはだれも疑うことはできない。

このような流れの中であって、ランボーは正しく根源的に《反逆》の詩人であった。恐らくは物心ついたときから常に不在の父親から受けた《悪しき血》は、ランボーを生涯放浪を愛する詩人にした。それはいわゆる《火

の氣質) (G・ミシヨ) となつて、自らの周囲に沈湎するあらゆるブルジョワの雰囲気への反逆を醸成する。最初はきびしい母親の教育があつた。日常的な聖書の朗読、日曜ごとのミサへの行列。それにはかれをみごとな模範生に仕上げたが、すでに母親のみどりの眼に(嘘つき)の影を見抜いていたかれは、自ら

日がな一日、かれは服従に汗していた、きわめてかしこい子、それでも暗いひきつりや、顔立ちのいく

つかは
かれのなかにつよい偽善が巣くつていることを示していた。
(「七才の詩人たち」)

と分析している。中学でともに学んだ神学生たちの偽善性が、かれの宗教嫌いを徹底的なものにする。初期の散文『僧衣の下の心』はその何よりの証しであるう。さらにこれに屈折した娘たちへの感情が加わる。本来『不滅のヴィーナス』であるべき女性たちがどんなに墮落しきつてゐることか(「太陽と肉体」)。かれは「水から立ち現われるヴィーナス」で思いっきりそのヴィーナスを冒瀆する。「小説」「みどり亭にて」「いたずらっ子」などはその崩れた偶像への苦い思いをよく表わしている。

それだけではない。住んでいるシャルルヴィルの町はど
うだ。

貧弱な芝生で作りあげられた広場

そこでは木も花みんな ただこじんまりとして

集まる埃っぽい市民たちは 熱さで息もたえだえ

それでも木曜の夜は 争つて馬鹿さかげんの御披露だ

……
(「音楽につれて」)

このような典型的な俗悪の世界にあつて、いい子ぶりを強いられた少年が、官能の世界に流し目をくれること



(ラトゥール筆)

はすぐ想像がつく。「小説」、「二ナの返答」、「最初の夜」と、その例は枚挙にいとまがない。「音楽につれて」の最後のところでは

ほくはすぐぬがしてしまふ、半長も靴下も……、

——すてきな熱に浮かされて身体をみんな思い描く、
そこでかの女らほくを愛な奴と見て ひそひそと語り

合うのだ……

——火と燃える欲望がかの女らの唇にくらいつく……

と熱っぽくうたい上げている。かくて《火の気質》は何かの発火剤があればすぐ爆発しそうになっていたのだ。

一八七一年の一月、ジョルジュ・イザンバールがシャルヴィル中学に赴任した。「風変わりだがきわめて廉直な精神であり、学識ゆたかな繊細な人物であり、いくらか皮肉っぽく、はげしい独立心をそなえていた」(マタラツ、プチフィス)この青年教師との出会いはランボアの全身に火をつけた。母への偽りの服従はみるみるうちに消滅する。この頃、バンヴィルあてに送られた作品のうち、われわれは次のようなみずみずしい作品を見出すことができる。

夏のみずみずしい夕暮れは 小道に迷い出て、
穂先にちくちくさされながら 小草をふみしだいてみ
たい。

夢み心地のほくでも その小草の涼しさは足に感じる
だろう。

帽子もかぶらぬこの頭をそつと風が吹きすぎるだろう。
ほくは何も言わない、考えもしない。
ただかぎりない愛が ほくの胸をひたすだろう。

そして ほくは行くのだ、遠く 遠く ポヘミヤンさ
ながら

自然のなかを——。女をつれたときのようになみちで。
(「感覚」)

イザンバールのすすめる書物を読みあさるランボー。その目ざめた好奇心はとどまるところを知らず、ユゴー、ボードレー、ヴェルレーヌらの作品にふれたあとも見出せる。そこに七〇年八月十九日、プロシャとの戦闘が宣言された。シャルヴィルはいわばフランスの最前線である。ランボーの身うちに鋭い戦慄が走る。すでに自らの故郷もどつていたイザンバールあての八月二十五日づけの手紙は、「先生、しあわせですね。だつてもうシャルヴィルにいらつしやらないんですもの、ほくの

Ultima verba



Et sur la grande punaise de philonthé
 Je me remuante espérant un jour l'appeler
 Des théâtres qu'on peut avoir et les Gatti.
 "Quatre vingt treize", ses beautés et ses
 Cansons une monde, qu'on s'en dit
 C'est et Bronche
 Et l'Académie ou les Murgers s'aiment de
 Mais plus en Cibus et la darompe ma chie
 C'est Gatti et garde alors orquo s'outre?

(ヴェルレーヌ筆)

生まれたこの町ときたら、地方の小都市のなかでもとび
 つきり馬鹿々々しい代物です」で始まり、身体と精神の
 不調を訴え、「これでは死んでいってしまうのです……」
 と結んでいる。そしてこの手紙の直後に第一回目のパリ
 への脱出を試みたのであった（八月二十九日）。

2

この試みは不正乗車による逮捕というみじめな結末に
 終わったが、ひとたび味わった反逆の毒はさらに十月、
 七一年二月と重ねてランボーに脱出をうながし、放浪の
 快感に陶酔させた。幻想と名づけられた「ぼくの放浪」
 に溢れる苦い感動はその頃のランボーの胸の内を十分わ
 れわれにのぞかせてくれる。

ぼくは出かけたのだ 破れポケットに両手を突っ込ん
 で、

コートもまた申し分ない姿になっていた。

大空の下をほつき歩いて おおミュージズよ それで

もぼくは君の家来。

まあまあ どんなすばらしい恋を夢見たことか。

たった一つのズボンには ぽっかり穴があいていた。

—— 夢みる親指太郎のぼくは 道すがら韻をぶつぶ

つふりまいていた。

旅籠といえは大熊座の下。

—— 空ではぼくの星たちが やさしくチカチカ光っ
 ていた。

道ばたに坐り込んでぼくは聞いていた この星たちの
おしゃべりを。

あの九月の心地よい夜という夜に ぼくの額には夜露
が

まるで生命いのちの酒のように感じられたのだ。

また同じ夜な夜な えもいわれぬ宵闇の中で韻をあや
つり

ぼくは片足を胸にひきよせ 破れた靴の靴ひもを

まるでリラと思ひなし 爪びきくり返すこともしばし
ばあつた。

この放浪とそれに伴って厳しさをます母の干渉とは、
それまで注意深く抑えていたランボーの自我を急激に解
放することとなった。反逆の本性ははつきりと目ざめた
のである。それに加えてパリの街の混乱——それはプ
ロシャ軍の占領によつてもたらされたものであつた
——が、かれのなかに新たな興奮を呼び起していた。
爆発が迫っていたのだ。そして、一八七一年三月十八日
が訪れた。それはマタラツソ・プチフィスというごく
《かれの生涯のもっとも重要な日付、つまり、ある決定
的な変換を示した日付》であつた。それはいうまでもな

くパリ・コンミュニンの宣言である。

「自由が身を起したんです、進歩と正義とともにね」
とランボーがある労働者に呼びかけたと直接的に証言す
るドラエーをはじめとして、「世界を急進的に変えよう
とする全意志が突如として集中され、時を移さず身をも
つて労働者解放の意志と一体となった」（『シュールレア
リスム宣言』）と註釈するブルトンに到るまで、このコ
ンミュニンのランボーに対する影響の激しさを云々する
ものは多いけれども、中でも、P・ガスカールの『ラン
ボーとパリ・コンミュニン』はもつとも正確にその実態
を把握しているように思われる。ガスカールはランボー
を百姓から成上つたブルジョワジーの一人として規定し、
その階級からの脱出をつねに求めているものと考えてい
るが、そのランボーにとつて又とない自己解放のきめ手
となるのが、このコンミュニンであつた。すぐれた指導
者を持たないままに、あまりにも無邪気に《自由と正義
のための戦い》に酔い、《創造力の祝祭》としてヴァカ
ンスのように騒ぎ立てたコミュニナルたちが、僅か三ヶ
月で潰滅したのは当然としても、ランボーにとつてはこ
の無秩序がかつこうの自己解放の契機となつたのであつ
た。「ジャンヌ・マリーの手」の興奮した調子はその発
現といつて差支えなかるう。

ジャンヌ・マリーの手はつよい
夏がなめした黒い手だ

死者の手のように蒼い手だ

——ジュアナの手とはこんな手か

……

それはそこいらのいとこの手ではない

工場くさい焚木をたいて

タールに酔った太陽に

大きな額をやかれる女労働者たちの手でもない

それは背ばねをねじ曲げる手だ

機械よりも確実で

馬一頭よりも力強い

それはけっして悪などしない手だ

るつぽのように煮えたぎ

て、
掌全体をふるわせて

その肉が歌うのはマルセーエーズ

讚美歌などはうたうものか

……

愛に溢れたま昼の太陽をうけて

その手はみごとに蒼ざめた

たち上がるバリをかけめぐ

つめたい銃のブロンズの上で

ああ 聖なる手よ 熱狂さめることのない
ぼくらの唇のふるえてさらぬその手よ

時おり君の固めたそのこぶしに

さらめく鎖の輪がきしむ

また 時には 天使の手よ

君の指の色うせるまで

血潮の流されたそのとき ぼくらの身内を

突走るこの異様なふるえは一体何か

しかし、コンミュニオンは無惨に崩壊した。ランボーも

その頃のバリ滞在で個人的にも忌わしい体験を味わった
ように見える。後ほど師のイザンバールに送った「盗ま

れた心」のなかに溢れる苦々しい調子はコンミュニオンの
挫斥がかれに及ぼした傷痕の深さを示して余りない。

ぼくの心はあわれにも船尾でよだれを流している。

ああ安たばこのしみついたぼくのあわれな心

そこへ奴らはスーブのげろまで投げかける。

ぼくの心はあわれにも船尾でよだれを流している。

どつと声を揃えて笑いこけ
奴らがはきかける悪口雑言の中で
ほくの心はあわれにも船尾でよだれを流している。
ああ安たばこのしみついたあわれなほくの心！

3

以上で述べたように、パリ・コンミューンはランボンにプラス・マイナス両面に決定的な影響を与えて通り過ぎて行ったが、このことをかれ自身七一年五月十三日付のイザンパールあて、及び五月十五日付の友人ドメニーあての手紙ではつきりと認めている。いわゆるVoyant（見者）の手紙である。

「詩人」はあらゆる感覚の長期にわたる、広大無辺でしかも理にかなった放埒によって見者となる。愛・苦悩・狂気のあらゆる形式、かれはその精髓だけを維持するために、自らの中のすべての毒を抜みつくす、あらゆる信仰、あらゆる超人的な力をふりしぼっても消しがたい苦痛であるが、それによって詩人はだれにもまして偉大な病院、偉大は罪人、偉大な呪われ人——そして崇高な「学者」となるのだ。なぜならかれは未知に到達したのだから」（ドメニーあて）



1871年のランボン

この「見者」の概念については、その前文に「詩人た
らんとする人間の第一になすべきは自己の認識、それも
完全な認識でなければならぬ」という決意が述べられて
いるために、たとえば師イザンパールの解釈に典型的に
見られるように、きわめて限られた特殊な自己の個性開
発ととらえられ、孤高の精神性の空に飛翔し、ひたすら

超越的なヴィジョンの創出にふける詩人像を産み出して
いたが、ランボーの中に愛と高邁さにみちた《共生・共
同体的抒情》への指向を指摘したP・ガスカールは、か
れはむしろ、見者の中に普遍的な人間に行きつこうとす
る詩人の力業を見ているのだと考える。つまり、現にか
れの生きている世界の中では、すべての感覚の放埒を経
ないかぎり普遍的な人間には到達しえないとランボーは
考えているというのである。したがって、イザンパール
あての手紙に、はつきり「ぼくは今放埒のかぎりをつく
している」と広言したランボーは

「ぼくはいずれ労働者になるでしょう。狂おしいば
かりの怒りがぼくをパリの戦闘へとかり立てるとき、
ぼくをひきとめるのはその考えなのです——あちら
では、ぼくがこの手紙を書いている今もなお、労働者
たちが続々と死んでいます。今労働するということは
ぜつたいしません。ぼくは今ストライキ中です。」

と宣言する。かれはコミュニナルへの共感を通して、詩
人Ⅱ労働者という具体的認識に到達したのであった（因
みに、ランボーはいろいろなところで *travailleur* と
ouvrier、つまり創造的労働者とたんなる労働者とをは
つきり区別している）。

一方、この詩人Ⅱ見者は自らの新しい認識の表出を可

能にする言葉を発見せねばならない。

「かれは人間を背負い、動物をすら背負っている。
かれは自らの発明を感じさせ、踊らせ、聞かせねばな
らぬだろう。もしあちらから持ってくるものに形があ
れば形を与え、それが形のないものであれば無定形を
与えるのだ、言葉を発見することだ……」

その言葉は香りも、音も、色彩もすべてを要約した
魂のため魂のものであり、思想を引かけ引き寄せる思
想のものとなるだろう……」

このような作業をかれは《言葉の錬金術》と名づけ、
その解明に後に『地獄の季節』で一章を与えることに
なる。そこには「一番高い塔の歌」や「見つけたぞ、永
遠を」のような絶唱がいくつか見られるが、むしろ、全
身をひきさくような激しい詩の実現への努力が語られて
いる。

Aは黒、Eは白、Iは赤、Uは緑、Oは青、母音達よ
いつの日かぼくは君たちの誕生の秘密を語って聞かせ
よう。

で始まる「母音」のきらめくような言語、映像の展開
と、その内部を統一的に流れる論理性はこの錬金術のも

つともすばらしい実現であろう。

しかし、ヴェルレーヌとのめぐり会いを準備した「酔いどれ船」はその錬金術のもつとも壮大な展開となる。

.....

潮が狂ったようにひたひた寄せる中で

あの年の冬 子供たちの頭より聞きわけなく
ぼくは走ったノ ともづな解いた半鳥たちも
あれ以上の勝ち誇った大騒ぎは味わわなかった。

嵐はぼくの波の上の目ざめを祝ってくれた。

永劫に犠牲者^{いけにえ}を転がすものと言われる波の上で
コルク栓よりなお軽く十夜もぼくは踊ってみせた
愚かしい角灯の眼をなつかしむことなどついぞなく。

.....

解放の歓喜に酔う「酔いどれ船」はつきつきと展開される風景にあくなき好奇の眼を向けて進んで行く——
ちようどコンミュニオンに憧れてパリに出奔したランボー自身のように——《空をつんざく稲妻も、龍巻も、暗い潮の流れも目にした》し、《雪に輝やく緑の夜も、歌うたう黄や青にめざめる燐光も見られた》。《人が見たと信じるもの》をかれは自分のその眼で見たと歌いあげる。

しかし、さまようにつれて風景は変化する。《さて、ぼくは入江の髪の毛にからまれた迷い子の船、嵐に鳥も通わぬ天空へと投げ出された》と自覚したかれは

だがほんとうにぼくはあまりに泣きすぎた 暁は胸をさす。

月という月は何れも惨酷で、陽^ひはすべて苦々しい、
つらい愛が酔い痴れる思いでぼくの胸をみたした。
ああ龍骨よ碎け散れノ ああぼくは海に沈みたいノ

もしヨーロッパの水を望むとすれば それは
風かおる夕まぐれ 悲しみにみちてしゃがみこむ子が
五月の蝶さながら か弱い船をそつと放つ
あの黒々と冷やかな森の池だ。

おお波よ 一度お前たちの倦怠の中に溺れたあととは
ぼくはもはや棉運ぶ船の流れを追うこともできず
誇り高い旗と炎の中を横切ることもできず
獄船の恐しい眼の下を漂うこともできないのだ。

と悲哀にみちた詩句を閉じるのである。E・ヌーレもこの「酔いどれ船」の告白性についてふれ、「盗まれた心」

と対比しつつパリ体験の傷痕を指摘しているが、この詩にはランボーのコンミュニオンへの失意とともに、新しい詩的冒険への抱負は十分感じとられるであろう。

4

この七一年九月から、七三年七月に到るまでの二年間のヴェルレーヌとの《地獄の季節》は短かいながらもつとも凝縮した形で、二箇の天才を錬金のるつばに突っ込んだ、しかもお互いの根源的な誤解のなかで。ヴェルレーヌはこの混沌の中から『言葉なしの恋唄』や『叡智』という願ってもない果実を産み出すことができた。ランボーはどうであったか。それは『地獄の季節』の苦渋にみちた自己認識とその表現への苦闘の告白であった。妹イザベルの証言もあって、数日の苦悶の呻きから生まれたとされるこの『地獄』はたしかに一見矛盾撞着にみちた書物と思われるが——異教への憧憬とキリスト教への回帰、自己へのつよい自負と果て知れぬ劣等感、美への傾倒に反撥、狂おしい絶叫と異様なまでの静謐など——他のランボーの作品とまったく同様に、さらに奥深くその世界にふみ込むと驚くべき論理性に気づかざるを得ない。

この『季節』は先ずのつけから《電撃的なふるえるよ

うな》散文の序詩から始まる。

かつて、ぼくの記憶がたしかならば、ぼくの人生は祭りだった、すべての心が花開き、すべての酒が流れ出る祭りだった。

ある夜、ぼくは「美」を膝の上に坐らせた。——そしていやな奴だと思った。——そこで悪態のかぎりをつけてやった。

ぼくは正義に対して武装した。

.....

ぼくは死刑執行人どもを呼び集めた、死んで行きながらも銃の台尻に噛みついてやろうとして。ぼくはからさおの刑罰を呼び求めた、砂と血で窒息してやろうと思つて。不幸はぼくの神だった。ぼくは泥の中に寝そべった。罪の風にさらして身体をかわかした。そして気がいみためにひどい悪戯をやつてのけた。

この詩集の急速な調子と自己告白性とを証するために少し長く引用したが、これにつづいて「賤しい血筋」「地獄の夜」「錯乱Ⅰ・Ⅱ」「不可能」「閃光」「朝」「別れ」と八章が展開される。それぞれの長さはまちまちで統一を欠いているように見えるが、よく見ると、ランボーが

自ら選びとつた地獄墮ちの体験とそこからの脱出の試みとがきわめて整然と語られていることが理解される。最初の「賤しい血筋」はその墮地獄の必然性を自他ともに納得させるために、かなりの分量を必要とすることは当然であり、それだけでも自己の純潔にすべてを賭けた若い詩人の生き方は浮彫りにされている。つづいて「地獄の夜」は短かいながら、その墮地獄の実態を鮮明に描き出して展開部を準備し、「錯乱Ⅰ・Ⅱ」に到つて、その結果生じる実生活上の狂気と芸術上の冒険の実験報告が詳細になされ、この「季節」の絶頂部を形成する。しかし、反逆と冒険の「不可能」を知つた詩人は自らの過誤をさとり、さらに新しい人間的な仕事を求めて、「閃光」のきらめきのなかに入り、「朝」になつて「地獄」と縁を切つた《新しい仕事》の誕生を寿ごうとする。かくて「地獄」との「別れ」の時が来た。

流れ入るすべての生氣と眞の優しさとを受け入れよう。
曙が来れば 燃えるような忍耐で武装してほくたちは
輝やく街へと入つて行こう。

終わりの三章の短かさと急速なテンポはランボーの決意の激しさを十分に示している。

このほか、序詩で錯乱の「春」を提示した詩人は「別れ」のなかで《もう秋だ》と宣言し、《慰安の季節》冬を拒否する姿勢を示している。この間を流れるギラつく夏はまさしく「地獄の季節」なのであろう。又、一方、「地獄の夜」のおぞましきは「朝」のよみがえりの新鮮さとはつきり対比され、その間の「錯乱」の体験は一夜のきびしい体験と凝縮された苦悩の深さをつよく浮き立たせるし、又、序詩の《かつては多くの記憶が正しければ……》によつて過去を呼びさました詩人は《新しい時代はともあれひどく厳しいものだ》という現実感をへながら、《曙が来れば……》と未来への時間軸に正確にそつている。かくて「地獄の季節」は精密な構成をもつた《驚くべき心理的自叙伝》（ヌーレ）になり終えているのである。われわれは題名の荒々しさや制作事情の異常さに惑わされることなく、つねにランボーの作品を支えてやまぬ自己認識のきびしさと、正確な論理性を見つめねばなるまい。

5

これからのランボーの生涯については、定めない放浪と砂漠での死の商人としての沈黙しか残されていない。この期間においてもランボー自身の苦痛は変わりなく厳

しいものであったかも知れないが、それを跡づける努力の意味をわれわれが認めうるかどうかが問題なのだ。イヴ・ボンヌフオワなど、一八七五年でランボーの《人生を変えろ》努力は放棄されたと判断し、「私はこの本の中で彼の彷徨ときびしい労働の歳月を語ろうとしない」（阿部訳『ランボー』）といい、「それは運命の私的な性格を尊重したい」からだと言明している。もちろん、M・リュフのように、ランボーの一生はその文学生活も含めて一貫した生き方に貫かれているので、その観点からこれの沈黙を洗い直して見る必要があると説く人々もある。いずれにしてもここではこの問題にはふれず、それに先立ってわれわれに残された詩集『イリュミナシオン』についての考察でランボーの項は終わりたいと思う。

この『イリュミナシオン』（一八八六年刊）はとくに、ド・ラコストの研究によつて少なくとも『地獄の季節』と併行し、それを補完する形で書かれたものであることが明らかにされ、後者をランボー最終の作品とする考えを改めさせたものではあるが、その成立の事情についてはまだまだ完全に解明されてはいない。題名の意味すら『彩色版画集』なのか、『天啓』なのか、あるいは『色塗りの皿』なのかは明らかでない。しかし、この作品集が『地獄の季節』とは異つた視点から描かれていること

はたしかで、この異つた視点を『地獄の季節』で暗示した新しい境地に達したものと見るかどうかでこの書への評価は大きく分れるであろう。

それにしても、この詩集は先ずはじめから通常の意味におけるわれわれの理解を絶するような冷やかな横顔を見せる。一つ一つの言葉がとくに難解なものというのではない。文法や統辞法が特別にひねくれたというのではない。リュウシオンが指摘しているように《統辞的には比較的明らかなのに、意味的にはわかりにくいという。はなはだ奇妙な逆説を見せる》のである。

森に小鳥が一羽いて その歌声に君たちは立ちどまり
頬を赤らめる。

時を打たない時計がある。

窪地があつて白い獣が巣を作っている。

降つて行く聖堂があり 昇つて行く湖がある。

小さな車が雑木林に捨てられていゝ。いやあるいは
リボンをかけられ小道を走つて降る。



コンミューンの女たち

衣装をつけた子供役者の一団がいて、森の端れの街道
を行くのが見える。

そして結局、飢えと渇きに苦しむときは 誰かが君た
ちを狩りたてるのだ。
〔「少年時」三〕

ここに苦渋のあとは見られない。言葉がもつ物質性が
じかにわれわれの胸に響く。紛れもなく自立したものと
しての言葉が展開されている。ふつうの意味での伝達を
拒否しながら、一語々々、揺るぎない表現となつてわれ
われの胸をうつのである。他に同じ例は「人生」「放浪者」
「青年時」など、いくつもあげることができる。まさに「見
者の手紙」にある言葉の生成運動に立ち会うような一種
の爽快さがみなぎっている。この自在さには反撥すら感
じさせるものがある。『イリュミナシオン』への不満は
かえってここから発することさえある。

一方、すでに初期の「谷間に眠るもの」などに典型的
に現われていたランボオの新鮮な視点の移動がこの詩集
ではより自在に發揮される。

水晶の灰色の空。橋の奇妙なデッサン、こちらはま
っすぐ、あちらは曲り、また他のものは降りて来たり、

始めのものの上いろいろな角度で斜めに走ったり、しかもこうした姿形は運河の明るく照し出された別の彎曲部でも同じようにくり返されているが、しかし、すべてはあまりにも長く軽やかなので、円屋根の立ち並ぶ対岸はさらに低く、小さくなって行くのだ……

〔橋〕

「ランボーはここで橋そのものの誕生を描いている」と説く人もあるが、橋の下を船で通りながら眺めるという視点をとれば、この詩節の難解さは氷解しよう。他に「海景」での海と陸との重層的描写、「運動」における船の進行に伴う累進的移動感なども同様であって、ランボーはこのように、つねに自らを動かすことによって事物の通常見られる安定した状態から引きずり出し、その不安な動揺に立ち会うことによって、改めて真に物が生まれ出ることの意味をわれわれに考えさせようとするのである。だからこそ先に述べたような特異な言語の使用もまた必要欠くべからざるものであったのだ。

ぼくは夏の曙を抱いた。

宮殿の正面では、まだ何ひとつ身じろぎするものも

なかった。水は死んでいた……。

最初の挑発は すでにみずみずしく蒼い光輝にみちた小道で、一輪の花がぼくにその名を告げたことだ。

……

この「曙」はランボーにとつての事物の誕生の意味をもっとも鮮やかに描き出している。

このような《生成の場》(J・P・リシャル)に自らを置くためにどれだけの努力が必要であったのか、そしてその努力をかれに強いたものは何だったのか、「イリュミナション」の解釈はここから始まらねばならない。しかし、この詩集はすべてが等質の緊張感と満足感とを与えるものとは限らない、多くの不満をわれわれに残すそれは成立の事情に基づくものであることはいうまでもないが、恐らくランボー自身があまりにも性急に人生を生きようとしたからではなからうか。かれは《忍耐と優しさ》で以って作品をふり返るよりも、身内を走る《火の性質》に自らを焼きつくすことを望んだのかも知れない。

(やまむら よしみ・文学部フランス文学科教員)

連

載

日本中国ことばの来往ゆきまぎ

その42

芝田 稔

解放後の新語について (5)
挨拶用語をめぐって

現在日本で使用されている中国語の初級テキストを見ると、その殆んどに共通している挨拶語の一つに「你好ノ」
「ニー、ハオノ、こんにちはノ」がある。しかも発音がやさしく出来るので、会話のテキストなら冒頭から出てくる馴染深いことばである。このことばは外国人であるわれわれが中国を訪れた際、その案内役として出迎えてくれた初対面の中国人に対して、それを挨拶語としていう場合は適切であると思われる。だが、よく考えてみる

と、この挨拶語のどこかに、よそよそしさが潜ひそんでいるように感じられてならない。「ニー、ハオノ」——耳ざわりのよい挨拶語であるが、これはいわゆる「外交辞令」の範疇に入ることばではないか、とさえ思うようになってきた。いわば上下かみしもを着たことばであって、お互い仲間の不着のことばとは思えないのである。

ところで解放前の中国で「ニー、ハオノ」という挨拶を交わした場面を思い起してみると、たとえそれが外国人と中国人との間柄であつてもお互いに親交のある仲でこそ使えることばであつて、しかも久方振りに出会つた相手に、その健康を確かめ合う思いで互いに発したこと

ばであった。したがってこのことばには、正に文字通りに「元気かいノ」とか「お達者ですか」という情味深いニュアンスが漂っていたのである。初対面の日本人と中国人同士が「ニー、ハオノ」を連発している風景には、そのような深い味わいが湧いて来ない。「外交辞令」ということばを用いたのはそのためである。

では、戦前初対面の場合、どんなことばを用いていたのだろうか。筆者の乏しい体験で恐縮であるが「ニー、ハオノ」と、聞いたこともまた聞いたこともなかった。相手の中国人から最初に出て来る挨拶は：「你来了ノ」ニー、ライ・ラ、よくいらっしやいました」ということばであった。もちろん、これは戦前の中国北方のことばである。その証拠の一つとして『急就篇』を調べてみよう。これはその昔北京官話の入門書として明治・大正・昭和を通じて、これまでに最もよく使用されたテキストである。この『問答編』の最初に出て来る挨拶は、やはり「来了」であるし、先に述べた本来の意味を表わす「你好」は七十九番目に出て来る。ことばは社会の変化に伴って変化するものであるから「みんなが使えば」まかり通って行くのは当然であるが、そのルーツを置き忘れないように心掛けたいものである。

さて、もう少し挨拶用語に拘こだわってみよう。

筆者が北京に住んでいた頃、よく中国の友人宅を訪れたものである。入口の門まで出迎えに来たその友人が最初に発する挨拶は：「ニー、ハオノ」ではなく、やはり「ニー、ライ・ラノ」である。そして応接室か或は彼の個室に通されて落着くと、それは食時けいどであろうとなかうと、必ずといってよい程、こんな挨拶が出る。



「用了飯了没有」こはんいかがですか」

これは単なる挨拶で気に掛ける必要はない。きまり文句の「偏過了」すましたばかりです」で対応すればよいのである。このような曾ての常套語が、今日のテキストから姿を消しているのは当然であるが、中国では依然生き続けている節がある。

日本では挨拶用語の中に、天気を気にすることばが相当にあるが、中国では忌詞として扱われる場合がある。もつとも挨拶用語のことを中国語では「寒暄話」ハンシユアン・ホウ」、読んで字の通り、寒さ暑さの時候にかかわる挨拶用語はあるが、天気——晴れるとか雨が降るとか——を気にして、明日を予測するなどは全くふざけたことばとして受け取られがちである。もしも君が「明日、天気はどうですか」明天天気怎麼樣？」などと聞こうものなら、親しいもの同士の戯言であれば「你知道吧」お前知つとるだろ」とシッペイ返しを食うこと間違いない。他人さまには口を出していけないことばである。

飯茶碗と大鍋・小鍋

日本には「親方日の丸」というありがたいことばがある。中国にもこれとよく似たありがたい、特権的なこと

ばがある。それを「鉄飯碗」ティエ・ファンワン」と呼んでいる。解放後に生れたことばの一つであるが、日常生活に欠くことのできない「飯茶碗」を持ち出しているところが特徴である。何しろ中国では古来「食事」が人生の最も大切で楽しいものの一つであり、美味で栄養価の高い豊富な食文化を築いただけのことはある。

平たくいえば定年まで一家の生活が十分に保証されている職業を指して「鉄の茶碗」に喩えている。具体的にいえば国家机关や大小全ての国营企業に職をもっている人のことを「彼は鉄の飯茶碗で食っている」と羨ましがられているのである。

これに対して「泥飯碗」土で作った茶碗」ということば。これは農村での用語で、職務上安定していない地位を指しており、曾て農村で行われていた集団所有制の職場にいる人たちの待遇のことをいうのである。これと同じ意味をもつが、もう少しスマートなことばに「瓷飯碗」ツイー・ファンワン」がある。

また「金飯碗」チン・ファンワン」ということば。これは良い条件を具えていることを指すのであるが、この条件を十分に活用できないで苦しんでいる人たちを弥次つていうことばらしい。その例文を訳してみよう。

山岳地区は科学技術に欠けているので桑畑の管理は



だめだし、養蚕業も盛んにならない。村人たちは「金の茶碗」を差し出して、物乞い生活をするしかない。金の茶碗を持っていながら、それを役立てない法があるか？ 私は金の茶碗で水だけを飲むような生活はできません。（『光明日報』八七・一一・一一）

なお「紙飯碗」ヂー・ファンワン」は全く安定性のない職業やその地位を指しているのであるが、これは香港辺りで生れたことば。米国では就職と失業とが企業主によつて、いとも簡単に操縦されていることを皮肉つたことばである。

以上のように色々な「飯茶碗」があるが、そのような職にありついでいることを「吃×飯碗」と表現している。曾て上海には「吃白相飯」ということばがあつた。魯迅によれば「白相」バイシアン」とは上海の方言であり、これを共通語でいうなら「玩耍」ワンシユア、遊ぶ、ぶらぶらする、ふざける、わるさする」と同義語である（『准風月談』より）。つまり正業につかず、遊びながら、時にはごろついで生活している者を、このようにいつていたのである。

次に「大鍋飯」タークオ・ファン」を取り上げよう。

これも新語の一つであるが、五〇年代後半になると農村における集団化が進み出した。その頃から農村では「共同炊事」が盛んに行われるようになった。この共同炊事を指して「大鍋飯」といったのが始まりであるが、集団化から生れた共同炊事による平等主義は、村民の待遇まで機械的に一律してしまった。それを指していうようになり、その結果労働者や農民の生産意欲は大いに失われ

ることになった。この悪平等・平均主義をいち早く批判したのは鄧小平の論文『各級幹部は率先して党の優れた伝統を発揚しなければならない』であった。

「大鍋宴」タークオ・イエエン」これは個人が金銭を出さないうで、公金を使って唯食いをする事。

「小鍋飯」シアオクオ・ツァイ」これは共同炊事場で作った手抜き料理のことをいう。例えば最近中毒者が続出しているのは、食堂の「大鍋菜」にその原因がある。十分に火を通していないからだ。（『齐鲁晚报』八八・八・二）

「小鍋飯」シアオクオ・ファン」小さなかまのご飯」とは、大衆向けの大量に炊く飯ではなく、特定の人に留意して作ったご飯のことであるが、転じて特定の人に対する「特別待遇」をいう。また「小鍋菜」シアオクオ・ツァイ」「小灶飯」シアオザオ・ファン」ともいわれている。

「読書」と「読む」の効用

「読書」と書けば日中共通のことばであるが、本を読むにも色々な読み方がある。それを中国語の中から拾ってみると次の九種類がある。

「読書」ドゥシユ」：①文字通り「本を読む」ことで

あるが、②「勉強する」意味もある。「大学で勉強すること」は「在学読書」。

「念書」ニエンシユ」：①声を出して本を読むこと、②勉強すること。何しろ中国では勉強の初めから漢字にぶつかると。昔はまず『千字文』や『百家姓』をテキストとして、それを先生につづいて朗読し、暗誦して漢字の読み書きを覚えさせられたものだ。だから声を出して本を読むことが勉強の始まりであったのである。日本ではお経を唱えることを「読経」というが、中国では「念経」



短評募集!!



短評を書いてみませんか?

最近一年間に発行された本の中で、自分がこれば
 ぜび人にも勧めたい、または、強く印象づけられた
 本の短評を原稿用紙(四〇〇字詰)二、三枚に。

★ジャンルは自由、締切は毎月末。

★連絡先 千565吹田市千里山東3-10-1

関西大学生協同組合本部3F組織部内

「書評」編集委員会

☎ 3387-9998 (直通)

☎ 3388-1121 (内線 4821)

とっているのは、朗読の意をふまえているからであらう。「彼は大学で勉強している」は「他在大学念書」ともいう。

「看書〓カンシユ」…本を見る、本を読むことであるが声を出さずに読むこと。「看小説、小説を読む」「看報、新聞を読む」はその例。但し「念報組」というのがある。これは新聞を読めない農民や労働者に対して新聞の時事ニュースを朗読して聞かせ、彼らの学習を助けるサークルのことで、特殊な名称である。

「観書〓クワンシユ」…本をながめる、つまり「看書」と同じ意味であるが、それよりも上品なニュアンスがある。

る。通常口頭語ではいわない。

「背書〓ケンシユ」…書物をかじる、つまり机にかじりついて勉強すること。

「背書〓ベイシユ」…書物の文章を暗記すること。また「背念〓ペイニエン」は文章を暗誦することをいう。

「品書〓ピンシユ」…日本での「利き酒」「利き茶」のことを「品酒〓ピンジウ」「品茶〓ピンチア」というから、書籍の品定め、鑑定すること。

「味書〓ウェイシユ」…書籍の味わいを識別すること。

さて次に読書の目的について少し触れてみたい。というの「読」について面白い見解をもつ中国文人の文章

が目止まったからである。

それを紹介する前に「読」という字をもう一度調べてみよう。「説文解字」には「読、誦也」また「読、籀書也」とある。つまり「読」と「誦」とは同じ意味であり、「読」という字はすでに大篆の中に存在していたことを明らかにしている。「誦」よりも古い字であることが分かる(注)だけで、あつさりしたものである。

ところがここに紹介する楽子「読」本来の意義(「随筆」九一年第三期)では、その解説がいとも直截で現実的である。

「読」は「言べん」に「売る」、つまり読書人が「言葉」を用いて「売りさばく」ことであり、如何に売りさばくかは本人の才覚によるものである。

面白い理屈であり発見であると思う。中国には昔から読書人を論ずることばとして：「書籍の中にごそ黄金の邸宅や千石の粟がかくされている」というのがある。読書人は皆それを求めて懸命に読書するのだが、結果は黄金の邸宅など霧散してしまい、貧乏人の代名詞となってしまう。元朝の頃読書人であった儒者は、社会の最下位十番目の乞食より一つ上の第九位にランクされたし、また十数年前文化大革命中は、十年余にわたって「臭老九」(九番目の鼻つまみ者)と軽蔑されてきた。そういうい

清末の世相を、そこに活きた読書人を中心テーマとして描いた魯迅の「孔乙己」は、正に楽子が説く「読」本来の意義を踏みはずした見本である。

楽子氏の言によれば、全ての読書人が貧乏だということではない。ただ上手に「売る」か否かが問題である。孔子の諸国遊説は、つまり「言」を「売」り歩いたことであり、魯の国では三司(司馬、司空、司徒とそれぞれ軍事、土木水利、礼教を掌る長官)に次ぐ司寇(刑罰を掌る長官)の位につき、後には「聖人」の称号を与えられた。孟子も同じく諸国遊説に回ったが、時に利あらず仕官もできず「亜聖」の地位に安住するしかなかった。これは「言」の「売り方」によるものだが、最後にどうすればうまく売れるか? という自問に答えて：第一は面の皮を厚くすること、第二は絶対手をゆるめないこと、第三は情勢を見て風向きがいい方につくことの三点を挙げ、これを実践した戦国の蘇秦、漢朝の司馬相如、元朝の方回を例に挙げている。いつの時代も、歴史はくりかえしているように思えてならないのである。

(注) 大篆は周朝時期の漢字の一書体である。秦朝に至り李斯がさらにそれを脱化した字形を小篆という。「説文解字」は小篆を正文としている。



■短評■
ちくま日本文学全集「福永武彦」

福永武彦

筑摩書房／定価一〇〇〇円
(税込)

近年、「ちくま文学の森」、「ちくま哲学の森」の斬新な編集方針と独特の装丁で高い評価を得、話題になった筑摩書房が日本初の「文庫本」での日本文学全集を出版し、これもまた評判になったのは記憶に新しい。「いの森」シリーズの装丁がそのままで上品な雰囲気醸し出されている。作家の選出も井上ひさしや森毅らといった編集協力により、従来とは違った独創的な内容となっている。

る。なかなか入手しにくい作家も多く、今回は、福永武彦を取り上げている。

福永武彦は昭和二十年代後半から晩年の昭和五四年まで活発な著作活動を行った作家である。その著作集は数多いが、現在入手し易い作品は新潮文庫で出版されている主要作品が主である。そのために本書に入っている中・短編小説や詩は今日では貴重なものであろう。

さて、福永武彦の作品は常に死と愛を中心に巡っている。この二つのテーマはあらゆる作品の中に、潜在的、顕在的なものとして一貫している。死のイメージは死に向かいつつある場としてのサナトリウムと死者で直接的に描かれる。生者は死者に縛られ続けるのである。

さて、愛もまた、彼にとっては重い苦悩として描かれる。福永の愛は絶望としての愛である。愛すること

は「幻影（＝幻想）」を追い求めることであり、「喪失」が結末として置かれている。「幻影」としての対象を追い求めた結果、愛は決定的に拒絶される。それは、常に辛辣で痛みを伴う。そして、愛もまた、死への指向性と死者の重みを背負い続けるのである。生に常に付随している死と絶望的な愛というテーマを自虐的なほど追求することで福永武彦は何を描こうとしていたのか。浅はかな考えであるが、私は「救いのない状況の下でこそ、人間は真に自己や生に直面し、苦闘する。それこそが『生きる』ことだ。」と考える。

福永武彦は、現在の小説にはない「救いのなさ」が前面にあり、とっつきにくい。しかし、幻想を追い求める愛の痛みは誰しも持っているだろう。そうした苦しみの内にある人には、ぜひ一読して欲しい作家である。

(川野 旅人)

■ 短評 ■
「他界と遊ぶ子供たち」

青月社／定価一七〇〇円
(本体一六五〇円)
芹 沢 俊 介



最近、いろいろと現代の子供たちの不可解に思える行動や趣向を題材にした本やテレビ番組が増えたような気がする。特にテレビに関して言えば、大人が子供に恐怖を覚えるといった猟奇的なサイコ・ホラーものが多い。

この本を読んで、それらは一種の「子供観」の立て直しなのかもしれないな、とふと思った。

「最近の子供は」、「近頃の若いも

のときたら」、などなど、よく大人が、非難の気持ちを込めて口にする言葉である。しかし、この言葉の背後にある大人たちの子供観は、現代に生きる子供たちにはどうも全くと言ってよいほどあてはまらないようである。消費資本主義を背景とした急速な社会の変化によって、大人たちもっている古くからの子供観は現代では通用しなくなっている。なぜなら、「今の子供は」とは言うものの、そういう変化によって、どこにも「昔の子供」を生み出した生活環境は、存在しないからである。

現代の高度に発達した資本主義社会が生み出した生活環境は、子供たちにあたらしい感性・価値観・行動様式を与え、子供たちを、大人にとって不可解な代物に変えてしまった。一言で言うなら、大人が子供たちを変えてしまった、のだとも言えるだろう。大人がそうした事実を顧みる

こともなく、子供たちを非難するのは自らの行いを非難するのに等しく、本末転倒と言わざるをえない。大人は新しい生活環境をつくり、新しい生活環境は新しい子供をうみだした。そして、大人は子供と深くかわっていかねければならない。それゆえに、新たな社会状況がうみだした生活環境の変化に応じた子供観の立て直しは、現代という時代の要請であると言えるだろう。

そのことをしっかりと認識し、子供観の立て直しをはからなければ、現代の子供たちとのコミュニケーションは不可能であるし、また、子供たちを理解しようとする姿勢なしに、子供論や教育論は論じられるべきではない。

そうしたところを出発点にして、子供観の書きかえのための現状認識、そしてその現状の背後にある数々の問題の提起を目的として、この本は



書かれている。

例えば、一時ファミコンが話題になり、「ドラ・クエ」を代表とするロール・プレイング・ゲームなどが、「資本から有料で与えられた空想のチャンス」、「熱中しすぎて他の事をしなくなる」と批判された。しかしながら、何も子供に責任があるわけではない。ファミコンなる商品は資本（＝大人側）から与えられたのであるし、子供たちから実際に空想す

る機会を奪っていったのは、その機能を十分に果たすことの出来ない家庭や教育機関ではないのだろうか。

この例からも、いかに「現代子供批判」が根拠もなく、本末転倒しているものであるか知ることが出来る。大人側からの子供たちに対する肯定的な関係作り（＝子供側の書きかえ）が出来ていない、子供たちは不条理な非難に苦しむことになる。

今挙げたファミコンの他にも、様

々な例証が取り上げられていたり、心理学的な分析もあつたりしてなかなか興味深い。

現代の子供たちの世界をのぞいてみようと思う人、この本の副題にもなっているが「いま子供たちはどこへむかっているのか？」興味がある人にとつて、この本はよい案内書になるだろう。

（英文学科一回生 川村ありす）

■短評■

国際化のゆらぎの中で

粉川 哲夫

岩波書店 / 定価一六〇〇円

(本体一五五三円)

やみくもな国際化が叫ばればはじめて、日本でも随所に国際化したなと一応は思うようになったのは確かだし、果して深層のところは一体どうなんだろうかと疑念が残る。

本書はこれまで着々と成果を挙げてきたかのように見える日本の国際化も人種や文化の多重性、多焦点性ばかりが概念としてあって、実のところでは多元的な文化交流・コミュニケーションは決して行われようと

はしないという。また、国家からの自由のない都市は都市たりえないとして、日本の国際化は表層的側面ばかりが強調され、深層は国家的な単一統合機能が都市文化としての国際交流の活性化を阻害しているとも指摘が及ぶ。

タイトルからすると硬めの本のように入るが、実にさらりとした感触で、しかも読ませる。否応なく飛び込んでくる都市の現状を著者自ら行動者となって、六本木界隈や秋葉原や横浜はたまた大阪の街を「越境者」の視点でフィールドワークする。そこで見えてきたものは今だ国家は国際化を虚しく振り回しているにすぎず、表層としての記号化された国際化を消費しているだけだということである。

80年代後半にレトロブームが現われたのと期を同じくして、エスニック文化が日本にも流入しはじめた。

日本の「国際」都市の情報消費は物凄いスピードで駆け巡り、都市の一つの気質となった。昨日までライもユッスー・ンドゥールも知らなかった人が、明日には完璧なまでのカルチャー人間になってしまふ状況がここにはある。ところが、レトロが本物志向よりもまがいものがもて囃されたように、エスニックブームも表層的な部分、つまり記号的な趣向性だけが最優先されつづけたのである。国境を越えて交流が始まるとき、全ゆる文化は金銭的価値で置き換えられ、商品として陳列されるのが日本の国際化ではないか。問題は人流や文化流入が主軸の物質的豊かさではなく、精神的つまり心の豊かさが成熟される必要がある。

本書は日頃行くロフトやそごうでも十分、本来の意味での越境することの重要性を垣間見れるよと提示してくれる。

(垣内說雄)

投稿募集のお知らせ

◎投稿募集

読者からの投稿をお待ちしています。

最近読んだ本の書評、内容紹介、批判等の作業を通じて、自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表、論文も結構です。

詳細については、生協本部3F「書評」編集委員会までお問い合わせ下さい。

◎投稿規定は以下の通りです。

- ▼原稿は原則として縦書きで、「書評」誌用の字数、一行二五字、二二行（二五〇字）を一枚と計算します。
- ▼枚数は自由。（ただし編集上の都合で何回かに分けて掲載することもあります。）
- ▼締め切り各月末日。
- ▼原稿には住所、氏名、学籍番号、電話番号を必ず記入

して下さい。

▼原稿は返却しません。必要な場合はコピーをとっておいて下さい。

▼送り先

〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生活協同組合本部3F組織部内「書評」

編集委員会

☎387-9998（直通）

☎388-1121（内線4821）



編集後記

「書評」97号をお届けします。

今号では、「湾岸戦争を問う」と題して特集を組みました。この「湾岸戦争」については、テレビ、新聞、雑誌などのマスコミを通して報道されましたが、皆さんは、そこで何を感じ、何を考えたのでしょうか。

マスコミでは、どの報道でも「極悪なフェイク」という報道が多かれ少なかれあったでしょう。これは、一面ではあっているかもしれないし、一面ではまちがっているかもしれない。しかし、この報道に、私達は影響を与えられていると思います。

例えば、近所に火事があったって、自分が見た時、被害はあまりなかったなあと思っても、テレビで、その報道が「被害の少ない火事」とするか「被害の大きな火事」と報道するかによって、私達の認識は、変わってくるでしょう。

このように、マスコミに影響される私達の価値観は、どのようにつくられるのでしょうか？

季刊『書評』 1991年11月 通巻97号

編集・発行 関西大学生生活協同組合・組織部「書評」編集委員会
連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎388-1121 〈内線4821〉 or 387-9998)
頒 価 250円